
そして傍観者は物語を紡ぐ

高橋亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして傍観者は物語を紡ぐ

【Nコード】

N2170N

【作者名】

高橋亮

【あらすじ】

あらゆるものがつまらなく感じられる主人公葉山駆《ハヤマカケル》はクラスメイトを傍観しながら毎日を過ごしていた。

そんなカケルには一つの願望があった。

自分でも楽しめるようなことがある世界に行きたいと。

叶わない願いだろうと思いつついつものようにクラスメイトを傍観していたが突然カケルを含めたクラスメイトが異世界に召喚されて

！？

これは傍観以外に楽しむことがなかった主人公が異世界で紡ぐ物語です。

傍観者（前書き）

初めまして。高橋と申します。今まではこちらに投稿されている小説を読んでいるばかりでしたが、自分でも書いてみたいと思い投稿させて頂きました。

未熟なため色々と指摘して下さいと有り難いです。
よろしく願います。

傍観者

【プロローグ】

いつも思っていた。自分が楽しめることなんて傍観することだけだ。

母親に言われた。

「もっと積極的になりなさい」

父親に言われた。

「頑張つて勉強すればその分後で楽しく遊べる」

友達に言われた。

「マンガ読んだりゲームやったりするのは楽しいからやってみろ」

けれども、どれもやる価値がないかつまらないものでしかない。

つまらないものに積極的になれる訳がない。たった一つの趣味も積極的じゃなくても十分楽しめるのだから問題無い。

勉強も遊びも僕にとって等しくつまらないものに変わりない。

父親が言いたいことは恐らく辛い勉強から解放された後に遊ぶのは格別に楽しいというものだろう。

けれども、僕にとって勉強も遊びも等しくつまらないものでしかないのだからそれはやる価値がない。

マンガやゲームも作られたものである以上ストーリーが大体予想できてしまい、つまらない。

何故なら、あまりにもたくさんのジャンルができてしまったため完璧に新しいものというのは創作不可能だからだ。

その結果ストーリーが大体予想できてしまう。似たようなものがあるのだからそれも当然だ。

そんな訳で僕は大概のことを楽しいと思えない。

それでも、唯一楽しいと思えるものがあるのだから別にどうでもいいと思う。

そう、それが傍観。人間が起こすトラブルなんかを観察するのが僕の娯楽。

これだけはわざわざ積極的になる必要も勉強をする必要もない。ただ目の前のものをみるだけなのだから。

そして何より人間がその時に抱く感情のままに行動するのは予測ができない。

それに加えて相手や自分の状態、持ち物、場所など様々なもので行動が変わるのだからそれこそ読心術が使えでもしなければ予測は不可能。だから面白い。

この趣味を知る友達には僕のことを根暗だと言うがこれ以外はつまらないのだから仕方ない。

どうせなら僕が楽しめるものが傍観以外に無いこの世界を僕でも楽しめるように欲しい。それかこの世界とは全く違う世界、経験したことが無いものばかりの世界に連れて行って欲しい。

そう、それこそファンタジーな世界に。

この願いが実現されるとはこの時の僕は全く予想出来なかった。

傍観者（後書き）

慣れない作業なので更新が遅かったり誤字や脱字があると思いますが何卒よろしくお願いします。

願望（前書き）

まだ異世界へは行きません。

願望

此処は全国でもトップクラスの進学校黒奉高等学校《こくほうこうとうがっこう》。偏差値七十後半という馬鹿げた数値を誇る学校だ。

この学校は最近できたばかりだが数多くの優秀な卒業生を輩出しており、全国トップクラスの有能さを見せている。

これはそんな平凡とは言い難い学校に通う一人の少年が異世界で紡ぐ物語である。

朝八時

学生が登校する時間であり早い人ならばすでに教室にいる時間。

その時一年B組の教室の最後列にある窓辺の席に座っている僕と葉山駆《ハヤマカケル》は教室にいるクラスメイトを観察、いや傍観していた。

「今日返ってくるテストの平均何点だろ？」「隣のC組は六十点前後だって聞いたよ」

「うわ、それキツくない!？」

「今日合コンやるんだけどだれか参加できる奴いるか？」

「合コン！？」

「女子のメンツは？」

「A組の小坂さんと松本さんと神崎さん」

「うおおー！！レベル高っ！！良くOK貰えたな！？」

「気持ちは分かるけど落ち着け」

こういったところはこの黒奉高校も普通の学校と変わらない。

まあ、その分トラブルが起きると面白くなるので自分としては嬉しいことだが。

それから二十分ぐらい傍観しているとガラツという音がしたので目を向けると丁度担任の先生（興味が無いので名前を覚えていない）が教室に入ってきて来るところだった。

「席に着きなさい」

相変わらずの無表情で告げる。それを聞いてさっきまで騒いでいたクラスメイトが席に着いていく。

起立、礼、着席の後は連絡事項を話し始めた。

正直暇なのでさっきまで傍観していたクラスメイトを思い出す。今日返ってくるテストを気にしていた女子は確かテストがあることを忘れて当日の朝慌てて勉強をしていた。周り（傍観していた自分以外）は自分のことで精一杯で全く気付いていなかったのも理由の一つだが。

友達を合コンに誘っていた男子が挙げた女子のメンツは確か仲良

くなつた男子に色々貢がせていた筈だがあの様子だと知らないようだ。

まあ、面白くなりそうだしつか。

正直自分でも酷いと思う。前者は気付いていた僕が教えれば防げ
たし後者は知っている僕が教えなければ悲惨なことになるかもしれない。
(周りは気付いた様子無し)

けど、教えない。何故ならただ見て楽しむのが僕の唯一つの趣味、
傍観だから。

ふと意識を現実に戻すと丁度担任が出て行ったところだった。

今日の一時間目は先生が出張で自習になっている。そのためクラス
メイトはそれぞれ仲の良いグループで集まって話し始めている。

そして、僕が仲間に入っているグループは 無い。

僕は傍観を楽しめればそれで良いし、容姿も黒髪黒目で身長も平均
の何処にでもいるパツとしない高校一年生 そう、周りに思わ
せている……。

まあそんな訳だから僕みたいな見た目平凡な奴が傍観なんてこと
ばかりしてたら友達ができる訳無いので入学二ヶ月目にしてすで
にクラスから孤立していたりする。

傍観するには都合が良いから問題無いんだけどね。

そう思いつつクラスメイトを傍観する。

さて、このクラスには僕を入れて四十六人が在籍しており、男子

二十五人、女子二十一人といった男子の方が多いという珍しいクラス編成になっている。

これは今年の入試では男子の合格者の方が多かったということである。

この学校は男女共学だが、偏差値を下げないために男子にも女子にも入学規定数が無い。つまり、優秀であれば男子でも女子でもいくらでも受け入れるということだ。

当然、そうなると合格者が多い場合どうするかと思われがちだが偏差値七十後半の中学生がたくさんいる訳が無い。それに万が一大量の入学者がでても一学年につき千人は受け入れられる程の規模と設備があるので問題無い。

ちなみに、今年の新入生は全部で二百三十七人だった。確か毎年平均して大体百八十人ぐらいだったので今年は多い方だろう。

僕としても傍観の対象になる人間は多いに越したことはないしね。

そう思いながらとりあえずそれぞれのグループのリーダーを見ることにする。まず男子で一番大きいグループでは黒城煉《コクジヨウレン》。こいつは新入生代表になっていたぐらい頭が良く、イギリス人とのハーフで金髪碧目というアイドルのような容姿をしている。

だがかなり傲慢なため取り巻き以外のクラスメイトには敵視されている。そのため他のグループと頻繁に衝突するので僕にとって見て飽きない奴だ。

次に男子で大きいグループでは神風純《カンナギジュン》。こいつは頭は普通（この学校では）、見た目は不良だが正義感が強く、黒城のグループと良く衝突している。黒城の傲慢な態度が許せないらしい。

最後に女子のグループ、これはクラスメイトが全員所属しているため一つしかない。何でも黒城から身を守るために集まったとか。リーダーは狭山晶《サヤマアキラ》。見た目は黒髪をポニーテールにしているきれいな女子だが、性格は凶暴の一言に尽きる。この前はちよっかいを出してきた黒城のグループのメンバーを顔の原形が無くなるくらい殴っていた。ちなみに、その男子は一昨日病院で整形手術を受け、なんとか鼻が低くなったぐらいまでには元に戻った。そう、顔は戻った。だが先日的一件事がトラウマになったらしく、女性恐怖症に陥り、入院している病院で看護婦が世話をしに来るたびに奇声をあげて暴れ回るらしい。

ちなみに、その一件後さすがにやり過ぎだと思った神風が狭山に注意をしたが反省をしなかったとかで今度は二人が対立している。なお、黒城は二人とは元々馬が合わないので現在どちらにも加勢しないで様子見をしている。

まあ、自分の取り巻きが虐殺（死んでない）されるのを目の前で見せられてはあまり関わりたくないのだろうけど。

時折僕の個人的な感想も入ったがこのクラスは今挙げた三人が中心のグループで構成されている。どのグループのリーダーも個性的で見ていて飽きない。

それでも時々空しくなる。見ているだけで関わらない（つまらない）ので関わろうとしない）自分が正直イヤになることがある。

だが、傍観以外に楽しめることがないのだから仕方ない。

昔は違った。少なくとも三歳の頃は周りの皆と同じようにゲームをしたりマンガを読んだり絵を描いたり友達と話したり一緒に遊ぶのが楽しかった。

けど四歳の時に突然ゲームがつまらなくなり、五歳の時にはマンガもつまらなくなり、六歳で何で絵を描くのが楽しいのか分からなくなり、七歳で友達と話したり遊んだりするのが楽しくなくなり、八歳から十二歳の間に楽しいことを探しても見つからず、十三歳でたまたま傍観することの楽しさを知り、今に至る。

けどやっぱりもっと楽しめるものが欲しいなあ……。

そう切実に思う。けど、どこか諦めている自分がいる。あれだけ探して一っただけしか見つからなかったのだからそれも当然だ。きつとこの世界には自分が楽しめるものは傍観以外に無いと。そして思う。今の自分がイヤになるということは恐らく傍観もつまらないことになりつつあるのだと。

だから願う。この世界に楽しめるものが無いのならば……。

違う世界に行きたい

そう、思った。いや、思っていた。

異変（前書き）

あと一話で異世界に行く予定です。

異変

「だから少しは反省しろってんだよ!!」

「反省する理由もテメエに言われる筋合いもねえよ!!」

(隣のクラスは今授業中なんだから静かにしろよ……)

クラスメイトの中でも冷静かつ良識な奴(僕は含まない)は恐らくそう思っているだろうが言葉にする奴はいない。いたとすればそれは空気の読めない天然か命知らずの馬鹿だろう。

そう、何故なら……

「明らかにやり過ぎだろうが、いくら何でもあそこまでやることはないだろ!!」

「ハッ!! 私に喧嘩売ったんだから当然だ!!」

このような口喧嘩をしているのがクラスにある三つのグループをそれぞれ治める三人のリーダーの内の二人であり、両方ともかなりの武闘派だからだ。

つまり、下手に介入したらその瞬間に物理的に終わる(片方は実

際に先日一人の人生を終わらせかけた、口喧嘩の理由もその件について）。

正直、狭山が黒城の取り巻きを病院送りにした件に神風が首を突っ込むのは畑違いだ。恐らく御大層な正義感で言っているのだろうが狭山からすれば自分が気に食わないから普段は敵対している黒城の味方をしているとしか見えないのだろう。実際、狭山の雰囲気が悪意になっていく。

「私のことが気に食わないのならハッキリ言え！」

「誰もそんなこと言っていないだろ！？」

…… 本人は気付いていないようだ。

ちなみに、神風の方は狭山のことが嫌いではない。黒城からクラスの女子を守っていることを高く評価している。そして、一人の女性としても……。

多分、叶わない恋なんだろうなあ……。

そう思いつつもちゃっかり楽しんでいる僕である。久し振りに楽しめそうな雰囲気なのでしっかり眼に焼き付けておく。もちろん楽しんでいるとバレないように（下手に見ていたら絡まれて傍観にならないから）。

しばらくすると晶がキレたらしく喧嘩が始まりそうだったので巻き込まれないように離れようとすると、

突然窓から光が入って来なくなった（梅雨の時期なのに珍しく晴れていた）ので窓の方に目を向けると……。

何で外がこんなに暗いんだ？

まるで夜……、いや、すぐ隣の校舎すら見えない程の闇が窓の外を漂っていた。

神風と狭山の口喧嘩を見ていたクラスメイトも気付いたらしく窓の外を見ている。

「なんだよ、これ!？」

「おい、窓が開かないぞ!」

「教室のドアも開かないよ!」

「携帯も圏外になってて通じない!」

「一体どうなってるの!？」

当然だろうがパニックになった。三人のリーダーを除いて……。

「俺たちはドアをブチ破ってみる!」

「私達は窓を割ってみる!」

さすがに喧嘩をしている場合でないと悟ったらしく、神風と狭山はすぐに自分達のグループのメンツを落ち着かせた後、自分達のグループの役割を決めている。ここまで迅速かつ冷静に行動するのはさすがだ。ちなみに、その時黒城は

「テメエら騒ぐ暇があるなら壁をブツ叩け!そうすりゃ隣のクラス奴か先公が様子を見に来る筈だ!」

言い方が傲慢だがそれでもちゃんとグループのメンツをまとめながら指示を飛ばしていた。

そして、クラスの奴らはそれぞれ行動を始めた。たった一人を除いて……。

「ハハッ、何だよこれ？」

僕はただ立ち尽くしていた。無意識に呟きながら……。

「何だこれ？」　今まで求めていたものが今見つかった。

「見つけた……」

渴望していたもの、夢見ていたもの、諦めかけていたもの……。

「やっと……」

傍観よりも素晴らしく、自分から関わりたくなるような……。

「やっと……、見つけた!!」

とても楽しそうなものを……!!

「おい、何やってんだ葉山！お前も手伝え！」

突然かけられた声に歓喜のあまり飛びかけていた意識が戻ってきた。どうやら立ち尽くしていた僕を見て神風が声をかけてきたらしい。

「現実逃避したくなるのは分かるが今はそんな場合じゃないだろ！
」

そう言っ て神風は作業に戻った。勘違いされてるみたいだがどうでもいい（僕は現実逃避をしていたのではなく歓喜に満たされていただけだ）。

なんとなく周りを見ればクラスメイトが悪戦苦闘していた。

「何でこのドアこんなに頑丈なんだよ！」

「いくら何でも強化ガラスを教室の窓に使うとかこの学校は何を考
えてるのよ！」

「ちくしょう、いくら叩いてもだれも来やしねえ！」

どうやら何をやってても無駄らしい。そして、明らかにおかしいこ
とがあると気付いてる奴は誰もいないようだ。

この教室の蛍光灯は点いていないということ……。

先日の喧嘩で狭山に追い詰められ、命の危険を感じた取り巻きは
距離をとって様々なもの（教科書やノート、筆箱など）を投げた。

狭山は投げられたものから掴めそうなものはキャッチし、それ以
外のものは避けるか弾き飛ばした。

そして、徐々に距離を詰め、見事勝利した。

だが、取り巻きは相当錯乱していたらしく、投げたものがいくつ
か蛍光灯に直撃し、照明装置ごと破壊した。要するに、蛍光灯に電
気を送るパーツが粉々になった。

当然、こうなると蛍光灯を変えるだけでは意味が無く、数日ばかりで工事を行うことになった。

空き教室がたくさんあるのでその内の一つを借りて今まで授業を受けていたが、今日は一時間目は自習なのでB組の教室で待機しているように言われたのだ。

理由としてはすでに工事は終わっていて、後は昼に最終チェックをするだけだったのと、今日は珍しく晴れていたので蛍光灯を点けなくても十分明るかったからだ。

考えてみて欲しい、蛍光灯の点いていない今、唯一の光源は窓から入って来る太陽の光だけ。その光も外の闇を見れば入って来れないのは当然。つまり、この教室には光源が一つも無い筈だ。

だが、お互いの顔どころか教室の中が細部まで見えるぐらい明るい。「これはつまり教室のどこかに明かりになるものがあるんだろうな……」

そう呟きながら自分の足元を見る。陰が伸びる方向とは逆の方向に光源はある筈だからだ。

「……真上か」

陰は自分の足元で丸くなっていた。つまり自分の頭上に光源があるということだ。

そして、上を見るとそこには……

光を放つ球体があった。

消失（前書き）

夜中になりましたが更新できました。次回から異世界が舞台になります。それと今までは主人公の視点で書いていましたが、次回からは第三者の視点で書いていきます。理由としては今までの話がプロローグでしたので、本章に入るにあたり、区切りをつけたいからです。

消失

……正直に言っていると僕は後悔している。

確かに何か楽しめるものが欲しいとは思っていた。

だから、さっきまでの状況（B組の教室が突然隔離され、光る球体が出現した）は今まで体験したことがなかったし、何より楽しめなことが起こると思っていた。

けど……。

「いくらなんでもこれは無いだろ」

光る球体から突然伸びて来た触手に捕らえられながら（かなり危機的な状況だが、何故か冷静になれた）も、そう呟いた……。

「おい、放せて！」

「なんか妙にヌルヌルしてて気持ち悪っ！」

「てかなんで光る球体から光る触手が伸びて来るんだよ!？」

更に言えば、さっきまでの歓喜はすでに消えていた（周りのことは無視）。

今までにない状況から何か楽しめそうなことが起きると思ったが、それでも普段の僕ならあそこまで変なテンション（望んでいたものが手に入った云々）には絶対にならない。故に、すぐに元に戻った。

ようするに、さっきは混乱していた。神風に言われた通り現実逃避していた。

今も軽く現実逃避しているが、さっきよりはマシだ。

けど、やっぱりまだ現実を直視できそうにないので、とりあえずクラスメイトが触手に襲われる原因となった出来事を思い返すこと

にする。

あの時、僕は自分の頭上にある球体を発見して固まっていた。教室が明るいことに疑問を持ち、原因を考えている内になんとか普段の僕を取り戻した時に訳の分からないものを発見したことによるショックはかなりキツかったからだ。

（僕何か悪いことしたかなあ……？）

そんなことを考えながらも、視線は球体に釘付けだった。

この時球体に気付いていた僕は固まっていたため、周りに球体の存在を知らせることが出来なかった。

そして、周りも僕以外のある一人を除けば教室から脱出しようと思死だったため、球体に気付く余裕がなかった。

つまり、誰も気付くことが出来なかった。彼が球体の存在に気付き、常に携帯しているナイフを投げつけようとしていることに。

ドスッ！

鈍い音と共に、ナイフが球体に刺さった。

「え？」

何が起こったのか分からなかった。今まで見上げていた球体に突然ナイフが刺さったのだから当然だ。

慌ててナイフが飛んで来た方を見ると、黒城が何かを投げた格好

をしていたので、ナイフを投げた犯人が黒城だと分かった。その黒城の顔に浮かんでいるのは　　歓喜だった。

「よし、命中」

そう、黒城が言った気がした。

なんでナイフを投げたのかは分かる。恐らくあの球体がこの事態の元凶だと考えたのだろう。

だが、それでも現在唯一の光源を刺すのは思慮が浅過ぎる。もしこれで球体が光らなくなったらこの教室は暗闇に覆われるだろう。それにまだあの球体が元凶だと決まった訳でもないのだ。最悪、真つ暗な教室に閉じ込められるという、ホラー映画のようなことになりかねない。

そんなことを考えていたからだろうか？

突然、教室が暗くなった。

「うわっ！なんだ!？」

「急に暗くなったぞ！」

「きゃあああ！今度は一体なんなのよ!？」

当然、教室中がパニックになった。

そして、この事態を引き起こした黒城が声を挙げた。

「騒ぐな、テメェら!! たった今、元凶を潰したところだ!!」

優越感に浸ったような声で、黒城が宣言した。

それを聞いて、全員黒城に注目した。

「おい、黒城。そりゃあ一体、どういうことだ？」

神風が質問する。

よくぞ聞いてくれたとばかりに、黒城が答えようとした。

「ああ、それはな」

だが、答えを言い切ることではできなかった。

突然、目も眩むような光が教室中に広がったからだ。

「うわあ！」

「今度はなんだ！？」

再び、教室中がパニックに陥った。

特に、元凶を仕留めたばかり思っていた黒城のパニックは相当なものだった。

「な、なんでだ！？俺は確かに……」

呆然となってそう呟いていた。誰も聞いてなかったが。

そしてその時、僕は手で目を覆いながら球体のことを考えていた。

（これは……、暴走したのか！？だとしたらやっぱり黒城のナイフが原因か？けど、今はそれどころじゃない！もし本当に暴走したんなら、何が起るか分かったもんじゃない！最悪……、爆発か！？）

つい、悪い方へ考えが行ってしまう。

だが、まるでその考えを肯定するかのように球体の光が強くなっていた……。

（くっ……、やっぱり爆発するのか！？）

そして、とうとう手で覆っていても目が眩む程に光が強くなり、堪らず球体に背を向けた。

（だとしたらまずい。本当に爆発するんだとしたら最悪の場合この教室が跡形も無くなる）

そうならないように祈っていると、異変が起こった。

バシュ！

（え……？な、なんだ！？）

突然、妙な音と共に何か腰を圧迫した。手で触って見ると、何やらヌルツとした感触のロープのようなものが巻き付いていると分かった。

なんだかよく分からないが、ものすごく嫌な予感がして恐る恐る目を開いてみた（すでに光は最初の時ぐらいに収まっていた）。

「うわぁ……」

思わずそう呟いてしまったのも仕方がないだろう。目の前には凄まじい光景が広がっていたのだから。

球体から伸びた触手にクラスメイトが捕獲されている光景が。

そして、今僕らは触手に捕獲されている。

回想を終え、なんとか精神が回復した僕は現実を視ることにする。

「おい、黒城！これはお前が原因か！？」

狭山が黒城に尋ねた。さすがに触手は生理的に受け入れられないのだろう（ちなみに狭山はかなりエロい感じに縛られており、それを見た神風は鼻息も荒く興奮していた）。

それに対して黒城は……。

「知るか！てか何で俺にだけこんなに触手が来てるんだよ！？」

かなり大量の触手に捕獲されながらもそう答えた（他は一人につき一本）。

（うん、明らかにお前が原因だろ。そして多分これ以上刺されないように念入りに縛ろうとしてるんだろうなあ）

唯一、こうなった原因を知っている僕はそう思った。

案外冷静でいられるものだなあ……、と思った瞬間にそれは起きた。

ズボッ！

「は……？」

狭山の口から呆けたような声が漏れた。

それは、一瞬の内に起こった。目の前で突然、黒城が球体に飲み込まれた。

そして次に、呆然としていた狭山も飲まれた。

慌てて周りを見ると、触手と格闘していたクラスメイトが悲鳴をあげる暇もなく、次々と飲み込まれていった。

そしてそれは当然、僕も……。

急に触手に引つ張られたと思った時にはすでに頭から球体に飲み込まれてしまい、僕は意識を失った。

そして、一分足らずで全員を飲み込んだ球体は満足したかのように瞬くと、消えていった。

それに続くように窓の外からは闇が消え、陽の光が再び教室を照らし始めた。

後に残ったのは散らかった、誰一人いない教室だけだった……。

神域（前書き）

更新遅れてすみません。

神域

壁も床も天井までもが白く、中央に祭壇のようなものがある部屋に、黒奉高校1年B組の生徒達はいた。外傷はなく、全員ただ気絶しているだけのようだ。光る球体が引きずり込んだ順に生徒達は出されたらしく、黒城などといった比較的早く引きずり込まれた生徒を土台にした小山のように積まれていた。

小山が完成してから一時間後、最後に飲み込まれたため小山の頂点で気を失っていた一人の生徒、カケルが意識を取り戻したらしく、身動きし、上半身を起こした。

「ここは、何処だ…？」

身を起こしたカケルが呟いた。

「それに、さっきのあれは夢だったのか？」

更に呟くとカケルは光る球体に飲み込まれた後のことを思い返し始めた。

カケルが気付くと、そこは周りが霧に覆われているかのように白い不思議な場所だった。

浮遊感を感じることから、まるで霧の海に漂っているかのようにだとカケルは思った。

霧のせいで何も見えない、そのうえ浮遊感すら感じるという普段のカケルならパニックに陥っているだろうこの状況。しかし、カケルはパニックに陥いるどころか安らいでいた。

（なんだろう、暖かい。それに、眠い……）

霧の海は不思議と暖かく、居心地が良かったため、カケルはまどろんでいた。

――ようこそ、異界の住人――

まどろんでいたカケルの頭に女性の声が響いた。驚いたカケルの意識が少し覚醒するが、女性の声を聞くと霧の海の暖かさと同じように安らぎを得られることに気付き、すぐにまたまどろみだした。

――貴方には、私達の世界、テラに来てもらいます。――

不思議な声は突拍子もないことを言い出したが、今のカケルには反論はおろか質問する気力もない。ただ、霧の海の暖かさに身を任せるだけだ。

――使命を果たした時、貴方の願いを叶え、元の世界に帰しましょう――

カケルはただ、まどろんでいた。

――それでは、貴方をテラに呼び込みます。ですが、今の貴方では使命を果たすには力不足です――

カケルは、ただ聞くばかりだ。

――よって、力を授けます。生きるための力を、使命を果たすための力を、願いを叶えるための力を、元の世界に帰るための力を……、私達、霊神の力を――

突然、カケルに変化が起きた。何か、カケルの胸の奥底にあるものが熱いものに浸食されるような感覚がしたのだ。さすがに驚いたカケルは意識を覚醒させ、胸を抑えようとしたのだが――。

（身体が…、動かない？）

何故か指一本動かすことは叶わなかった。どういうことか不思議な声の主に問い質そうとしたが――。

（声も…、出ない！？）

これにはカケルもパニックに陥る。とにかく動こうとするがカケルの意に反して身体は動かない。そうしている内に胸は徐々に熱くなり、激痛が走った。

（が、あああああ――！！！！）

あまりの痛みにカケルの意識が遠ざかっていく。

――貴方に、ユリウスの加護があらんことを――

意識を失う直前、カケルは自分のために祈る声が聞こえた気がした。

そして、今に至る。

「皆はまだ起きそうにないし、ここがどこか調べてみるか。」

夢のことは頭の隅にやり、まずは自分達がどこにいるのか調べることにする。

さすがに自分達が異世界に呼ばれたということは信じ難く、光る球体も教室でのこともTVのビックリ番組によるイタズラとでも考えた方が納得できる。ならば、ここは番組が用意した場所であり、隠しカメラが設置されているか、どこかにカメラマンが隠れているだろう、とカケルは結論付けた。

「だとすると、あの祭壇っぽい奴が一番怪しいよなあ」

何かしらの小細工があるという気がしたが、注意しながら登れば大抵のものは回避できるだろうという自信ともし引つ掛かってもらえなければならそれで隠れているカメラマンや番組のスタッフが出て来るだろうと思い、カケルは祭壇の頂上を目指して登ることにした。

「しかし、ターゲットを気絶させるとか悪質過ぎるだろ。最近のイタズラ番組は随分過激になったなあ。……訴えたら賠償金ふんだくれないかな。」

物騒なことを考えながらもカケルは祭壇を登っていく。段差は大したことではないが、段数が多いため、登り始めてから五分程してようやく半分登り切ったというところだ。

「いくら何でもやり過ぎだろ。この祭壇っぱいものといい相当金がかってそうだな。」

愚痴りながらもカケルは登り続ける。更に五分程すると頂上が見えてきた。

「やっとかよ、とりあえずこのイタズラ仕掛けた奴ら一発ずつ殴るか、いや、そこも放送されたら面倒くさそうだな。いっそカメラ粉碎してからやるか。」

今までに何も起こらなかったため仕掛けるのは頂上、そう考えたカケルはカメラマンやスタッフが目に入った瞬間、まずカメラを壊した後、仕掛人を殴ろうと決めた。

「僕を巻き込んだこと、後悔させてやる。」

しかし、カケルの予想は外れる。

「なんだ、これ？」

祭壇には誰もいなかった。代わりに様々な武具や防具、アクセサリ、更には本まで置かれていた。

「これが仕掛け…？」

随分妙な仕掛けだが油断は出来ない。相手はかなり悪質な仕掛け人なのだ。

「鎧が襲って来るとか剣が飛んで来るとかポルターガイストもどきとか普通にやりそうだな…。」

もし武具や防具が本物だった場合冗談では済まされない。いつでも対処出来るようにカケルは構えた。

――しかし、何も起こらない。

三十分程構え続けたが動く気配はない。さすがにこのままでは埒が明かないと判断したカケルは置かれているものに近づくことにした。もちろん、何かあったらすぐに逃げられるように腰だめの体勢

でー！。

「しかし、本当に色々あるなあ……。」

近付いても何も起きないため、カケルは置かれているものを調べ始めた。

「アクセサリーとか本物の宝石だったら迷惑料代わりに貰うか」

若干物欲的な眼で調べ続ける。すると、全部で四十六個あることが分かった。

「B組の人数と同じとなると、なにかあるな」

調べ終わるとやることは特にないので置かれているものから自分の好みの品物を物色する。

「やっぱ、なるべく高そうなものが良いよなあ……。」

候補として、先程見つけたアクセサリーの中から一番大きい宝石らしきものが付いたペンダントと飾りが豪華な剣と盾、そして鎧を選ぶとカケルは腰を下ろした。

「剣は武器マニアの爺さんに売るとして、盾は質屋に入れるか。鎧は質屋で引き取るなさそうだしオークションに出すとして、問題はペンダントだな。」

カケルはペンダントの処分方法に悩む。

「オークションも良いが宝石商でも高値で買ってくれそうだし……。いやいや、本物と決まった訳じゃないからな……。」

カケルの中ではすでに売り飛ばすことが確定されていた。

「とりあえず仕掛け人に復讐、もとい脅しをかけないとな。」

どうやら、強奪する気らしい。

「ま、この流れからして宝物を奪い合う高校生っていう番組の可能性が高いし偽物だろ。四十六個あるってことは全員で平等に分けるか誰かが独占するかどうか見たいんだろう。偽物でもマニアやコレクターだったら高値で買ってくれそうだし出来れば多めに確保しときたいなあ。」

それにはまず仕掛け人を潰さなければ、と考えたカケルが立ち上がろうとして着いた手が何かに触れた。

「ん？こいつは確か…。」

見るとそれは置かれている品物の中で唯一みすばらしく、見た瞬間に候補から外した手袋だった。

「こんなの近くに置いといたっけ？」

訝しがりながらもとりあえず手袋を掴むカケル。すると、予期せぬことが起こった。

——ようこそ、大霊神ユリウスの神域へ——

突然、部屋中に声が響いた。カケルが驚愕していると、

「誰だ、俺達をどうするつもりだ！」

黒城の声が聞こえた。どうやら、カケルが祭壇に向かった後意識を取り戻したらしい。

――汝らはそれぞれの霊神から賜った力と祭壇の霊器を用い、使命を果たせ――

だが、声の主は答えない。

「霊神？あれは夢じゃなかったのか！？」

「ふざけんな！とつと出て来い！ぶん殴ってやる！！」

驚愕したように叫ぶ神凧と声の主を挑発する狭山の声が聞こえる。

（オイオイ、あれは夢じゃないのか？）

カケルも神凧と同じ意見を内心で呟く。ただ、声の主の言うことを神凧は鵜呑みにしているようだがカケルはあの夢の内容が本当かどうか可能性を少しだけ思慮に入れた程度だが…。

――祭壇に門を開く、霊器を手にした瞬間始まりの地に送る、そ

して――

次の瞬間、手袋が光り出した。この手袋もまた声の主が言う霊器というものらしい。

（って、待てよ？あの話し振りだと霊器ってのは武器ってことになる。つーことはこのボロっちい手袋が僕の武器になるってことじゃ……！いやいや、ドッキリだろ！手袋の光が消えて呆けたところでネタバレって落ちで……）

だが、強くなっていく光がカケルの不安を煽る――。

「手袋なんて明らかに武器にならんだろ！門らしき光が出てるけどこうなりやこれを投げ捨てて他の霊器を……！」

だが、カケルは失念していた。声の主は門を開く、そして霊器を手にした瞬間に送ると言ったのだ。つまり門は今から開くのであり、声の主が説明を終える前に光り出した手袋の光は門ではない。では、門はどこにあるのかというと――。

バシュ！！

――カケルの背後にあった。最初に自分達を引きずり込んだものとは違い青く光っているがそれ以外は変わらない。

「――そう、今カケルに巻き付き、引きずり込もうとしている触手もまた……。」

「触手から離れるおお――！――！――！」

その言葉を最期にカケルは旅立った……。

迷宮（前書き）

短いです。

迷宮

「はぁ、はぁ、はぁっ……!!」

洞窟の中を一人の男が走る。一心不乱に何かを振り切るかのように。

「はぁ、！っがぁ」

だが足がもつれて倒れ込む。

「しまっ！!!」

慌てて起き上がりつつ後ろを確認するも、すでに手遅れだった。

「う、うわぁぁぁー!!!!」

男は、追跡者に追い付かれ、命を奪われた。

「あー、クソ！ドッキリじゃなくて現実かよ！」

カケルはたった今仕留めた人型のトカゲ人間を見下ろした。

始まりは三十分程前のこと……。

カケルは気が付くと洞窟の壁に寄り掛かっていた。そして、顔をあげると目の前に剣を振り下ろそうとしたトカゲ人間がいたのだ。とっさに転がることで無傷で済み、すぐに起き上がって相手と向かい合った。

「くかかか！ 装備も身に着けずにこの迷宮 ダンジョン に潜り込むとは愚か者よ！」

トカゲ人間は笑う。

「だが喜べ、貴様はこのリザードマンたる私の……」

次の瞬間、カケルは動き出した。

「ドツキリも大概にしゃがれこの悪質悪趣味仕掛人があああああ！！」

カケルのドロップキックが自らをリザードマンだと出張する怪人物の顔を捉えた。

「ゴフアアアアア！！」

リザードマンは吹き飛んだ。

「デメエ、人のことをこんだけコケにしといてドツキリで済むと思っ
てねえだろうな、ああ！？」

今までの不満をリザードマンにぶちまけようとするカケル。

「この劣等種が！細切れにしてや……」

吹き飛ばされたがすぐに立ち上がったリザードマンが怒りのままにカケルを切り刻もうとした、しかしあることに気付き頭が冷える。

「あれ、私の剣は……？」

先程のドロップキックで剣もまた吹き飛ばされたらしい。問題は、どこに吹き飛ばされたのだ、とそこまで考えたリザードマンは殺気を感じる。そう、それこそ自分の最期を予感させるような。

シュン、ヒュン、ヒュヒュン……！

何かが空気を切る音が聞こえてリザードマンは凍り付く。

最悪のパターンを想像し、違っていて欲しいと祈りながらも音のする方を向くと。

ブォン、フォン、ヒュォン！

自分の剣を片手で振り回す笑顔のカケルがいた。

完全に凍り付いたりザードマンに対してカケルは告げる。

「とりあえず、死んどこうぜ……。」

事実上、死刑を告げられたりザードマンはすぐに身体の自由を取り戻すと、カケルに背を向けて全速力で逃げ出した。

そして、今に至る。

「つーかマジでここどこだ？トカゲはダンジョンとか言ってたがどのみち出口探すのが面倒なことには代わりねえし……。」

カケルはぼやきながら手に持っているものを見つめた。

「トカゲの死体が消えてコインとアイテム残されるってこのゲームの中だよ……。」

トカゲの死体は目の前で光の粒になって消えていき、後には何枚かのコインと二つの赤いボールが残っていた。

「しかし、トカゲの死体が消えてくれて助かったな……。おかげでなんとか吐かずに済みそうだ……。」

今まで傍観してきたことの中には流血沙汰も普通にあったが、さすがに死体を見たことはないし、ましてや自分が誰かを殺すということもなかった。

「とりあえず、ゲームの中に迷い込んだとも思っというの方が正気

を保てそうだな……。」

意識の切替えが終わると二つあるボールの内の一つを掲げる。

「ゲームだとかこういうアイテムは掲げるか地面に叩き付けると効果があるんだが……。」

しかし、掲げても何も起こらない。

「なら、叩き付けるか」

今度は地面に叩き付ける。

すると、ボールは赤く輝き、次の瞬間魔方陣が出現した。

「よく分かんねえが入ってみるか……。」

短い間に今まで自分の中にあった常識が壊れかけたカケルは魔方陣程度では揺るがず、そのまま躊躇なく入っていった。

そして、魔方陣が輝くと、カケルはダンジョンから消え去った

「ハハハ、こりやすげえや。」

カケルがいなくなってから十分程して祭壇に着いた黒城達は靈器を選んでいた。

「この剣は俺様にこそ相応しい。」

黒城はカケルが目をつけていた剣を選んだ。

「この鎧はなかなかだな。」

神風はカケルが目をつけていた鎧を……、

「この盾ならあのクソヤロウをぶっ潰せそうだ。」

狭山はカケルが目をつけていた盾を選んだ。

「俺様が最初に願いを叶えてやる。」

「願いを叶える以前にあたし達をさらったクソヤロウをぶっ潰す」

黒城と狭山はそれぞれの決意を胸に秘めて旅立つ。そして、神風は……、

「ま、待つてくれ狭山！こういう時こそ力を合わせて……。」

狭山と一緒に行動しようとしたが、見事に置いて行かれた。

黒城と狭山の派閥の人間は慌てて靈器を選び、後に続く。神風はしばらく呆けていたが我に帰ると慌てて鎧に触れ、狭山を追った。

また、すでに選り終えていた神風の派閥の人間も後を追った。

誰もいなくなった祭壇。しかし、まだ門は開いていた。

マスター、今貴方の元に

幼い少女のような声が響く。

すると、突然祭壇で何かが金色に光り始める。

そしてその何かは門に飛び込んだ。

光る何かを飲み込んだ門は役目を終えたのか閉じていき、やがて消滅した。

こうして、祭壇の神域には静寂が満ちた……。

都市

ここは、迷宮都市ウィザニア。迷宮 ダンジョン を中心に作られた都市だ。冒険者がダンジョンから持ち帰るアイテムを買い取ったり探索に必要なアイテムを売る商店の他に武器屋、防具屋、鍛冶屋などが多数存在している。

冒険者は基本的にそれらの店で必要なものを揃えたり、ダンジョンで得たアイテムを換金する。それが済むとウィザニア行政から与えられたそれぞれの宿舎専用の酒場で飲むか娼館から娼婦を買うなどして夜明けまで過ごす者が多い。

ウィザニアが出来た頃の冒険者はそれぞれで確保した宿屋に泊まり、気にいった酒場や娼館に通うことが普通だった。

だが、ウィザニアを訪れる行商人が同じ宿屋に泊まっている冒険者に絡まれ、最悪の場合殺されるといった事件からウィザニアと交易をしようとする都市や商人がいなくなることになった。

また、酒場では冒険者にいつ絡まれるかという恐怖から安心して酒が飲めないという市民からの不満と、他の都市への移籍許可申請が行政に寄せられた。

娼館もまた冒険者から被害を受けており、気にいった娼婦を自分達の奴隷にしようとする者が出て来た。結果、いくつかの娼館が潰れたり、気にいった娼婦を奪い合う冒険者の争いに市民が巻き込まれる事件が多数発生した。そして当然、行政に不満と移籍許可申請が寄せられた。

ウィザニアは冒険者が持ち帰ったアイテムを売ることでも得た利益で食糧を買い取ることでも成立っている。つまり、交易が出来なくなるということは自給自足が出来ないウィザニアにとって致命的な問題なのだ。

また、市民がウィザニアから出て行くということも致命的である。ウィザニアという市民とは冒険者を相手に商売をしている者達を指

す。つまり彼らが出て行くということはウィザニアの終わりを意味するのだ。

これに焦った行政府はいくつかの条例を定めた。

冒険者には順位 ランク がつけられる。

冒険者は行政府が提供する施設を基本的に使用すること。

なお、ランクによって提供される施設は変わり、ランクが高ければ高い程優遇される。

ランクは功績によって与えられるポイントの合計で決められる。

市民及び行商人への危害はもちろん、冒険者同士の争いもまた厳禁。一方的に危害を加えられたために反撃した者は正当防衛として認められ、自衛した市民及び行商人は相手の全財産を賠償金として得ることが出来る。冒険者が自衛を行なった場合、相手が市民及び行商人なら相手の全財産を、冒険者なら相手のポイントの十分の一を得ることが出来るが、相手の財産は争ったことで生じた周囲への被害、すなわち建物の修繕や怪我人の治療費にあてられる。これらの条例によりウィザニアはなんとか危機を脱し、これまで特に問題もなく栄えてきた。

そう、これまでは……。

ウィザニアの中心部、迷宮から一人の少年が出て来た。ウィザニアでは見かけない真つ黒な服装、両手には使い込んだ手袋が着けられ、刃渡り八十cm程の剣を担いでいる。

そう、カケルだ。

「あゝ、なんとか出てこれた……。」

魔方阵に飛び込んだカケルは気がつくや体育館ぐらいの広さの部屋にいた。部屋の中に自分以外に何人かの人間がいることを確認したカケルは、どこかに移動しようとしているグループを見つけ、後に付いて行くことにした。

「今日の成果はいまいちだったな。」

「ま、こんな日もあるって！それより宿舎で飲もうぜ。今日は俺達一つ星のところにもランティスの酒が回って来たってよ！」

「そいつは良い！いつもあそこの酒は二つ星や三ツ星の連中に回されるからな……。」

「あたしは早くお風呂に入りたいなあ……。」

会話の内容から彼らが出口を目指していることが判り、カケルは安心した。

「しかし、最近は早死にする新人が多いよなあ。」

「ま、功績挙げてポイント稼がないとランク上がらないから気持ちちは分かるけどな。」

「死んじゃったら意味ないのにね。」

「ったく、過ぎた贅沢は墮落に繋がるってのに若い奴等は……。」

「それ、俺達は年寄りってこと？」

「ヒドッ！あたしはまだ二十代だよ！？」

出口に着くまで暇なカケルは目の前の三人の会話を盗み聞きして情報を集める。

「ま、ウィザニアは実力主義だから仕方ないんだけどな。」

カケルは、今向かっているのはウィザニアという場所だということが判った。

「お、着いたな。そんじゃ、一旦解散して宿舎に集合ってことで。」

「またな。」

「ちゃんと換金とかしときなさいよ。」

出口に着いた三人はそこで別れる。

そしてカケルもまた三人に続くように出口から外へ出た。

「しかし、ダンジョンが町の中にあるとかねーだろ。」

ダンジョンから出て徒歩二分程度の場所にあつた換金所らしき場所に向かうカケル。換金の他にも情報を仕入れるつもりだ。

「いらつしゃいませ。」

換金所のドアを開けるとカケルより少し年上ぐらいの女の子に声をかけられる。

「換金をお願いしたいんだけど、ここで出来ますか？」

「ええ、換金所ですから出来ますけど…。」

カケルの言葉を不思議に思う店員。

「よかったあ。僕このウィザニアに初めて来たし他の換金所は混んで困ってたんですよ。」

無難な言い訳をするカケル。

「それは、大変出したね。ウィザニアに初めて来る人は大体そんな感じですよ。」

続くカケルの言葉に納得する店員。

「じゃあ、換金お願い出来ますか？ここでの活動資金が欲しいので。」

「

あ、はい。何を換金しますか？」

特に不自然なく話を進めて行くカケル。

「この銅で出来たコインなんですけど…。」

カケルは、財布に入っていた十円玉をカウンターに乗せる。

「これは、かなり細かい彫り物ですね。」

十円玉を手にとって見つめる店員。

（このままウィザニアの外から来たって設定で押し通そう。さっき

手に入れたコインは通貨か判らないから換金には出せないしボールも今後ダンジョンに潜るかもしれないことを考えると売る訳にはいかない。」

店員が十円玉を鑑定している間に今後の方針を決めるカケル。

（さっきは暴走状態だったし相手が油断していたから勝てたけど今後モンスターを相手にして僕が生き残れる確率は低い。何より暴走状態は予想外のパニックに遭遇した理不尽に対する限界を越えた怒りが原因だから簡単にはなれないし……。）

自分の暴走状態について熟知しているカケルはそう都合良く暴走出来ないということが判っている。

（とりあえずここじゃ使えそうにないお金は売っちゃおう。）

すでにここが自分が生まれ育った世界ではないことを自覚していたカケルは財布の使えそうにないあちらのお金をつって資金を得ることにしていた。

（僕、基本的に傍観主義なんだけどなあ……。）

自分の境遇を嘆くカケル。

「これだと大体千エンぐらいですねえ。」

鑑定を終えたらしい店員の言葉に驚愕するカケル。

（千円！？それは十円玉だぞ！？）

価値が百倍になったことに驚愕するカケル。

「それにしてもこれ随分と珍しいコインですねえ。」
しかし店員の言葉を聞き、あることに気付く。

（もしかして単位の名前が同じなだけか？）

自分の勘違いかもしれないと考えるカケル。

「それで、換金しますか？」

カケルは一旦考えることを止め、今は店員とのやり取りに集中することに決め、財布から他の十円玉を取り出す。

「あ、それならこれ全部お願いしていいですか？」

取り出した十円玉をカウンターに乗せるカケル。

「うわ、他にも持っていたんですか？え〜っと、全部で十枚だから一万エンですね。」

店員は十円玉をカウンターの下にしまい込むと切手ぐらいの大きさの鉄板を一枚カケルに渡した。

「どうも。後出来ればウィザニアのこと教えてくれませんか？」

鉄板を受け取ったカケルはもう一つの目的である情報を聞き出そうとする。

「それでしたら、こちらのガイドブックを差し上げます。」

店員はカウンターの下から厚さ一c m程のA4サイズの冊子を取り出した。

「こちらはウイザニア初心者のために無料配布されていて、施設やお得な情報などが載っています。」

冊子を受け取るカケル。

「ありがとうございます。それでは、機会があつたらまた来ます。」
「毎度あり〜。」

店を後にするカケル。

「ふう、とりあえずこのガイドブックで情報は得られるか…。」

カケルは落ち着いて冊子を読むために人が少ない静かな場所を探す。

「お、この公園とか良さそうだな。」

カケルがダンジョンから出て来た時にはすでに夕刻であつたため、公園には人影が少ない。カケルは公園の中心に設置されているベンチに腰を下ろして冊子を読もうとするが、あることに気付く。

「そつといえはこの世界の文字って読めるのかな……。」「
試しに冊子のページ目を開くカケル。」

「うわぁ、これは無理だな。」

冊子には見たこともない文字が使われていた。それはまるで社会の

教科書で見た象形文字のようで、色も黒以外に赤、青、黄色、紫、緑……といった様々な色が使われていた。

「あゝ、目がチカチカする。」

カケルは冊子を閉じる。

「けどどうしよう、せめて宿泊施設の場所やここでの通貨の価値が判れば良いんだけどなあ……。」

ため息をつくカケル。しかし、天はカケルを見捨てなかった。

「宿屋ハココカラ正面二向カッテ四十分程歩イタトコロニアリマス。マタ、ウィザニアデノ通貨ハエン。十エンデ薬草ガーツ買エマス。ナオ、先程述べタ宿屋ハ一泊食事付キで千エンデス。」

「うわあ!？」

突然聞こえて来た声に驚くカケル。声の発信源に目をやると、ガイドブックが喋っていた。

「ず、随分便利なガイドブックだな……、まあとりあえず知りたいことが判って良かった。」

初めこそ驚いたものの字が読めないカケルにとっては有り難いことには変わりなく、宿屋に着くまでの間に出来るだけ情報を聞き出そうとする。

「それではこれが部屋の鍵になります。チェックアウトは明日の夕方までになっておりますので、お間違えのないようにお気をつけ下さい。」

公園を出てから四十分程して宿屋に着いたカケルは一泊することにしていた。

「とりあえず欲しい情報は手に入ったな……。」

ガイドブックから必要なことを聞き出したカケルは部屋のベッドの上に横になりながら今後の方針を決める。

「死ぬ可能性が高い冒険者はなるべく避けたいけど、どっかの店で働くにしても字が読めなきゃ話にならないだろうなあ……。」

ウィザニアの店で働くには字が読めることが必須であり、読めない人間は冒険者が行政府による日雇いのバイトをやっている。前者はともかく後者は暇潰しのためにやる者が多く、賃金が少ない。何より回数も月に五回程度しかなく、とてもまともに暮らすだけの収入は得られないのだ。

「まあとりあえず今日のところは寝て明日考えるか……。」

疲れをとることを優先し、夕食も食べずにそのまま眠ろうとするカケル。

「せめてあの霊神が言ってた力と使命ってのが判れば今後の方針が決まるんだけどなあ……。」

こうして、カケルの異世界生活一日目が終わった。

夢と少女

気が付くとカケルは公園のベンチに座っていた。

（ 此所は、…？ ）

突然のことに混乱していたがすぐに見覚えのある場所だと気付く。

（ 此処は、昔よく遊びに来ていた公園じゃないか……。 ）

カケルが幼い頃によく遊びに来ていた公園だった。

（ なんで此処にいるんだ？ あれは夢だったのか？ ）

悩むカケルだが暫くすると疲れたように溜め息を吐いた。

（ まあ夢なら夢で良いか。 そもそもあんな非常識的なことを現実だ
と思う方がおかしい。 夢とはいえ久し振りに面白いと思えたのだから
それで良いか。 ）

結論付けるとカケルは公園を見渡す。

ブランコに砂場、滑り台にジャングルジム。 どれもカケルが遊び
に来ていた時のままだった。

（ それにしても懐かしいな。 あの時はどうなことでも楽しくてたま
らなかったんだよなあ……。 ）

昔を懐かしむカケル。今でこそほとんどのものには興味を抱かなくなつたが幼い頃は人一倍好奇心旺盛な子供だったのだ。

（今の僕からは想像もつかないけどな……。）

過去の自分と今の自分を比べて思わず自嘲するカケルだった。

（にしても夢だつてのに何も起こらないな……。）

ひとしきり自嘲した後、ふと気になり出す。カケルの知識だと夢とは自分の隠れた願望だとか現実で恐怖したことだとかが出て来るといったものだった。

（ガキの頃の公園が出て来たつてことは僕は昔に戻りたいのか？）確かに今のように退屈な日々を過ごすぐらいならば昔のように好奇心旺盛な自分に戻るのも悪くないとカケルは思った。

だが。

（馬鹿馬鹿しい。）

カケルはその考えを否定する。子供はいずれ大人になる。そしてカケルはすでに高校生だ。

（受験まで体験しといて何考えてんだか。）

カケルはもう将来の進路を考え始めなければならない年頃なのだ。それなのに子供に戻りたいとはいくらなんでもないだろうとカケルは苦笑する。

カケル

カケルの耳に突然声が聞こえてきた。そしてそれはカケルにとって聞き覚えのある声だった。

（これって確かあの霊神がどうか言ってた声だった気が……）

同じ夢を二回も見ることなんてあるのかとカケルが悩んでいる間にも声は話を進める。

この地での貴方の使命は胸にある聖痕を六つに増やすことです

声はそう告げた。

（聖痕？）

自分の胸にはそんなものなかった筈だとカケルは別のことで悩み出す。祝福の際に刻まれた聖痕にはすでに力が宿っていますが、それ以外の聖痕は霊器で触れることで力が宿ります

悩むカケルを余所に話は続く。

聖痕は魂が強くなるたびに刻まれていきます

（魂が強くなるってどういうことだ？）

魂が強くなるとは一体どういうことなのかカケルは疑問に思い、質問しようとするが……、

（また声が出ない！？）

質問することは叶わなかった。

では、また会いましょう。貴方にユリウスの加護があらんことを

その言葉を最後にカケルは夢から覚めた。

「夢じゃない、か……。」

ベッドで横になったままカケルは呟く。窓の外はまだ少し暗く、明け方のようだ。

「とりあえず霊器と聖痕とやらを調べますか。」

ベッドから起き上がるとカケルはシャツのボタンを開け、胸元を確認する。

「確かにそれらしいのがあるな……。」

聖痕だと思われる痣がそこにはあった。
しかし。

「なんで二つもあるんだ？一つだって言ってた気がするんだが……。」

痣は文字のようなものが向かい合うように右と左に刻まれていた。
カケルは悩んだがひとまず置いておくことにし、ポケットから自分の霊器である手袋を取り出し、はめた。

「見た目がボロっちいこと以外は普通の皮手袋だな。」

改めて手袋を見るも特別な何かがあるとは思えないカケルだが、物は試しと聖痕に手を当てる。
すると。

「な、なんだあ！？」

聖痕と手袋が共鳴するかのようには輝きだした。

「おいおい、ホント何処のRPGだよ……。」

光が治まり呆然と呟くカケルの眼には新品のようになり指の関節の部分が鉄で覆われた、もはや手袋ではなくガントレットと呼ばれるものになった自分の霊器と胸の聖痕と同じものが縁に刻まれた一枚の手鏡が映っていた。

呆然としていたカケルだがやがて我に返ると変化した自分の霊器を見る。

「見た感じだと肘の少し下まで覆うタイプのガントレットだな……。」

先程までの手袋を新品にし、指の関節と手首から下を鉄で覆うようにしたものといった感じで、手の甲や指の関節と関節の間は皮のままだ。

「けど右手だけってのもなあ……。」

カケルの霊器は右手用しかないので左手の方は何も防具がない。ガントレットになった霊器はそれなりに重量が増しているため装備するとどうしてもバランスが悪くなる。これはダンジョンに潜り、命懸けの戦闘をするうえでは致命的である。

「昨日トカゲ人間から手に入れたこの剣を左手に持てばなんとかするかもしれないけど僕は右利きだから右手の方が振り回しやすいしなあ……。」

テーブルの上に置かれている昨日ダンジョンでリザードマンから手に入れた、というより奪った剣を見ながら溜め息を吐くカケル。さすがに抜き身では持ち歩くのに不便なためダンジョンを出る前にポケットの中にあつた包帯を巻き付けてある。包帯は手当て以外にもロープ代わりに使うことが出来て何かと便利なのでカケルは普段から持ち歩いている。

「何にせよとりあえず腹ごしらえしてから考えるか……。」

カケルは昨日、逃走するリザードマンを追いかけて回して倒すという重労働をしたにも関わらず食事をとっていないため空腹であり、考えるより先に宿の食堂で朝食をとることにした。そうと決まれば、とカケルはベッドから起き上がる。

「よつこら、せつ……と！ふう……、ん？」

しかしカケルはそこで違和感に気付き、眉を顰める。いや、むしろあるべき違和感がないということに気付く。

「筋肉痛がない？昨日は暴走状態で走り回ったのに？」

ここでカケルの暴走状態について説明しておく。カケルの暴走状態とはカケルの身に降りかかる理不尽に対する怒りと理不尽に抗おうとする本能が起こす状態であり、俗に言う怒髪天をついた状態だ。ただ、カケルのこの状態は少々変わっており、理不尽をもたらした相手を叩きのめす際に振るう力が普段のカケルからは到底想像もつかない程に強く、過去には蹴りで電柱を砕いたこともある（なお、

その際力ケルが叩きのめそうとした相手は偶然避けることが出来た蹴りがもし自分に当たっていたら目の前の電柱のようになっていたかもしれないという恐怖から気絶した）。しかし、普段の力ケルでは出せない程の力をどうやって出しているのかというと単純な話、ズタズタになる程筋肉を酷使しているのだ。要は、人間が普段自分の身体を壊さないように制限している力、いわゆる火事場の馬鹿力を発揮している状態である。すると当然筋肉が切れた状態、つまり筋肉痛になるのだ。そのため力ケルは暴走状態の後三日間は筋肉痛に襲われる。

しかし今回は筋肉痛が全くとっていいほどなく、それが違和感の原因である。

「それにむしろ身体が軽い気がする……。」

試しにストレッチをしてみると痛みがないばかりか身体が昨日までよりも遥かに軽くなっていた。

「一体何でだ？ 霊神の祝福とやらで上がったのか？」

霊神がくれた祝福が自分の身体能力を上げたのではないかと力ケルは考える。
だが……。

「いや、それなら昨日の時点で上がっていないとおかしいな……。」

そう、霊神の祝福が原因ならば授けられた時点で上がっていないければおかしい。上がったのが今日となると原因は。

「この聖痕、か……。」

自分の胸元にある黒い痣に眼を向ける力ケルだった。

「お待たせしました。アクラのソーセージとブトパのベーコンのモーニングセットでございます。どうぞ御ゆっくりお召し上がり下さい。」

カケルの目の前にはパンとサラダ、ソーセージにベーコン、そして果物がある。

ストレッチを終えたカケルは朝食を食べに宿の食堂に来て、メニューに載っていたモーニングセットを頼んでいた。目の前にあるモーニングセットは値段が五エンという安さであったため注文したのだが……。

「注文……ミスったかなあ……。」

今後のことを考えて金を節約しようとなるべく安いものを頼んだ時の自分をカケルは殴りたい気分になった。

「デザートらしき果物が形は桃なのに緑色なのはまだいい。けど紫色のソーセージとか白いベーコンとかなんだよ……！」

突然叫び出したカケルに周囲の客は眼を向ける。さすがに気まずくなったカケルは咳払いをしてごまかした。

「食うしかないのか、これを……。」

意を決してナイフとフォークを手取るカケル。
その時。

「えええー！ー！！アクラのソーセージとブトパのベーコンセット
もう無いの！？」

突然、食堂に声が響いた。カケルが声のした方向に眼を向けると
。

「そんなあ！どうにかしてよ！」

「悪いねえお嬢ちゃん。ついさっき売り切れちゃったんだよ。材料
もないから今日はもう無理なんだ。」

「ああゝゝゝ、もつと早く起きて来れば良かったあ！」

カケルと同じ年頃の少女が食堂のおばちゃんに何かを訴えていた。
どうやらカケルが頼んだランチセットを作って欲しいらしい。

「まあ同じ値段でタタル肉のシチューセットをサービスしてあげる
から我慢してくれよ、ね？」

「ううゝ、はあゝい。」

どうやら値段が上のセットをサービスしてくれることで納得したら
しい。声には諦め切れないという不満が込められていたが。

「ほら、持っていきな。」

「ありがとございます……。」

少女がシチューセットを受け取っていた頃カケルはすでに少女から
興味を失い自分の食事に眼を向けながらコップの水を飲んでいた。

例え目の前の食べ物が壊滅的な味でも舌が潤っていれば多少はましになると考えたのだろう。

「ん、んぐ、ぐ……、プハア！よし、いくぞ！」

カケルの顔はこの世界に来てから一番真剣なものとなっており、異様な迫力があつた。その迫力に周囲の客が押され、全員自分の食事を慌てて掻き込むとそそくさと食堂を出ていった。最も、目の前の食事に必死なカケルが知るよしもないが。

「よし、まずはこの果物から……。」

パンは形、色共に普通だがもしもの時の口直しのためカケルは後に回すことにした。そして、比較的まともな果物から手に付けようとする……。

ポタッ、ポタッ。

ふとカケルの後ろから何かが滴る音が聞こえてきた。それに気付いたカケルはどうにも気になり後ろを振り向く。すると。

「ジュル……。」

カケルの真後ろでシチューセットを手に持った少女が大量の涎を垂らしながらカケルのモーニングセットを凝視していた。

「……………」

そして、あまりにも予想外の出来事にカケルはナイフとフォークを手に持ったまま固まってしまった。

「あぐつ、んつぐ！んぐんぐんぐ……………」

「もう少し落ち着いて食べば……………」

カケルと向かいあつて座る少女はカケルが注文したランチセットを、カケルは少女が注文したランチセットをそれぞれ食べていた。

あの後我に返ったカケルは少女に自分のランチセットと少女のランチセットを交換しないかと持ち掛けた。

諦め切れなかったランチセットを食べられるということで少女は快く交換の申し出を受け入れ、ついでとばかりに一緒に食事をする事になったのだ。

「んぐ、プハア…………」。いやあ、ありがとう！どうしてもこのランチセットが食べたかったんだ！」

「いや、僕としても助かったから…………」。

カケルが食べているシチューセットは味もよく、何より見た目がまともであつたためカケルとしても交換は悪いことではなかった。

「？」

「まあ気にしないでくれ……。」

最もそのことを少女が知るよしもないが。

「私はファラ！ファラ・トートだよ！」

「僕はカケル、葉山駆だ。」

食事を終えた二人はお互い相手の名前を知らないため自己紹介をすることにした。

「ハヤマ・カケル？変わった名前と家名だね？」

「葉山が家名で駆が名前だからカケル・ハヤマの方が正しいかな？」

「ふーん、変わった風習だね？どこから来たの？」

「東京って所から。そっちは？」

「私はアルペって町からだよ。」

会話は弾んでいく。

「トウキョー？どこにあるの？」

「日本って国だよ。そっちは？」

「国はこのアルカナン大陸の西にあるアルセリア王国だよ。私の町はその外れだけど。」

「（なるほど、ここはアルカナン大陸って言うのか……）僕この大陸に来たばかりでよく知らないんだけど教えてくれる？」「良いよ。今地図出すから待っててね。」

そう言つて腰のポーチを探るファラ。カケルは待つている間に少女を観察する。

髪は茶色く肩まで伸ばしていて、手入れが良いのか見ただけでとてもサラサラしているのが判る。眼は銀色でパツチリとしていて可愛い印象を彼女を見る相手に与えるだろう。十人に問えば十人が可愛いと答えるであろうほど優れた容姿をしている。

「あ、あつたあつた！」

カケルが一通り観察し終える頃になるとファラは地図を見つけたらしくテーブルに広げる。

「私達がいるこのアルカナン大陸は五つの地方に分かれていてさっき言ったアルセリア王国がある西のカナン地方の他に東のチューク地方、北のフロール地方、南のコトラ地方、そしてこのウィザニアがある中央のウィンドリア地方。」

カケルはファラの説明を覚えようと真剣に聞く。

「ちなみに地方ごとに三つずつ国があつてこのウィンドリア地方にはウルド王国とライカ王国、それにグランセル王国っていう国があるよ。」

一通り説明を終えるとコップの水を飲んで一息つくファラ。

「質問だけど、ウィザニアは三つの内どこの国の領地なの？」

説明を聞いていく内に疑問に思ったことを尋ねるカケル。

「ああ、ウィザニアはこの国にも所属してないよ。」

「え？」

予想外の返答に驚くカケル。そんなカケルにフアラは説明する。

「ダンジョンに潜って一度でもモンスターを倒した人はユニオンに行く」と霊神様の祝福を受けることができるの。祝福を受けた人間は功績を積むと普通では有り得ない早さで強くなっていくんだけどまず受けるまでの間に死ぬ冒険者が多いし、祝福を受けた時点では精々一般兵より少し強いぐらいだから功績を積むまでの間に死ぬ冒険者も多いんだ。それに一騎当千ぐらいの強さを持った冒険者になるのはかなりの時間がかかるの。もしどこかの国が迷宮都市を領土にしていて大量の兵士をダンジョンに潜らせてもかなりの数が死ぬし、今言った一騎当千の強さを持った兵士が誕生するのを防ぐために他の国が攻め込んで来るからそれなら少しダンジョンを使って強い兵士がある程度いる軍隊よりダンジョンを使わずに地道な訓練をして強さは普通でも大量の兵士がいる軍隊の方がいいからね。要するに迷宮都市が領土でも他国に攻め込まれるだけでメリットが無いんだよ。」

「なるほど。」

確かに兵士の質を少し上げるために危険をおかして数を大幅に減らすよりは地道に訓練して数を揃えた方がいいだろうとカケルは納得する。

「ならウィザニアはどんな扱いなんだ？この冒険者には強い奴もたくさんいるだろうからさすがに国が放つとかないと思うんだけどそれに今の言い方だと他にも迷宮都市があると聞こえるのは気のせい？」

「まあ当然の疑問だろうね。」

カケルの疑問も最もだと納得したファラは返答する。

「ウィザニアに限らず迷宮都市はこの国からも完全に独立してるんだ。けど、迷宮都市の冒険者を雇うことは出来るし国で募った冒険者を迷宮都市に送って強くなったり有事の際に呼び戻したりするぐらいの干渉は出来るんだけど国直属の冒険者は国から援助を受けられたり地位を約束されたりなんてメリットがある代わりにかなり難関な試験に合格しなきゃいけないから十年に一人ぐらいしかねないしそもそも試験自体で死ぬ可能性が高いから大抵の人は死ぬ思いをしてでも国直属の冒険者になるよりは無所属の冒険者になる方を選ぶよ……、な、何か質問は……？」

「（確かにそれなら迷宮都市が独立してるのも納得いくな。ゲームみたいな世界だと思ったら結構現実的なところもあるみたいだし。まあそれは一旦置いて）……とりあえず落ち着けば？別に一息で言わなくてもいいし。」

一息でかなりの長さの説明をしたために息を切らして荒い呼吸をしているファラに呆れつつも落ち着いて説明するように促す。

「う、ごめん。けど時間が……。」

「時間？何か用事でもあるのか？」

時間という言葉に気になったカケルは尋ねた。

「あ、うん。私この後ダンジョンに潜る予定なんだ。」

「てことはファラも冒険者なのか？」

ファラの返答に少々驚きながらもカケルは更に尋ねる。

「そうだよ。と言ってもまだ祝福も受けてない駆け出しだけどね。今日の十時にユニオンの前に集合してモンスター狩りに行くんだ。」

「大丈夫か？」

「うん。ユニオンに依頼して雇った冒険者の人が一緒に潜ってくれるんだ。」

「それは祝福を受けるためか？」

「それだけじゃないよ。新米の冒険者が死なないように一週間付きつきりで探索に必要なことを教えてくれるんだ。」

「祝福を受けるためのモンスター狩りから必要技能の教習までって親切なもんだな。」

「まあ依頼料はそれなりにするけどね。っと、そろそろ行くよ。最後まで説明出来なくてごめんね。ご馳走さま、またね！」

そう言っつてファラは食堂を出て行った。

「祝福か……。もう受けてるっぽいけど一応行ってみるか。」

カケルもまた食堂を出て行った。

所属（前書き）

遅れてすみません。

なかなか内容が決まらず三か月もたってしまいました。

また日が空くかもしれませんが続き更新していくのでよろしく
お願いします。

所属

「とりあえず来てみたのはいいものの……。」

カケルは目の前の建物を見上げる。

「ユニオンってのはRPGなんかにてくるギルドみたいなものだ
と思ってたんだよねあ、僕。」

カケルは更に上を見る。

「……普通こういうのってさ、でかい屋敷とか酒場と一緒にあって
るものじゃねえの？」

最後には天を仰ぎ。

「空飛ぶ塔ってなんだよ……。」

カケルは異世界の常識とはどのようなものなのか今すぐ霊神に問い
質したくなった。

ファラと別れて宿を出たカケルはガイドブックの説明を聞きながらユニオンを目指していた。

「ユニオントハウイザニア最大ノ観光スポットと言ッテモ過言デハナイデショウ。」

「ユニオンが観光スポットって……。歴史ある建物とかだったりするの？」

「ハイ、デスガソレダケデアリマセン。」

「と言うと？」

「ナント言イマスカ……。スゴイ？」

「は？」

ガイドブックの返答に驚くカケル。

「いや、そりゃ歴史ある建築物が凄くなかったらどうすんだよ。」

「ソウ言ウレベルデアアリマセン。ムシロソウダッタラドンナ良カッタコトカ……。」

「おい、お前本当にガイドブックか？何で哀愁漂わせてんだよ、呪われた書物とかじゃないよな？」

「ムシロアレノ方ガ呪ワレテマス。」

「どんな建物だよ！」

哀愁漂う本とその本に向かって叫ぶ少年という噂話がウィザニア中に広まったことを当人達は知らない。

「マアナント言イマスカ実際二見レバ分カリマス。」

「とてつもなく不安なんだが……。」

カケルは今からでも引き返そうか真剣に考える。

「アツ、ソノ角ヲ右二曲ガツタトコロデス。」

「考える時間も無いのかよ……。」

正直不安だが仕方ない、行くだけ行ってみようとカケルは決意する。

「鬼が出るか蛇が出るか……。」

「ソノヨウナモノハ出マセンガ……。」

何が出ようがもう怯まないと固めたカケルの決意は。

「……カジノト空飛ブ塔ハ出マス。」

脆くも崩れ去った。

「『ユニオン経営カジノアルカディア！ようこそ、天国へ！ユニオンはこの真上だよ！』」

カジノの上に掲げられている看板を力無く読み上げるカケル。彼が

受けた精神的ダメージは計り知れない。

「ユニオンノ人間ノセンスハ本当ニ理解デキマセン。ウィザニア七不思議ニモ数エラレテイマスシ……。」

「……。」

最早沈黙するしかないカケル。

「……デハ、頑張ッテ下サイ。ソノ、色々ト……。」

その言葉を最後にガイドブックは沈黙した。

後に残されたのは先程のガイドブックに負けない程に哀愁漂わせるカケルだけだった……。

「とりあえずユニオンの方に行くか……。」「五分程してようやく決意したカケルだが、問題があった。

「……空飛んでる建物にどうやって入れと？」

カケルは飛ぶことが出来ない。この世界の人間は飛ぶことが出来るかもしれないがカケルには無理だ。

「……。」

ひとしきり悩んだカケルは　。

「……もう、遊ぶしかないか。」

カジノに入ってしまった。

「アルカディアへようこそ！ ゆっくり遊んでいって下さいね〜！」

受付の女性からコインケースを貰ったカケルは早速ゲーム台に向かう。

「なんと言つか、こういう所は何処も変わらないんだな。」

賭に勝って喜ぶ人間と負けて嘆く人間を見るカケル。

「さてとりあえずルーレットでもするか。」

カケルは他に客がいないルーレットの台に向かう。

「説明はいりますか？」

「頼む。」

「分かりました。それではご説明させていただきます。」

カケルはディーラーの説明を聞く。

「このルーレットは赤と黒のポケットにそれぞれ一から六十まで番号が振られています。」

ディーラーが言う通りルーレットには赤と黒のポケットがあった。

「では好きな番号を一つ選んで下さい。」

「えっ、説明ってそれだけ？」

「はい、それだけです。」

「いや、もっと細かいルールとか……。」

「ルーレットに小難しいルールがあるとでも？」

あまりに短い説明にカケルは思わずディーラーに問いかけるが望んだ答えは返ってこない。

「けど、倍率とかは……。」

「これにそんなもの要りませんよ。」

「は？」

賭け事としては有り得ないことを言い出すディーラーにカケルは理由を尋ねようとする。

「それってどういう……。」

「それではどうぞ!」

だが、ディーラーはカケルの言葉を遮り、番号の選択を促す。

「じ、じゃあ赤の十番で……。」

戸惑いながらも番号を選ぶカケル。

「赤の十番ですね。それでは、スタート!」

宣言すると同時に白いボールを投げ入れるディーラー。ボールはルーレットを回り出す。

「（それにしても倍率がないってどういうことだ？というかコインすら賭けてないぞ。まさか手持ちのコイン全部とか言うんじゃないよな。一枚十エンだったけど百枚買ったから有り金十分の一も使ったんだしそれはきつい。いざとなったらカジノ側の不手際ってことで抗議するかこのディーラーを闇討ちしてでも……）」

カケルが黒いことを考えている間にボールの勢いは半分以下となりディーラーはカケルに声をかける。

「（な、何か凄く嫌な予感がする）で、ではルーレットにご注目下さい。もう間もなくボールがポケットに収まります。さあ、どのような結果になるでしょうか！」

身の危険を感じて怯えているが。

「（どのような結果も何も当たりか外れ以外にないだろ？何こいつ大声で宣言してんの？ギャラリー集まって来てんだけど？僕見せ物になってんだけど？ただでさえ当たる確率低いルーレットで当てたら目立つし外れてもギャラリーから生暖かい同情の視線を浴びせられることになるんだけど？何？さらし者？僕のことさらし者にしたいのこいつ？喧嘩売ってんの？やっぱり）……こいつ今晚にでも消すか。」

「（消す！？今ボソツと消すって呟いたよねこの少年！？しかも状況的に消されるの俺！？なんで！？俺何かした！？この少年の気に障ることしたか！？享年二十四歳とか俺やだよ！？負けてキレる客はいたけどゲーム中にディーラー消すこと決意した客は初だよ！？俺本当に）この少年に何かしたっけ？」

混乱するあまり最後は心の声を小さく漏らしてしまったディーラー。そしてその声はカケルの耳に届いた。

「（倍率はおるかコインも賭けてないのにゲームを始めておきながら何かしたかだと？倍率は信用問題に関わるだろうから勝手に変えたりしないだろうが問題はコインを賭けてないことだ。当たったら賭けてないからごねるだろうし外れたら事情を知らないギャラリーからはただの冷やかしかと見られるに決まってる。やっぱこいつ）ゲームの勝ち負け云々に関係なく消すか。」

またも小さく呟くカケル。ディーラーとは違い自分の意思で口に出していることからどれだけディーラーを消したいかが伺える。聞こえた側かつ消される側としては伺いたくないが。

「（結果はどうあれ俺を消す気だこの子！！やばいって！マジでやばいって！とりあえず逃げ）って、……あれ？」

本格的に逃げることを考えるディーラーだがふとあることに気付く。

「（勝ち負け？確かにゲームだけどこれに勝ち負け？何で？もしかして）……あの、少年？」

「（命乞いか？）あ？」

恐る恐る声を掛けるディーラーと乱暴な口調で反応するカケル。

「このルーレットがユニオンに入る時の運勢調査だって……俺言い忘れた？」

あまりにも予想外なことを尋ねられたカケルは。

「……え？」

一言返すのが精一杯だった。

「……」
「……」

沈黙の中カランという音を立ててボールが収まった。

「……」
「……」

無言のままに二人がルーレットをみるとそこには
。

「……赤の四十番。」
「……僕の運は最悪ってことか。」

カケルが選んだ番号のポケットとは正反対の位置のポケットに収まったボールがあった。

「いや、な？ユニオンの連中にはチームを組んでる奴もいるんだ。」
「……。」

「で、ユニオンには緊急の依頼も入って来るんだけどそういった依頼は失敗するとユニオンの信用にかなり響くんだこれが。」

「……。」

「だからユニオンとしても確実に依頼を達成するために腕利きを派遣する必要がある。」

「……。」

「チーム組んでる奴等は連携取れてるから依頼の達成率も悪くないんだ。」

「……。」

「けど一人一人の実力が高いチームはあまりない。」

「……。」

「そいつらに難易度も危険度も高い緊急の依頼をやらせたところで依頼を達成出来ないで全滅する確率が高い。」

「……。」

「そうなる上位ランクの奴等を何人が集めて即席チームを作るんだが上位の奴等は迷宮に潜ってばっかで滅多にユニオンには顔を出さないような連中ばかりなんだ。」

「……。」

「だからどうしてもチームが作れない時がある。そうなるやつぱり既存のパーティーを派遣することになるがそのままだと失敗すると分かりながら送る訳には行かない。だから少しでも成功率を上げるために特定の冒険者をパーティーに混ぜる。」

「……。」

「特定の冒険者、それは運が良い奴だ。事実そいつらを混ぜることで成功率が三割は上がる。」

「……。」

「だからユニオンに入る冒険者はあの幸運を測るルーレットでどれ

だけ運が良いか調べることになってんだ。」

「……。」

「まあつまり何が言いたいかって言うのだな……。」

「……。」

「説明忘れたことは謝るしさらし者にしようとかいう意図は一切なかったと霊神様に誓って言うので許して下さい！！お願いだからそんな目が笑ってない笑顔を浮かべながらやばいぐらい輝くガントレットを俺の頭に叩き付けようとしなide！死ぬから！俺死ぬからね！？それくらったら今の俺だと死ぬからね！？」

場所はアルカディアの上、ユニオン『パルテア』。そこで先程のデイーラーが今にも自分を消そうとするカケルに涙目ながら謝罪をしていた。

「てゆうか皆も何か少年に言ってあげて！仲間が今にも消されそうなんですけど！？」

「いや、それはウエルの自業自得だから。」「だとしても何か援護ブリーズ！今度酒奢るから早くヘルプ！」

「どうせ安酒だろ？だから嫌だ。」

「二つ星！二つ星の酒でどうにか！」

「足りねえよ、最低でも三ツ星は持って来い。そしたら考えてやる。」

「つまみも付けてな。」

「悪魔かお前らは！？三ツ星とか高過ぎんだろ！しかもつまみまで要求！？」

ウエルと呼ばれた男は自分では止められないと判断すると周りで見ている仲間に助けを求める。代償を無茶なまでに吊り上げて要求する辺りその気はないようだが。

「何で！？何でそんなに厳しいの！？お前らそんなに俺が消されるところみたいの！？」

「いや、だってなあ……。」

周りの冒険者達はウエルから顔を背けながら。

『止めようとしたら巻き添えくらって死ぬから……。』

納得のいく理由を述べた。

そしてそれを聞いたウエルは。

「ああ、なるほど。」

合点がいったという風に呟く。そしてその後ろには輝くガントレットを振りかぶるカケルの姿が。

「だが、最期に一つ言っておく……。」

ガントレットはウエルの後頭部に迫り。

「化けて出てやるからなあああーっぎやあああああ
あ！！！！」

そのまま打ち抜いた。ウエルの身体は縦回転しながら吹き飛び
。

「ただい、まがフガア！？」

丁度迷宮から帰還した冒険者を巻き込んで壁に衝突した。

「
今巻き込まれた奴、一応ランキング上位なんだけど……。」

誰かが呟くと。
。

「
……おいしい奴を亡くしたな。」

誰かが仲間の冥福を祈り。
。

「おい、治療師。」

誰かが治療出来る仲間を呼び
。

「残念ながら、手遅れでしょう……。」

呼ばれた治療師が諦め
。

「すみません、祝福について説明して頂きたいのですが……。」

カケルが当初の目的を果たそうと受付の女性に尋ね。

「それでしたら今三階にある祝福の間に巫女がいるので彼女に聞いた方がよろしいかと。」

受付の女性が対応した。

「この扉の先が祝福の間となっております。」

「ありがとうございます。」

「いえ、仕事ですから。それに御礼を言われるよりもユニオンに入

ってもらう方がこちらとしてはありがたいのですけど?」

「はは、まあ考えておきます。」

「ではどうぞごゆっくり。」

そう言つてカケルを祝福の間に案内した受付の女性は一階の受付に戻つて行つた。

「案外まともな人もいるんだな……。」

ユニオンそのものが常識を忘れた代物だつたために所属している人間も同じぐらい外れていると思つていたカケルは彼女が普通であつたことに驚いていた。

「あんな人がせめて全体の半分を占めてたら入つても良いかな……。」

後で確認しようと思えるカケル。

「けど、ウエルとかいう奴は見てて面白いけど周りを厄介事に巻き込むタイプみたいだから傍観しようとか考えないで関わらないようにしよう。」

仲間を巻き添えにして吹き飛んだことを踏まえ、ウエルとは関わらないようにしようと思つたカケル。

「そうは言つてもあそこまで叩きのめしたら関わろうとしないだろうし、これについてはもう忘れてさつさと祝福について聞きますか……。」

そう言つてカケルはノックもせず扉を開け、祝福の間に入った

。

だが、この時カケルは知らなかった。ウエルのしつこさと頭の悪さ、そして自分の運の悪さが原因で今後嫌でもウエルと関わるといふことにとに。

「……ようこそ、祝福の間へ。」

部屋の中には一人の少女がいた。

「私はイリナ。ここで巫女を任せられています。」

顔はファラよりも可愛らしい丸顔で水色の髪をツインテールにしている。

「本日はどのような御用件で？」

カケルは思う、ファラとはまた違った可愛さだと。そして何より。

「……何で幼女？つか乳でか過ぎだろ。」

色々な外見的特徴がファラとは違い過ぎだろ、とも。
カケルが思わず漏らした言葉を聞いた彼女は。

「好きでこんなアンバランスな体型になったんじゃないしそもそも巫女やるのに体型なんか関係ないわ！そして私は幼女じゃなくて十八歳の立派な大人の女性！文句あんなら今すぐ私の身長伸ばしやがれえええ！」

涙目ながらにカケルに向かって突進した。
カケルは自分に突進してきたイリナという幼女の頭を左手で抑えることで一定の距離を保ちつつ。

「……いや、なんというかすまん。乳以外はどこから見ても幼女にしか見えない。」

それがとどめだった。幼女もといイリナはカケルの謝罪を聞くと同時に床に崩れ落ち。

「びえええん!!」

大泣きした。

「……。」

さすがに悪いと思ったカケルは。

「……とりあえずしばらくそっとおいてまた後で来るか。」

祝福の間を後にし、受付がある一階に戻って行った。

扉を閉めるまで聞こえてくる泣き声に罪悪感を感じながら。

「それは……。」

「……すいません。」

「いえ、ウィザニアに来て日が浅い人が彼女を知らないのは無理もないですし……。」

カケルは先程自分を案内してくれた女性にイリナを泣かせてしまったことを話していた。彼女が言うにはイリナの容姿とそれについてイリナが気にしていることはウィザニアだとそれなりに知られているらしく、イリナの体型のことを面と向かい合って言う人はウィザニア出身の人にはいないらしい。

「そのためウィザニアの外から来た方にはユニオンの冒険者があらかじめそのことについて注意するのが暗黙の了解になっているのですが……。」

彼女は申し訳なさそうな顔をする。

「……ウエルの件で頭の中が一杯になっていて全員忘れていたみたいですね。」

カケルに謝罪した。

そしてそんな彼女の視線は。

「ウエルの奴、早死にしゃがって。」

「けど普段地味なあいつも最期は派手に逝けて良かったじゃねえか。」

「あんな奴でもいなくなると寂しくなるな……。」

ウエルの死を悼む冒険者達の姿があった。

カケルが見ると彼らは一つの棺桶を囲むようにしていた。

「地味であつたが言い奴だつたウエルのために。」

「ウザイぐらいしつこく絡んできたが良い奴だつたウエルのために。」

「すぐに存在を忘れられるだろうが良い奴だつたウエルのために。」
そして彼らはグラスを持ち。

『乾杯！』

中に注がれた酒を飲み干しウエルの冥福を祈った。

「いや、何勝手に人のことの殺してんの！？俺まだ生きてるからね！？てかそれ俺の秘蔵の酒だから！お前ら何で普通に飲んでんの！？しかも明らかに死んだ人間にかける言葉じゃないからね！？」

グラスの酒を飲み干すと同時にウエルが棺桶から飛び出した。

「あ、生きてた。」

「生きてるならそう言えよな。」

「てかあれくらって生きてるこいつって何？」

「あれだろ？固くてタフでウザイことで有名なリザードマンの新種。」

「ああ、なるほど。」

「誰がりザードマンだ！」

ウエルが生きてたことに驚く冒険者達と人外扱いされたことに抗議するウエル。

「あ、生きてたのか。」

カケルも驚いていた。あの時暴走状態で、しかも恐らく霊器の力が籠っていた一撃をくらい吹き飛んだウエルが生きていたことに。

それに対し受付の女性が理由を述べる。

「ウエルはあれでも生命力強化の刻印コードとユニオンの幸運を持っていますから。」

「刻印コード？」

聞き慣れない言葉に疑問を持つカケル。

「本来ならイリナ様が説明する筈だったのですが…、仕方ないので私がさせて頂きます。」

そして、受付の女性は説明を始める。

「刻印とは霊神様がもたらす祝福、肉体に刻まれる文字のことです。」

「肉体に刻まれる文字……。」

自分の胸にある聖痕と似たものかとカケルは考える。

「刻印の種類は様々でウエルの生命力強化の他に魔法力強化や詠唱補助など多岐に及びます。」

「刻印を得るための条件とかはあるのか？」

「はい、刻印を得る方法は五つあります。一つ目は倒したモンスターに応じて霊神様から授かるもの、二つ目は功績によって得たポイントに応じて一つ目と同じく霊神様から授かるもの、三つ目は他の人からもの、そして四つ目は魔導書から得るもの、五つ目は精霊などの幻想種から得るものです。一つ目と二つ目の条件はともかく三つ目以降、特に五つ目は幻想種から得るには彼らに気に入られるか試験を果たす必要があります。」

「その幻想種というのは例えば？」

「貴方の故郷で霊神様以外に崇められ、滅多にいないか存在していないとされている生物だと思って下さい。まあ彼らは見つかるだけでも大変なので五つ目の方法で刻印を得た人は滅多にいませんが。祝福と刻印についての説明はこれで終わりです。」

そう言つて締めくくると受付の女性は一息ついた。

一方カケルは自分の聖痕はどの方法にも属さない方法で得たことからきつと特別なものだろうと考えていた。

「（目立つと傍観出来ないしこのことは黙つてよう）どうもありがとうございました。目的のものが聞けたし今日は町を散策しながらユニオンに入るか考えることにします。」

ここに来た目的を果たしたカケルはとりあえず町を見ながらユニオンに入るか決めることにした。ウエルみたいな周りを巻き込む人間こそいるが、目の前の女性のように丁寧な人間もいるため町の人間からユニオンにはどのような性格の人間が多いのか聞いてみよう考えた故にとろうとした行動だったのだが。

「おい、少年！」

突然ウエルがカケルに話しかけた。

あれほどやったのに自分に関わろうとすることに辟易するカケルだったが無視しても無駄だと判断し、ウエルの方を向く。

「……なんだよ。」

「待て待て、落ち着け！渡すものがあるだけで他には何もないからもう一発それを叩き込もうとするのはやめろ！」

右手の霊器を先程と同じように輝かせながら。

「渡すもの？」

「おう、そうだ！」

訝るカケルにウエルは一枚のカードを差し出した。

「ほら、お前の冒険者カード。」

「は？」

カジノの時と同じ反応をするカケル。声こそ出していないが受付の女性も同じ反応をした。

「いや、だってお前ユニオンに入るつもりでここに来たんだろ？さっきの詫びも兼ねて俺が作っというてやったんだ。」

どうやらウエルの頭の中ではカケルがユニオンに入ることになっているらしい。

「まあこれでチャラにしてくれや。登録料金も俺持ちだし。とりあえずこれからお前は俺の後輩な。俺のことはウエル先輩って呼ぶように！」

この時のことを見ていた冒険者の一人は何か切れる音がしたと証言している。

受付の女性は無言でカウンターを出て棺桶の方へ向かった。

カケルは無言で右手を振りかぶった。

先程までウエルの冥福を祈っていた冒険者達は無言で再びグラスに酒を注いだ。

「少年は運勢最悪だし始めの頃は運勢最高の俺と組めばしばらくは安定した収入が得られるぜ。それに……。」

ウエルはまだ何かを言っている。

受付の女性は棺桶の蓋を開き、ウエルを挟んでカケルと向かい合う位置に設置した。

カケルは霊器の輝きを先程放ったものより倍以上に強めた。

冒険者達は巻き込まれないように棺桶の正面と裏の方向から離れた。

「まあそう言う訳で初の迷宮探索……。」

受付の女性は冒険者達と同じ場所に移動し、黙祷を捧げる。

冒険者達はグラスを掲げる。

カケルは霊器をウエルの顔面に　　。

「……行ってみふお！？」

叩き付けた。

ウエルの身体は先程とは違い回転せずに頭から　　。

「ぐぶふあわあ!？」

棺桶に突っ込んだ。

その衝撃で棺桶の扉は閉じ、そのまま。

「ウエル!てめえさっきはよくも巻き込みやがばあ!？」

先程ウエルが巻き込み、そのことで文句を言い飛び込んで来た冒険者に激突し。

「あああああああ！？」

彼が出て来た扉から飛び出して行った。無論彼を巻き添えに。

「……」

そしてそれを見ていた冒険者達は。

「……運が悪かった仲間のために。」
「ウエルのアホに巻き込まれて死んだ仲間のために。」
「蘇ると同時に再び死んだ仲間のために。」

『乾杯！』

巻き込まれた仲間の冥福を祈った。

受付の女性はカケルから冒険者カードを受け取ると
。

「一応これもあなたへの危害ということでウィザニアの条例に従い
ウエルのポイントの十分の一に値する千二百ポイントをあなたに渡
すことができますが受け取りますか？」

暗に一度登録された以上もう冒険者になるしかありませんと諭す。
それに対してカケルは
。

「…………受け取ります。」

諦めたように返答した。

この瞬間、カケルはユニオンに不本意ながら所属することになった。

探索（前書き）

遅れてすみません。

この後すぐにあと二つ投稿します。

探索

「これでカケルのポイントは千二百五十ポイントになりました。よって祝福の間にて二つ星のコードを授かることができます。」

カケルがユニオン『パルテ』に所属してから一時間後、受付の女性は諸々の手続きを終えてポイントを振り込んだカードをカケルに返却していた。本来なら手続きには半日かかるのだが、ウエルが勘違いをして、ユニオンに入るかまだ悩んでいたカケルを登録してしまったという負い目があるため、彼女は多少強引な手とコネを使っ通常よりも早く終わらせたのだ。そのことをカケルが知るよしもないが。

それよりもカケルには気になっていることがあった。

「さっきから二つ星とか三つ星とか言うのをよく聞くけどそれって何なんだ？」

「え、知らないんですか？」

「一応知つてると言えば知ってるけど故郷では美味しい飯屋のランク付けにしか使われてなかったからな。」

「そうだったんですか、ではご説明致します。」

受付の女性が答える。

「アルカナン大陸では様々なものにランク付けがされており、星の数が多ければ多いほどそれぞれの部類で優れている、もしくは希少価値が高いことを意味します。最高位は十つ星でこれが与えられているのはアルカナン大陸でもほんの僅かで、それらを探すことに例え一生を費やしたとしてもまずお目にかかることはできないと言えるでしょう。」

受付の女性の説明はまだ続きそうだが、カケルはどうしても聞きたいことがあり質問する。

「聞きたいんだが、十つ星を与えられた冒険者はいないのか？」

これから冒険者になる以上、カケルはそれがどうしても気になった。

「いえ、長い歴史の中でも冒険者どころかそもそも人間自体に与えられたことは未だかつてありません。」

その言葉を聞いたカケルは十つ星というものがどれほど希少で自分には遠い称号なのか漠然と理解する。

昨日カケルはリザードマンを倒したが、先程の冒険者達の会話から察するにリザードマンとは多少てこずる程度で倒すのには問題無い、言わば雑魚だということが分かる。だが、カケルはその雑魚を倒すのになりてこずった。

カケルにとってはリザードマンですら脅威であるのだ。

それを余裕で倒すことができるこの世界の冒険者達でも届かぬ領域、それが十つ星なのだ。

最もカケルとしては目立つと傍観するところではないのでランク自体それほど高くする気はないが。

「ならもう一つ、未発見のものならまだしも授与されているものなら無理すれば一目見るぐらいできるんじゃないか？」

「いえ、実は五百年程前に十つ星の武器の一つ『スルト』を巡って大陸全土を巻き込んだ戦争が起こってしまい、当時『スルト』を所有していた冒険者シュレンが戦争を止めるため『スルト』を何処かに隠したのを初めとして、十つ星の品々はそれぞれの所有者達が隠

すか封印してしまったので誰も見ることはできません。」

「その言い方だと五百年の間に十つ星に認定されたものは無いってことか？」

「はい。自分の手で作ろうとした人達もいましたがやはり十つ星の品となるとまず材料からして奇跡でも起きない限り現在では手に入ることがないものが必要ですし、例えば手に入ったとしても十つ星の品を作るために必要とされているコードは失われた^{ロストコード}刻印という現在では存在しないものに分類されるため作することはまず不可能とされています。それでも十つ星の品々を一目見ようとする人は多いため、十つ星の品々が隠された場所の第一候補としされている各地の迷宮の下層から発見されるそれらしい品を片っ端から巫女が識別しているのですが未だに見つかっていません。」

「ようするに作ることも見ることもまず不可能ってことか……。」

「はい。」

「分かった、ありがとう。とりあえずこれからダンジョンに潜ってみるよ。」

「それでしたらどうぞ配給室をご利用下さい。」

「配給室？」

「はい、パルテでは冒険者の方々に必要最低限の装備や道具を配給することになっています。見たところカケルは右手のガントレットと布を巻いた剣とガイドブックぐらいしか持っていないさそうですし……。」

「いや、助かるよ。まあ防具はこれから何か買おうと思ってたんだけど。」

「それでしたらどうぞ好きなものを持って行って下さい。」

「いいのか？」

「まあウエルが迷惑かけましたし特別ということで。あるのは初心者向けの安物ばかりですが。」

「それでも本当に助かるよ、ありがとう。」

「どう致しまして。それではあちらの扉から廊下に出て左側の五つ

目の部屋が配給室となっています。」

「分かった、それじゃまた！」

「御武運をお祈りします。」

そしてカケルは配給室に向かった。

「良かったのか？」

ウエルが受付の女性に話しかける。

「何がですか？というかウエル死んだんじゃないんですか？」

「勝手に殺すな！！」

「そうですね、ウエルがそう簡単に死ぬ訳ないですよ。残念なことに。」

「それはどういう意味か知りたいんだが？特に何が残念なのかについて。」

「いえ、大したことではありませんので。ちなみにウエルが死ぬ訳ないというのは毎日のごとく他人に迷惑かけて普通なら死ぬレベルの反撃をくらってもピンピンしてるウエルが冒険者になったばかりの少年の一撃程度じゃ死ぬ訳ないという意味です。」

「いや、あいつの一撃は軽く三ツ星レベルはいつていたと思うんだが。」

「本気で怒った六ツ星冒険者の奥義くらって生きてるあなたからすれば軽いものでしょう。」

「あの時はたまたま持ってた五ツ星の障壁札のおかげで助かったんだが……。」

明らかにされるウエルの悲惨な日常の一部。全て自業自得で殺されてかけているという内容だった。

「あの時も本当に残念な思いをさせられました。おかげで儲け損ねましたよ。勝ったお金で新しい服を買おうと思っていたのに。」

「賭けだな？賭けだよな？絶対に賭けだよな？そしてお前絶対に俺が死ぬことに賭けてただろ。」

「自分のギャンブルセンスのなさには絶望しましたよ。今回のを含めると一勝十三敗で一万エン程の負けです。」

「十四回も賭けたのかよ！？しかも一万エンってどれだけ賭けたんだ！？二つ星の酒が樽で四つは買えるぞ！！」

「ちなみに唯一の勝ちがウエルが何事もなく平穏な一日は遅れるかどうかという賭けです。五千エン賭けました。それ以外は一万エン賭けです。」

総計すると六万五千エン、ウエル曰く二つ星の酒が樽で二十六個は買える値段である。更に言えば薬草が六千五百個、カケルが宿泊した宿屋に六十五回泊まれるだけの金銭でもある。

「ということは一回勝った時に五万五千も儲けたってことか！？倍率十一倍って俺ただけ日頃平穏と遠い生活してると思われてんだよ！？」

六つ星の冒険者の一撃をくらう羽目になる時点で平穏とは程遠いのだがウエルは気付かない。何故ならそれは彼にとって珍しくも何ともないことなのだから。

「ああ、言い方が悪かったですね。」

「は？」

ウエルの叫びを聞いた受付の女性は何かに気付くがウエルには嫌な予感しかない。

「なあ、それどういうこと？」

聞いてはいけないとは思うがつい尋ねてしまうウエル。

そして受付の女性が口にしたのはウエルを更に絶望させるのに十分過ぎる言葉だった。

「一万エンの負けというのは今回の賭けに関するもので総計すると十三万エン負けたことになります。けど唯一勝ったウエルが平穩に一日を過ごせるかについての賭けは私以外賭ける人がいなくて私が総取りしました。参加者は私を除くと五十人いて彼らの賭け金の総計五十万エンが私の懐に入ったので倍率は百倍ですね。」

「……。」

ウエルは何も喋らない。そして動かない。どうやらショックが強過ぎたようだ。

「彼らにしてみればウエルが平穩に一日を過ごせることは天地がひっくり返っても有り得ないことだったんでしょうね。実際彼らが勝つても一人頭百エンしか貰えないのに笑いながら了承しましたよ。どうせ負ける訳がないからと言って一人一万エンも賭けてくれましたし。まあその分負けた時の顔はとても面白かったです。」

「……。」

ウエルの眼には涙が浮かんできている。

「まあ最も、幸運秤の回転盤ラックルレットが示すのは冒険者としての運勢ではなく、それも含めた普段の運勢だということは誰も知らないから当然なんですよね。」

「……いや、俺はディーラー任された時にイリナから聞いてる。」
ようやく言葉を発したウエル。言葉に力が全くこもっていないことから本調子からは遠そうだが。

「ああ、そういえばそうでしたね。だとしたら何故私がある方が一日を平穩に過ごせることに賭けたのかお分かりでしょう？」
受付の女性は何故か楽しそうにしながらウエルに解答を促す。

「……普段から殺されそうになっても俺が無事に生きていられるのは運が良いからだ。さっき話した六つ星の冒険者の件に關してもそれが理由。その日は偶然五つ星クラスの障壁札を迷宮で見つけた。」

ウエルは氣を落としながらも答える。

「普段の俺ならそんなものにすぐに酒代にしちまう。けど何故かあの日は買い取ってくれる店が閉まってたり混んでいて売るのは明日にしようと思ったんだ。」

「ええ、そう聞いています。」

受付の女性が相槌を打つが、ウエルはそれを氣にせずに話し続ける。

「偶然その日売りに出さなかった札が偶然怒らせた六つ星の冒険者の一撃を防げるレベルのものだった。こんな偶然そう滅多にあるも

んじゃない。」

「つまり？」

受付の女性は続きを促す。

「つまり俺の性格の問題ってことだ。それは運に関係ねえ。いろんな奴を怒らせて死にかけることはあっても今生きていられるのがその証拠だ。」

性格に関してはいくら運が良くてもどうにもならないしな、と付け加えた後に溜め息をつくウエル。喉が渴いたらしく偶然通りかかったウエイトレスに酒を注文する。

「まあそんなところですね。頭の悪いあなたにしては上出来です。」
受付の女性は褒めているのか馬鹿にしているのか分からない言葉をウエルにかける。これで話は終わりだとばかりにウエルに背を向けるが。

「……おい、まだ終わってねえぞ。」

重く、鋭い声で受付の女性を呼び止めるウエル。雰囲気もまた先程とは違い真剣なものに変わっている。表情も厳しく、鋭い目付きで受付の女性を睨み付けていた。

「……まだ何か？」

受付の女性は先程と変わらない調子で問い掛ける。だが、ウェルに対して背を向けたままであり、決して振り向こうとはしない。

「てめえが賭けたあの日、いつもより冒険者の数が少なかった。まるで誰かが意図したかのように、な……。」

ウェルの視線は変わらずに受付の女性に向けられている。

「……それが何か？」

受付の女性も先程より重い声で続きを促す。

「通常冒険者は自分の好きな時か依頼でもない限り迷宮に潜らない。前者は自由、後者は多少の強制といった感じでな……。」

「……。」

受付の女性は何も語らない。

「誰かが誘導したってんなら必然的に後者の可能性が高い。個人的な頼みで潜ってくれと言われて潜るよりも依頼という形をとっていれば成功したら功績のポイントが貰えるからな。」

「……。」

ウエルは話を進める。

「そして依頼を冒険者に直接回せるのはユニオンの受付しかない。お前のように、な。」

「……何が言いたいのですか？まさか、私がわざと彼等に依頼を回したとでも？」

これまで黙って聞いていた受付の女性が口を開き、抗議する。

「唯一人貴方に賭けていた私を疑う気持ちは分かります。ですが貴方も知っているでしょう？冒険者が受ける依頼はユニオン経由で回されるものであつて私達は冒険者の方々がそれを受けたかどうかを依頼主に伝える手続きをするだけです。」

「確かにそうだな。」

それを聞いたウエルは肯定した。

「それならっ……！」

「だが、それでも怪しいんだよ。」

ウエルは話を続ける。

「確かに受付の人間は誰が依頼を受けたかの連絡ぐらいしかできねえ。ましてや依頼を増やすことなんてまず無理だ。例えばあの日何時になく依頼が多く、それを受けたために冒険者の連中がほとんど出払つても偶然と受け取るのが普通だ。」

「では、何故……！？」

「そいつらが全員誰に依頼を回されたのか覚えてないからだ。」

「!？」

「流石にそうなたら疑わざるを得ねえだろ。」

「で、ですがそれで何故私が怪しいのですか!？」

徐々に焦りだす受付の女性。先程までの冷たい雰囲気はまるで感じられず、どうやら虚勢を張っていただけのようだ。

「んなもん決まってるだろ。」

何を今更といった感じでウエルは告げる。

「お前だけ名前が分からないからだよ。」

「!?!」

その言葉に動揺する受付の女性を余所にウエルは更に告げる。

「いや、むしろ認識できないってところか？」

「何を言ってる……。」

「秘匿^{ハイドコード}の刻印だったか？」
「……」

ウエル言葉に受付の女性は更に動揺する。

「自分に関する一つだけ誰にも認識できなくなるっていうレアな刻印^{コード}、俺の生命力強化の刻印^{ライフアップコード}と同じ三ツ星クラスのコードだ。」
「……」

受付の女性は黙り込む。

「そんなもん受付の人間が持つてるようなもんじゃねえ。」

ウエルが目付きが更に険しくなる。

「お前……、『奴等』の仲間だろ？」

先程まで騒がしかったユニオンはいつの間にか静まり返っている。

「あゝあ、ばれちゃったかあ。」

場の雰囲気にとぐわなない軽い声が響く。その出所は未だに背を向けたままの受付の女性。

「小遣い稼ぎなんてするんじゃないかったよホント。平和ボケしてると思ったら案外鋭いじゃないかい。」

そして、受付の女性は振り向く。

「……………それがお前か。」

ウエルが目線の先にいたのは銀色の髪を肩まで伸ばし、爬虫類のように細い紫色の瞳を持つ妖艶な美女だった。

「そ、これがアタシ。名前はマイン。宜しくね？」

マインと名乗る女性は挑発的な態度でウエルに接する。

「そいつは御免こうむるな。あんたは俺の好みからかけ離れてる。」
「そうつれないこと言わないで欲しいねえ？こつちには聞きたいことがあるんだよ？なんであれだけでアタシに気付いたのかとか、さ。」

妖艶な笑みを浮かべながら尋ねるマイン。だがウエルは冷めたように答える。

「ああ、そりゃ簡単だ。お前さん、^{コード}刻印の使い方が下手くそ過ぎるから。」

「……何？」

下手くそと言われて笑みが引きつるマイン。それに構わずウエルは続ける。

「お前さんあれだろ？ 刻印^{コード}で認識できなくしたの自分の情報とかそこら辺だろ？」

「それがどうしたって言うんだい？」

肯定するマイン。そんな彼女を呆れたというような眼で見ながらウエルは説明する。

「そついうのは対象を何か一つに絞って明確にするもんだ。お前さんは欲張って自分の情報なんて曖昧なもんに使っちまったから刻印^{コード}の効果が微妙にしか発動しなくて周りの認識にズレが出たんだよ。」

名前は偽名とかで容姿だけに使えば良かったのに、もったいねと呟きながら丁度ウェイトレスが運んできた酒を口にするウエル。

「なるほど、参考になったよ。礼を言う。次は気をつけるとするよ。」

ウエルの言葉に顔を引きつらせつつも納得したのか礼を言うマイン。

「ん、次？んなもんあるわけないだろ。」

心底訳が分からないといった風に尋ねるウエル。左手に持ったジョッキから酒を飲み、右手はポケットに突っ込んでいる。

「別に、そんなのあんたを始末すればどうにでもなるだろ？他の連中は酒に混ぜといた睡眠薬で全員夢の中だしねえ。」

マインの言う通り冒険者達は全員テーブルに突っ伏すか床に倒れた状態で眠っている。ユニオンが静かになったのはそれが原因だ。

「いや、別に問題ないだろ。お前程度の三流相手なら俺一人で三ツ星の酒が樽で買えるぐらいお釣がくる。」

「へえ？随分舐めてくれるじゃないかい？」

余裕といった態度のウェルに対し同じく余裕といった態度のマイン。

「まあ事実だし？」

「そうかい、それなら……やって見せな！！」

「よし、じっくりくるな。」

ウェルがマインと戦闘を始めた頃カケルは既に迷宮ダンジョンに潜っていた。

「丁度良いガントレットがあって良かったなホント。バランスもとれるし。」

配給室に入ったカケルの眼に真っ先に飛び込んできたのは今左手に着けている古ぼけたガントレットだった。

「まあ片方だけ真ん中のテーブルの上にポツンと置かれてたら目立つよなあ。周りのは壊れてんのにこいつだけ古ぼけただけってのが特に。」

廃棄処分の予定だったのか左手用のしかないガントレットは部屋の中央にあるテーブルの上に壊れた剣や槍などと一緒に置かれていた。

「まあ使えれば問題ないけどな。」

カケルは自分の足元を見る。

「リザードマンはともかくこいつら程度なら問題なさそうだな。」

その足元には右腕を切り落とされ頭を潰された緑色の小人が息絶え

ていた。

「しかしまさかゴブリンとはなあ……。リザードマンの時から予想してたけどこの分じゃコボルトとかスライムもいそうだな。」

軽く溜め息をつくカケルの口元は僅かに笑っていた。

ガントレットを掴んだカケルは迷宮ダンジョンに直行し、地下一階のフロアを探索しながらその使い心地を確かめていた。

「最初は驚いたけど案外やれるもんだな。」

その練習相手となったのが迷宮ダンジョンに潜って五分もしない内に現われたゴブリンである。

「しかし動きが鈍い上に防御力も低くて助かったな。最初は驚いて反射的に蹴り飛ばしたけどそれだけで死んだし。」

蹴り一発で倒せる相手と分かったカケルはその後落ち着いて闘うこ

とができた。

「と、ドロップしたし拾いますか。」

足元のゴブリンはいつの間にか消えていて三枚のコインとゴブリンが持っていた棍棒だけが残されていた。

「しかしこのコイン何なんだ？ エンじゃねえから使えそうにねえしやっぱ換金でもすんのかな？」

悩みつつも腰に着けたポーチにコインと棍棒をしまう。ちなみにこのポーチは迷宮に潜ろうとした時に見張りの兵士から貰ったものだ。何でも昔冒険者だったらしく自分が冒険者になった時と同じ年頃のカケルを応援したくなり、自分が使っていたポーチをくれたのだ。

「これもつ完璧にRPGの中じゃねえのかな？」

受け取る際にカケルの頬が引きつっていたのはご愛嬌である。

「うーん、このフロアはもう大丈夫っぽいし、地下二階に潜ってみるか。」

地下一階のフロアは通路が十字路になっており、入り口から見て左右の通路の先は行き止まりであった。

カケルは今左の通路の先におり、そこで七匹目のゴブリンと遭遇し、倒したところだった。

「あゝ、それにしても宝箱が無いのはまだ一階だから仕方ないのかそれとも僕の運が悪いのが原因なのか……。」

前者であって欲しいと願うカケル。果たして彼の願いは届くのだろうか。

「まあこのフロアにはゴブリンしかいないみたいだし仕方ないのかな。」

溜め息を吐きなくなるが幸運が逃げそうな気がしたためにそれを抑える。

カケルは今最後の通路を進んでいた。

「にしてもガントレットは使い心地が確かめられて良かった。けど戦闘初心者の僕はリーチが長い剣を使った方が良いかもな……。」

巻いた包帯の一部に別の包帯を通すことで帯にし、それを肩にけることで背負っていた剣をカケルは手に持つ。

「手に持つ分には大丈夫だけどやっぱりまだ鳴れないしなあ……。」

そう言いつつ包帯を巻いたままの剣を振り回すカケル。
すると。

「……アアアアアアアア……！」

突然、通路の先から叫び声が届いた。

「な、何だ！？」

カケルは振り回していた剣を両手で持ち直し、切っ先を声がした先に向ける。
しかし、カケルはあることに気付く。

「この声、ゴブリンじゃん。」

ダンジョン
迷宮に潜ってから何回か戦い倒した敵の声だと分かったカケルは幾らか冷静になった。

「考えてみればこのフロアはゴブリンしか出ないんだ……。何だよ、驚いて損した。」

突然叫び声が聞こえたからといって驚き身構えた自分に呆れるカケル。

だが、すぐに思い直す。

「けどまあ、剣の練習になると言えば丁度良いか。」

そう言って再び構え直すカケル。
そして。

「アアアガアアアー！！！」

目の前に一匹のゴブリンが現われた。
ゴブリンは狂ったようにカケルに向かって走って来る。
それを見たカケルは。

「見え見えなんだよ単細胞。」

馬鹿にしたように呟くと。

「ウラアアアアア　　！！！」

ゴブリンに負けない程の叫び声をあげながら。

ズシャア！

ゴトツ！

ゴブリンの首を斬り飛ばした。
。

「漫画みたくできるもんだな。」

自分なりに剣を上手く使えたと思ったカケルは興奮を隠せなかった。

「この世界にはワクワクするものが沢山あるし、これなら傍観なんてしなくても楽しめるんじゃない……。」

久しく感じる高揚感に酔うカケル。
興奮のあまりゴブリンを殺したかどうか確認しようとしもない。

だからこそ自分の背後で起こっていることに気付かなかった。
。

ズドオオオオオオオン！！

それは突然のことだった。

「ガハッ！？」

何かが爆発したかのような音がしたかと思うとカケルの背中を強い衝撃が襲った。

「（い、一体何が！？）」

何とか原因を把握しようとするが、衝撃で吹き飛ばされた身体が痛み、思考が纏まらない。

「ぐ、糞つたね。」

カケルは痛む身体に鞭打ち、何とか立ち上がる。

「顔面打ったけど鼻血が出た程度だし背中も服が破れた程度で済んだか……。」

カケルは身体のチェックを終えると何が起こったのか知るために後ろに振り返る。

「いやいや、これは無いだろ……。」

カケルが先程までいた場所は炎で塞がれていた。

「マジで爆発かよ…。しかもこれ進むしかねえじゃん。」

炎は今も激しく燃え盛っており、消えるのは最低でも数時間かかるように思えた。
しかも。

「段々こつちまで来てんな……。」

炎は徐々に燃え広がりつつあり、最初はカケルの場所から三メートルは離れていた筈が、その差は二メートル程に縮んでいた。

「畏か何かか？まあとりあえず地下二階のフロアに急いだ方が良さそうだな。」

カケルは吹き飛ばされた際に落とした剣を広い直すと早足で地下への階段を目指す。

「ガ、ガァッ！？クソッ何なんだこいつは！？」

ある場所で一人の冒険者があるものと戦っていた。彼の後ろには一人の少女がいる。

「あ、あつ……！」

少女は恐怖に震えて座り込んでいる。

「大丈夫だ、君は私が必ず守る。如何にあいつが強くとも所詮は地下一階に出てくるような奴だ。地下十階を狩場にする私が負ける道理など……。」

少女を励ます男に一本の鎖が飛んで来る。
それは男を。

「在りはしない!!」

打つ前に他でもない狙われた男が手に持っていた剣で斬り落とした。

「どうした、化け物!その程度か!?!」

相手を挑発する冒険者の男。
そんな彼に対して相手は残っている鎖を

。

ドスッ!ドスッ!ドスドスドスドスッ!

地面に突き刺した。

「武器の動きを自ら封じるとは血迷ったか!そのまま死ねい!」

それを見た冒険者の男は剣を構え、相手に向かって走り出した。

ドオオン！！

「な、何だあ？また爆発か！？」

階段を目指していたカケルの耳に再び爆音が届く。

「しかもこの先からかよ！階段無事なんだろうな！」

音源が進行先だと分かったカケルは慌てて走り出した。

「階段が崩れてたら焼け死ぬしかねえじゃねえか！そんなの御免だ！」

必死で走るカケルの眼に通路の終わり、恐らく階段が在ると思われる部屋への扉が映る。

「オラアアア！」

バンッ！

その扉を蹴り開けながらカケルは部屋に飛び込む。

「あらよつと！」

着地の際に膝を曲げることで勢いを殺し、そして立ち上がる。

「なんだ此所？部屋全体が罅だらけつてのは爆発が起きたってんなら納得できるけど……。」

飛び込んだ部屋は崩壊手前という感じであり、大規模な爆発が起こったのならそれは不思議ではない。
しかしカケルにはどうしても気になることがあった。

「爆発って言うよりも何かが刺さりまくったみたいに穴だらけだな。」

部屋中にある罅は爆発の衝撃で入ったものと言うよりはむしろ何か
が突き刺さり、その穴を中心として入ったものであった。
まるで小規模のクレーターのようである。

「ん？」

部屋を見渡していたカケルだが、ふと見覚えのある茶色が眼に入る。

「あれ、ファラ？」

それは一緒に朝食を食べた少女、ファラだった。

「こんな所で何してんだ？それにこの部屋、何でこんな有様に……。」

ドオオオン！！

「！？」

突然、部屋の奥から爆発が起こった。

「ま、またか！？」

カケルはファラの前に立ち、衝撃から守る。

「つて、危な!!」

顔面に飛んできた瓦礫を腕を交差させることで防ぐ。多少腕が痺れるが顔面に瓦礫が当たることには比べれば些細な問題だ。

「砂埃が……!」

何が爆発の原因か気になるが砂埃が凄まじく、収まるまで諦めて眼を閉じる。

「本当に何がどうなってるんだ……?」

何故爆発が起こるのかカケルには分からない。
それでも必死で考えるカケルの耳が微かな音を拾った。

「……し……いだ。」

音はカケルの後ろから聞こえてくる。

「……たし……せいだ。」

聞こえてくる音は声だった。

そして、この場で声を出することができるのはカケル以外に一人しかない。

「ファラ？何言って……！？」

自分が庇っている少女を振り向くカケルは息を呑んだ。

「私の……、私のせいだ！」

カケルが知るファラという少女は明るくて元気なまるで太陽のようなイメージを持てる少女である。

「私が……、私が冒険者になりたいなんて思ったから！私が依頼なんてしたからヘインズさんが……！」

そんな彼女が自分を責める様にして
泣いていた。

「私なんかが……、私なんかが……！」

ファラは手で顔を覆ってしまふ。

「お、おいファラ？事情は分からないけど今はとにかくこの部屋で何が起こってるのか説明を……！？」

ゾクリッ！と悪寒が全身を走った。
カケルはファラに問い質すことを止め、すぐさま正面に向き直る。

「な、何だ？このやばそうな感じは……？」

カケルの視線は先程爆発が起こり、今は炎が燃え盛っている場所に固定される。

すでに砂埃は収まっているため眼を閉じる必要はなくなっていた。

ジャラッ！

「……何の音だ？」

炎の中から金属が擦れるような音が聞こえてくる。
より注意深く炎を見つめていると、それは視界に映った。

「……人間、なのか？」

それは人影のようなものと認識できた。
だが、それはおかしい。何故なら人影は炎の中にいるのだから

。

「っ！…どうもあいつが元凶みたいだな……。」

炎の中で生きていることができる人間などいない。

カケルは炎の中に見える人影こそが先程から起こっている爆発の原因だと悟る。

「ケ、…ケヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ……！」

ジャララララララ……

突然の笑い声と金属音と共にゴウツ！と炎が弾ける。

「……何だよ、あれ？」

呆然と眩くカケル。
その視線の先には
。

「ケヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！ケヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ
！！」

影のように揺らめく身体から鎖を生やし、狂ったように笑う骸骨頭
の化け物がいた。

探索（後書き）

文章の書き方が下手ですみません。

決意（前書き）

あと一話投稿します。

決意

呆然と立ち尽くすカケルと自分を責める様にして泣くフアラ。
二人がそのような状態になった原因は。

「ケヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

二人に何もせず、ただ狂った様に笑い続けているだけだった。

「何だよ、こいつ……。」

呆然と呟くカケル。彼の頭の中は混乱と恐怖、そして怒りが渦巻いていた。

「……こんなの、一階のフロアに出て来て良い敵じゃねえだろ！」

それは、初心者が来ることが多い場所に出て来る敵としては明らかに強すぎる敵がいることへの混乱だった。

「こんなところで……、やっと探していたものが見つかったって時に……！」

それは、ずっと探していた自分の心を奮わせるものを見つけたことによる希望を絶望に叩き落とされる恐怖だった。

「こんな理不尽……、認められるかよ！」

それは、今この場にいる自分を含めた全てに対する怒りだった。

やがて、爆発したそれらの感情は、一人の少女へとぶつけられる。

「……ファラ？これはお前が原因か？」

目の前の化け物がこのフロアにいる原因だろうと思われる少女へと。

「どうしてくれんだよ……、なあ？」

ファラは何も喋らない。ただ泣き続けるだけだ。

「こんなところで……、やっと昔みたいにくわくするもの見つけたって時に……。」

ファラを責めるカケルの声は震えていて。

「こんなところで……、死にたくねえよ！！」

その瞳からは涙が溢れていた。

「ケヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

相変わらず狂った様に笑う骸骨頭の化け物は二人が絶望し、泣く様子を愉快そうに見ていた。

「……けんな。」
「ケヒヤ？」

しかし、カケルが漏らした呟きに反応し、笑うのを止める。

「ケヒヤヒヤ？」

何か言ったか？とも言う様に軽く笑う骸骨頭。
それに対してカケルは。

「ふざけんなって言うてんだよ！この糞骸骨！」

怒りを露にした。そして、剣を構える。

「こんなところで死んでたまるか！お前なんか……！」

カケルは剣を構えたまま目の前の化け物に向かって走り

。

「負けてたまるか……！」

渾身の力で骸骨頭に振り下ろす。
だが。

ジャララ！

ガキーン！！

骸骨頭は鎖を盾にし、剣を防ぐ。

「何!？」

そして驚愕するカケルを。

ジャラララ!

ゴシャアッ!!

「げふ!？」

他の鎖で打ち付け、吹き飛ばした。

ズシャアアッ!

「痛！……クソが！！」

そのままカケルは地面に打ち付けられるが、悪態をつきながらも立ち上がる。

バキーン！

だがその瞬間、右手に持っている剣から不吉な音が聞こえた。

「な……、こんな時に！！」

見るとカケルが右手に持っていた剣は砕け散っていた。

「糞つたれ……！！」

ブンッ！

ガキーン！

苛立ち紛れに手に残った剣の残骸を骸骨頭に投げ付けるが当然のよう
に鎖で弾かれる。

「ケヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

骸骨頭の笑いは止まらない。カケルにはその笑い声が自分を嘲笑っ
ているように感じられた。

「この…、舐めんな！」

剣を捨てた右手を強く握り締め、再び骸骨頭へと突貫する。
その拳は光り輝いていた。

「これなら……、どうだあああ！！！」

放たれる閃光を纏った拳。ウェルを殴り飛ばした時よりも遙かに強力なそれは。

ズガアアアン！！

ピシッ！！

「ゲビヤア！？」

見事骸骨頭に命中し、弾けずに残っていた炎の中まで吹き飛ばした。

「まだ終わらねえぞ、ゴラアア！！」

吹き飛ばした相手が死んだか確認もせずにカケルは再び右腕を、正確には右腕に装備しているガントレットを輝かせ。

ブンッ！

ドオオン！

その場で骸骨を吹き飛ばした場所へ向けて振りかぶり、光弾を放った。

「ゲガビヤア!？」

着弾した瞬間に響く不快な声。それを耳にしたカケルは。

「やっぱり……、まだ生きてやがったかああ!！」

ブンッ!

ドオオン!

ブンッ!

ドオオン!

ブンッ!

ドオオン!

再び光弾を放った。激しい怒りを感じつつもまだ冷静な部分は残っている様で、撃つ度に右腕を構え直し、速度よりも正確さを追求した光弾を放ち続ける。

「ゲ、ゴ……、ビヤ……！」

段々弱くなっていく骸骨頭の声聞いた力ケルは構えを変えた。
腰を落とした状態で右拳を深く構え、今までよりも時間をかけて光を溜める。

「こいつで……！」

「ゲ、ビヤ……！」

そして、光弾が命中したことによって舞い上がった砂埃が晴れて姿が露になった敵へ向けて。
。

「とどめだああ……！」

ジャララララ！

ドスッ！ドスドスドスッ！

ドオオオオオン！

渾身の一撃を放った。

カケルが戦っている姿を見ながらファラは後悔していた。

「……やっぱり間違ってたのかな。」

自分が冒険者になるという選択をしたことが原因で起こった惨劇。護衛を依頼したヘインズは骸骨頭に爆殺され、目の前ではその骸骨頭を倒すべく必死で戦うカケル。

「冒険者なら大丈夫だと思ったんだけどな……。」

ファラが冒険者になろうと考えたのは一月前のことだ。
この世界の人間は十歳にして将来の道を決めることが普通である。
しかしファラは十五歳になるまで決めることが出来なかったのだ。

「……………なんですよ。」

ファラには六歳以前の記憶が無い。自分が何処で生まれたのか、両親は誰なのかすら分らない。

ファラの最初の記憶は自分の顔を心配そうに覗き込む老婆の顔だった。彼女はサヤと名乗り、森で倒れていた自分を見つけ、連れて帰ったのだと言った。

自分の名前だけは覚えていたファラはサヤに名乗り、自分は何処から来たのか分らない。家族の顔も名前も、そこどこかいるのかもすら分らないと告げた。だが、森で一人倒れていたということから自分は捨てられたのだと悟り、サヤに全てを話し終えた後泣いてしまった。サヤはそんなファラを抱き締め、泣き疲れて寝てしまふまで離さなかった。

泣き疲れたファラが目覚めた時、サヤは食事を用意してくれていた。最初はこれ以上迷惑をかける訳にはいかないと思い、遠慮するファラだった。

しかし、サヤは気にするなと言うのだ。

ファラは尋ねた。どうして自分にここまでしてくれるのかと。それに対するサヤの答えにファラは再び泣きだしてしまった。

サヤは言ったのだ。家族になるのだから食事を一緒にするのは当然だと。捨てられてたのだからそれを拾った自分がファラをどう扱おうが自分の勝手だ、だから家族として扱う。まだ一人で生きていく術も持たない子供なのだから例え反対しても拒否すると。

サヤが用意したのはパンとスープ、そしてアクラのソーセージとブトパのベーコンという質素なものだったが、ファラに取っては今でも忘れられない程美味しい食事となった。

「……………なんで。」

それからサヤとファラの生活が始まった。ファラはサヤの家名であるトートを名乗り、アルペペの町で育っていった。イクタという幼馴染の男の子もでき、時折サヤに叱られる程のいたずらもしたが元気に育ち、サヤを始めに町の人々とも打ち解けていった。

「なんで、私……。」

しかし、サヤとの幸せな生活は長くは続かなかった。

サヤがファラを拾ってから四年目の春、ファラが十歳の時にそれは起こった。

その日ファラはアルペペの中心部にあるレストランに来ていた。

この世界では十歳になった子供は将来の道を決める為に様々な職場を見学する風習があり、ファラは町で一番有名なこのレストランを見学することにしたのだ。

ファラはサヤが最初に作ってくれた食事に感動し、料理人になろうと考えていた。

自分も美味しい食事を作って皆を感動させたい、そして何よりサヤにも食べてもらい、あの時の恩を返したいと思っていたのだ。

レストランの料理長はとても丁寧に説明をしてくれ、ファラは満足して帰路に着いた。

「なんで……、どうして！」

歩きながらファラは今日の夕飯は何だろうなと考えていた。一昨日も食べたけどアクラのソーセージとブトパのベーコンだったら良いな、と考えた所で家が見えた。

顔を綻ばせ、歩みを早めたファラだったが、ふと異変に気付く。何時もなら夕飯の支度に火を使うため屋根の煙突から煙が登っている筈なのに、何故か今日はそれが無い。

「……………なんでこうなの？」

嫌な予感がしたファラは走って家に向かった。

扉を空け、玄関で靴を脱ぐ暇すら惜しんで居間に飛び込んだファラの眼に。

倒れたサヤの姿が映った。

何があつたのか理解できず一瞬固まってしまったファラだが、すぐに正気に返ると慌ててサヤに走り寄った。

必死で呼びかけるがサヤは反応しない。

自分では無理だと判断したファラは助けを求めて外に向かった。

「私はただ……。」

しかし、時すでに遅くサヤは息絶えていた。

近所の人が呼んだ医者にはサヤが死んだと告げられても理解出来なかったファラだが、サヤが埋葬された墓を見てようやくこれは現実だと悟った。

サヤの墓に抱き付きながらファラは泣いた。サヤの前で最初に泣いた時よりも大きな声で泣いた。

しかし、あの時とは違いサヤはいない。サヤの温もりを求めて墓を抱き締めるが伝わって来るのは冷たく、固い石の感触だけだった。

「私はサヤを……。」

それから五年間、ファラは家に閉じ籠るかサヤの墓の前で泣くばかりだった。

ファラはサヤから余程の贅沢をしない限りは一人でも一生は暮らしていけるぐらいの遺産を継いだので金銭の問題は無く、近所の人もファラを心配して何かと世話をしてくれたので生きていくことができた。

しかし、ファラはサヤが死んでから五年、一度たりとも笑うことは無かった。太陽のように明るく元気でいつも笑っていた少女の面影はもう残っていなかった。

そして、一月前。塞ぎ込み続けるファラに転機が訪れた。

「私はサヤを……、サヤを生き返らせたいだけなのに！」

それは、幼馴染のイクタが漏らした一言だった。

イクタはファラを心配して五年の間、暇を見つけてはファラの家を訪ね、ファラを元気にしようと話しかけ続けた。

その結果、最初は無視していたファラも話に相槌を打つ程度の反応はするようになっていった。

一月前のその日も何時ものようにイクタは自分が体験したことや町の人、そして外から来た人に聞いた話をファラに聞かせていた。イクタは両親が酒場を経営しているため外から来た人の話を家の手伝いといでに聞くことができるのだ。

そして、その日イクタが聞いた話はファラに希望を抱かせた。

イクタは迷宮都市についての話をファラにした。

曰く、迷宮ダンジョンから出るアイテムは神秘に満ちていて中には死者を蘇らせることができるものもあるのではないかと。

それを聞いたファラは考えた。それを使えばサヤとの幸せな生活を取り戻せるのではないかと。

その日ファラは帰ろうとするイクタに笑顔で御礼をいった。

実に五年ぶりの幼馴染の笑顔にイクタは驚いたが、やっと昔のファラに戻ったのだと喜んで家に帰った。しかし、次の日ファラの家を訪ねたイクタは後悔する。ファラは家に居らず、ただ書き置きだけが残されていた。

サヤと一緒に帰って来るからそれまで家を頼むという書き置きだけが。

「あの頃に戻りたいだけなのに……、どうして！」

イクタを見送ったファラはすぐに旅仕度をし、イクタに自分とサヤが帰るまで家を頼むという書き置きを用意すると旅立った。

旅立つ時にサヤの墓を訪れなかったのは次にサヤに会う時はサヤを生き返らせた時だという決意があったからだ。

そしてファラは一月かけてウィザニアに辿り着き、ユニオンで冒険者に護衛を依頼した。依頼を受けてくれたヘインズという冒険者は親切で逞しい好青年だった。

次の日の昼に潜ることにしてその日は別れ、彼に薦められた宿に泊まった。遂にサヤを生き返らせる為の第一歩が踏み出せることに興奮してなかなか寝付けなかったのは仕方ないだろう。その結果寝坊してしまい、朝食に食べようと考えていた大好物のセットが自分が食堂に着いた時には品切れになってしまったというのは本気で後悔したが。

気の良いお女将さんがサービスでくれたシチューセットを見てもあまり食欲は沸かなかった。

サヤを生き返らせる為の冒険が始まるのだから今日は大好物を食べて最高の気分で迷宮に潜ろうと考えていたのだからそれも仕方ない

だろう。

あまり駄々を捏ねてもお女将さんに迷惑がかかる為、仕方なくシチユーセットを乗せたお盆を持って空いている席を探していると、フアラの眼に異様な光景が飛び込んで来た。

たくさんの客が慌てて食堂を飛び出して行ったのだ。何事かと食堂を去って行く客達の間を縫うように通り、辿り着いた場所には一人の少年がいた。

フアラはその少年、いや少年が今にも食べ始めようとしている食事から眼が離せなくなった。

少年の食事はブトパのベーコンとアクラのソーセージのセット。フアラが今どうしても食べたい大好物だった。

思わず口から滝の様な唾液を垂れ流してしまったのは仕方ないだろう。

唾液が床に落ちる音を聞いた少年が振り返り、そして固まったのを見て自分がどんな表情をしているのか気付いたフアラもまた思わず固まってしまったが。

その後、正気を取り戻した少年からの提案でお互いの食事を交換することになった。

そのため必然的に食事を共にすることになったが、一人ではない食事は五年ぶりのことであつたために懐かしく、嬉しい気持ちになれた。寝坊してあまり時間がないため少年に心配されるほど慌ただし

い食事になってしまったが。

少年はカケルと名乗り、ウィザニアのことやこの大陸のことを尋ねてきたのでそれに答えた。

寝坊して時間があまり無いため急いでおり、なおかつ暫くまとめた会話をしていなかったために分かりにくい説明をほとんど息継ぎ無しで言うという失態を犯してしまったがカケルは説明を理解してくれたし息を切らしたこちらのことを気遣ってくれた。

「こんなことになるなら、依頼にすれば良かった……。」

その後彼を残してファラはヘインズとの待ち合わせ場所に向かい、約束の時間に間に合い、合流することができた。

ヘインズは迷宮ダンジョンに潜ってから一時間は冒険者としての心構えなどを説きながらファラにゴブリンとの戦いを見せることに費やした。その後ヘインズのアドバイスを聞きながらもゴブリンを一人で倒すことができ、ファラは祝福を受ける準備が整った。

今日のノルマは達成したため後は階段を降りて地下一階と二階の間にある休憩フロアの帰還陣を使用して迷宮の外に出た後ユニオンで祝福してもらっただったのだ。

「……サヤに叱られるだろうから自分でやることにしたんだけどな。」

しかし、地下一階の階段がある部屋で異変が起こった。

本来地下一階は最弱のゴブリンしか出現しない。それ故に冒険者が祝福を受けるための魔物狩り（モンスターハント）に使われている。そのフロアの一番奥深くの部屋にて、RPGで言うところのボスに値する魔物が出現したのだ。

その魔物、骸骨頭の化け物が放つ殺気にファラは身が竦み、座り込んでしまった。

そんな彼女を庇うようにしてヘインズは戦い、攻勢に出た瞬間に殺されてしまったのだ。

ジャラララ！

ドスッ！ドスドスドスッ！

ドオオオオオオン！

自分を責め続けるファラの耳が聞き覚えのある音を拾った。

その瞬間俯けていた頭が跳ねるように上がり、眼が音の出所を捕らえた。

そこには、片膝をつくカケルと先程まで骸骨頭がいた場所を覆い隠す砂埃があった。

それを見たファラは慌ててカケルにそこから離れるように声をかける。

何故なら、その光景は　　。

「駄目、カケル！早くそこから逃げて！」

先程ヘインズが殺された時に見た光景と同じだったのだから。

ズドオオオオオオン！！

そして、先程とは比べ物にならない程に強力な爆発が起こった。

渾身の一撃を放ったカケルは押し寄せる疲労により片膝をついていた。

だが、確実に仕留めたという確信からその顔は笑っていた。

「は、はは……。ボスキャラ出てきた時はどうしようかと思ったけどなんとかなったな……。」

砂埃に覆われているため確認は出来ないが、最初の一撃で骸骨頭に罅が入る音がしたため、あれだけの数と渾身の一撃を喰らった以上、まず間違いなく骸骨頭は粉々になっているだろう。

「っと、そーいやファラのこと忘れてた。」

安心して余裕ができると、自分が先程八つ当たりしてしまった少女

のことを思い出した。

「冷静に考えてみればあれが出たのはファラが原因って訳ないよなあ……。うわあ、どうしよう。謝れば許してくれるかな？」

謝るかどうかはひとまず置いてまず無事かどうか確認する必要があると思ひファラがいる方を振り向こうとすると。

「駄目、カケル！早くそこから逃げて！」

突然、ファラの声が響いた。カケルは疑問に思いつつも地面につけていなかった左脚に力を込め、左斜め前に前転してその場を離れる。すると。

ズボッ！

ダダダダダダッ！

砂埃から一匹のゴブリンが飛び出した。

「（ゴブリン？何であの骸骨頭がいた場所から出て来たんだ？）」

カケルは着地後すぐに振り返ることその光景を見ていた。

何故ゴブリンが今し方倒した敵がいた場所から飛び出したのか訝しむが、すぐにあることに気付く。

「（いや、待てよ。あいつ、さっきのゴブリンと同じだ。狂ったように突進するだけで棍棒も持ってない。）」

カケルが考えている間にゴブリンは先程までカケルがいた場所に着くと。

ズドオオオオオオン！

突如爆発した。

「な！？（さっきの爆発も今までの爆発もこれが原因か）ということとは、まさか！」

爆炎の中佇み、ボスのような強さを持つ魔物^{モンスター}。つい先程倒した筈のあの化け物ならゴブリンを爆弾に変える能力を持っていたもおかしくはないだろう。

そして、その爆弾ゴブリンが出て来たということはつまり。

ジャラララララ！

「ゲエビィアアアッ！！」

骸骨頭が生きているということの意味する。

「おいおい、マジかよ。何で生き残ってんだこいつ？」

如何にして先程の一撃を耐えたのか考えるカケルだが、その疑問はすぐに解消した。

ジャララララッ！
ドスッ！ドスドスドス！
ズボッ！ズボボボ！

砂埃に覆われ、影しか見えない骸骨頭が砂埃の外に伸ばしていた鎖を地面に突き刺し、そのまま引き抜くとその先に絡まるようにして狂った様子のゴブリンが出現したのだ。

「あー、そーいやさつきとどめさす時何かが刺さる音と抜く音がしたんだっけか。その後爆発音もしたしそいつら盾にして生き延びたって訳ね。」

参ったなこれ。と呟くカケルだがその顔に悲壮の色は無く、少し困ったような様子しか見て取れない。

「カケル！」
「ん、ファラか？」

悩むカケルにファラが近寄り、声をかけた。

「逃げて、カケル！ここは私がなんとかするから！」

「は？」

殿を請負うというファラ。カケルは言われた意味が分からずにポカ
ンとする。

「ヘインズさんが死んだのは私が依頼し……。うつん、そもそも私
が冒険者になるなんて考えたのが原因だから。もう私のわがままで
誰かを死なせることなんて絶対にできない。だからカケルは逃げて
！絶対に死なな。っ！？」

呆然としてファラの話を聞いていたカケルだが聞いているうちに腹
が立ち、拳骨を喰らわせて話を中断させる。

「な、何するの！？」

涙目になって抗議するファラ。それに対してカケルは
。

「すっげえ的外れなことほざくから黙らせた。」

ファラの決意をばっさりと切り捨てた。

「ま、的外れって……！」

「だってそうだろう？あれが出て来たのはお前のせいじゃないしヘインズとやらが死んだってこんな所での護衛である以上お前の責任にならないだろう？」

「う、いやそれは……。」

只でさえ迷宮ダンジョンという場所は命の危険があるのだ。そんな場所に冒険者見習いを守りながら潜るなど無謀にも等しい。

つまり、そのような依頼を受けた以上自分が死ぬ可能性を理解していると言えるのだ。

「知っていた上で護衛なんて引き受けたんだからファラの責任じゃないだろ。」

「いや、確かにそうかもしれないけど……！ていうかカケル、君さつき私が原因であいつが出て来たとか言って無かったっけ？」

「あ、それは本当にすまん。」

カケルの説明に多少納得しながらも先程自分の責任にしたことにつ

いて尋ねると、目の前の少年は頭を下げて謝った。

「いや、あの時はかなり混乱してたからつい八つ当たりしちゃって……。本当にゴメン！」

「……いや、そこまで謝られても逆に困るからもう良いよ。」

あまりにも見事な謝罪っぷりに怒りも沸かず、素直に受け入れ許すファラ。

「ありがとう！さて、まあそれはともかく。」

「立ち直るの早くない？」

簡単に許してしまったが早まったかとファラは若干後悔する。

「そんな訳でファラが殿なんかする必要ないから下がってて。」

カケルはまだ砂埃に隠れたままの骸骨頭の本体があるだろう場所を睨みながら前出る。

「いや、ちょっと待って！さっきので疲れてるでしょ！？私も一緒に……！」

「ゴメン、それは聞けないや。」

「っどうして！？」

共闘を拒むカケルに何故かとファラは問いかける。

「楽しいからだよ。」

「！？」

「今まで僕はずっと退屈だからって理由で傍観ばかりしてた。けど、こっちに来てからは退屈なんて全くない。」

カケルの独白は続く。

「命の危険を感じる今この状況にも胸が踊って仕方ないんだ……！」
「カ、カケル？」

今の状況が楽しくて仕方ないと言うカケルにファラは戸惑う。

先程自分に泣きながら八つ当たりした少年と同一人物だということが信じられない。

「さっきは死ぬことが恐くて泣いたけど、そんな自分に腹が立つ。」

カケルは構えをとる。

「女の子に八つ当たりして、何より生きることを一瞬でも諦めた自分に腹が立つ！」

その構えはボクサーのようなファイティングポーズ。先程のように遠距離から光弾を放つためのものではなく、明らかに近接戦闘を行なうためのものであった。

「さっき溜め込んだもの吐き出してすっきりしたら自分が情けなくなった。こんなじゃせつかくの楽しいことが台無しだ。だから……。」

カケルの右腕に装備されたガントレットが再び輝き出した。

「だからこいつは僕が倒す。倒してさっきまでの情けない自分とおさらばして、前に進む！」

そして砂埃が晴れ、眼の周りと口の部分以外は砕け散った骸骨頭の化け物が再び姿を現す。

「これが僕の物語！傍観者になってから数年振りに紡ぐ物語の始まりだ！」

決意（後書き）

最後のセリフはこの小説のタイトルに合わせました。

決着と悪夢再び（前書き）

これで第一章は終わりです。

決着と悪夢再び

砂埃が晴れ再び現われた骸骨頭は見るも無残にボロボロだった。だが、その瞳は怒りと憎悪に染まっておりダメージなどまるでないと言わんばかりに充ち満ちている。

「ゲエヴァアアア！」

最早笑い声も怒声に変わり、理性を失っているようにも思える。今カケルに飛び掛かっていないのが不思議な程だ。

「（さてどうすっかなホント？結構疲れてるしなるべく長期戦はしたくないんだよね……。）」

構えこそ解かずガントレットを輝かせ続けるカケルだが、実際は今にも横になってそのまま丸一日は眠りたい気分だった。

「（となると出来ればさつきみたいに遠距離から光弾撃った方が良
いんだろうけどしたらまた防がれるだろうし万が一命中しても後
何発喰らわせればいいのか分かんねえんだよね……。）」

骸骨頭は粉々に砕けていても影の部分にはほとんど損傷は見られな
いため致命傷には程遠い。

もし先程のように光弾を放ち続けることを選択しても先にカケルの
体力が尽きてしまうだろう。

「（やっぱりガントレットの光を撃つんじゃなくて直接叩き込むしか
ないよなあ……。しかもあいつの頑丈さを考えるとフルパワーでや
らないと多分死なないだろうし。）」

先程も渾身の一撃を光弾にして放ったがそれは防がれた。

連発の時とは違い溜めの時間があつたためその隙にゴブリンを引ッ
張り出すことが出来たからそうしたという可能性はある。

だが、喰らったら不味い一撃だから防いだという可能性もあるのだ。
もし後者だとしたら直接叩き込めばまず間違いなく致命傷だろう。
だが。

「（そうじゃなかったら立つことも出来なくなるだろうなあ……。さ
っきのでかいの一発でかなり疲れたし。それに……。）」

カケルは溜め息をついて相手を見る。

「ゴブリンを盾代わりに装備しちゃってるからなあ、あの骸骨。近付いた瞬間にドカーンってパターンだよなこれ。」

骸骨頭の化け物は先程引き抜いたゴブリンを鎖に絡ませたまま自分の前に配置していた。

光弾が来てもカケルが直接来ても、近付いた途端に爆発させることで防御とあわよくば攻撃を一度に行おうとするであろうことは目に見えている。

「初心者には難易度高過ぎるよなこれ。でも……。」

カケルは口元に笑みを浮かべた。

「やるしかねえよな！」

腕を上げて構えたままカケルは骸骨頭の化け物に突進した。

「ゲエヴァアア！」

骸骨頭はゴブリンを解放してカケルを迎え討つ。

「邪魔だ！」

ヒュンッ！ヒュヒュヒュンッ！

向かってくるゴブリンを威力を絞った光弾で迎撃する。

パンッ！パパン！
ドンッ！ドドン！

威力を絞っていてもゴブリンの頭を吹き飛ばすには十分な威力であり、光弾を喰らったゴブリン達は爆竹のような音を立てて爆発した。

「（よし、後はあいつの一番近くにいた一匹だけだ！）」

骸骨頭の化け物が待機させていたゴブリンは五匹、その内の四匹はたった今迎撃した。

残るは一匹、他の四匹とは違い自分のすぐ側、つまり一番後ろに待機させていた一匹だけである。

カケルとの距離は一番遠かったが、カケルは四匹の迎撃のために足を止めていたため、その間にかなり距離を詰めていた。

「（確かにさっきよりは近いけど、あの程度の爆発の威力ならここから迎撃しても余波は大したことがない、同じように迎撃した後全速力で接近してあいつに防御する暇も回避する暇もやらないで叩き込む！）」

そして、最後の二匹に放った光弾は見事に命中し。

ドオオオン！

先に迎撃した四匹よりも明らかに強く爆発した。

「な！？どわあっ！」

予想外の威力に後ろに下がっていたファラの所までカケルは吹き飛ばされた。

「カケル！大丈夫！？」

それを見たファラが急いでカケルの安否を確認する。

「ぐっ……！ああ、大丈夫だ。吹き飛ばされただけで大したダメージはない。」

「そう、良かったあ……。」

カケルの返答にファラは安心する。

「それにしてもどうなっただ？ なんであの一匹だけあんなに威力が高かったのかさっぱり分かんねえ。ファラはどうだ？」

「わ、私にも分からないよ。ヘインズさんが闘っていた時の爆発も最初はさっきみたいに大した威力じゃなかったけどその後は今のと同じぐらいだったし。」

ファラの答えを聞いてカケルは悩む。

「おかしいな？ 爆発の威力が調節できるんだっただら最初の四匹の威力をもっと上げていれば僕を完全に仕留められただろうに。」

「あれが限界だったんじゃないの？ ヘインズさんの時もあのぐらいの威力だったし。」

「いや、それは無い。」

カケルはファラの意見を間違いだと言答した。

「え、なんで？」

カケルが迷いなく断言したためファラは困惑する。

「さつき通路で会ったゴブリンはもつと凄い威力だったんだ。この部屋と通路の高さは大して変わらないだろ？けどそのゴブリンの爆発は通路を塞ぐ程の炎が出る程強力だったんだ。」

まず間違いなくこの部屋でやられたらカケルとファラは死ぬ。

骸骨頭の化け物は炎の中でも平気で佇んでいた所から察するに爆発に耐性を持っているためこの部屋を丸ごと吹き飛ばす程の爆発でも死ぬことはないだろう。

「それって本当！？いや、……けどもしそうだとしたら納得かも。」
「何？納得ってどういうことだ？」

爆発の威力に驚いたファラだが、何か分かったようだ。

「ほら、あいつ最初はこっちのこと馬鹿にした感じだったでしょ？一気に殺さないのは私達をなぶり殺しにして楽しむためじゃないかな？」

ファラの言う通りカケルが最初に相対した時骸骨頭の化け物はカケ

ル達を馬鹿にし、泣く姿を愉快そうに見ながら笑っていた。確かになぶり殺しをするような性格だと言えるだろう。

「（ファラが言った通りなぶり殺しにするつもりの可能性は高い。けど今は全く笑ってないってことを考えると楽しいという気持ちよりも怒りと憎しみの方が強いんだろう。あのタイプの奴がキレる時ってまず間違いなくむかつく相手をすぐに潰そうとするんだけどおかしいな？）」

かつて傍観してきた人間の中には骸骨頭の化け物と同じ性格の者が何人もいたためカケルは骸骨頭の化け物を取るだろう行動を予測していた。

だが、それに反し相手はこちらのことをじわじわと痛ぶるような攻撃をしてくるのだ。

不可解だと感じるカケルだが、ファラの言葉で一気に謎が解けた。

「それにしてもこの部屋から随分遠くまで行ったんだねそのゴブリン。というか私なんでこんなに落ち着いてるんだろう？カケルの影響なのかそれともやっぱりあいつが私達をなぶり殺しにする気満々でさっきから攻撃してこないからか……。」

「それだ！！」

「うひゃいつ！？」

カケルが突然叫び声をあげたためにファラは驚き、奇声をあげてしまった。

「な、何！？どうしたの突然！？」

「分かったんだ！あいつの能力が！」

「それ本当！？」

ファラはカケルの説明を聞く。

「一番爆発の威力が高かったのはこの部屋からかなり離れた通路で爆発した奴だった。その次は僕からそれなりに遠い位置にいた奴で一番威力が低い四匹は僕からあまり離れていない位置にいた。」

「そういえばヘインズさんが最初に倒したゴブリンもヘインズさんに結構近かったしさっきのゴブリンと同じぐらいの威力の奴等は結構離れた位置にいた……！ということはもしかして！？」

「ああ、間違いない。」

「「あいつのゴブリンは走った距離の流さに比例して爆発の威力が強くなる！」」

そう、だからこそ骸骨頭の化け物はカケル達を一気に吹き飛ばすことが出来なかったのだ。

カケルが切り捨てたゴブリンは実に数キロメートルの距離を走っていたのだ。

それだけの距離を走らせるには時間がかかり過ぎるし何より部屋の中では難しい。もしも一体だけ別方向に、それも距離を稼ぐために円を描くように走らせてはすぐに感づかれて光弾で撃たれてしまう。

「しかもあいつは新しいゴブリンを引き抜くのに数分のインターバルがいるみたいだ。さっきから僕達が動かないで何度も会話しているのに攻撃してこないのはそれが原因だ！」

「なるほど……。だから私妙に落ち着いてたんだ。戦闘中にこう何度も会話ができてたらそりゃ緊張感も薄れてくるよね……。！ってちよつと待って！ゴブリンは無理でも鎖で攻撃することは出来る筈でしょ？動いてないんだから私達良的になってるしあそこまで怒ってたらすぐに相手を殺そうとするんじゃないか……。」

「そう言われてみれば確かに……。」

ファラの話聞いて疑問を抱いたカケルは骸骨頭の化け物を見る。
鎖を揺らめかせてはいるが攻撃しようという感じはしない。

「あの鎖で何か別のことをしようとしているんじゃないかな？」
「分かんねえよそんなの。というかもし他に何か能力があったらし
んどいぞ。いや、今もしんどいけど……。」

カケルとファラは揺らめく鎖を注視する。
そしてカケルはあることに気付いた。

「ん？」

「どうしたの？」

「いや、気のせいかもしれないけどあの鎖だけ短くないか？」

カケルが指差した先の鎖は良く見なければ分からないが確かに他の
鎖よりも短かった。

「ああ、あれはヘインズさんが切り落としたんだよ。」「切り落と
した？」

「ヘインズさんがあの化け物と戦ってた時鎖を使って攻撃してきたんだけどその内の一本を剣で切り落としたんだ。」
「へえ、凄いな。」

ゴブリンとは違い鎖は縦横無尽に動く。

それを一本だけとはいえ切り落としたことがどれだけ難しいのかはカケルにも分かる。

ゴブリンを切れたことに有頂天になっていたことをカケルは改めて恥じた。

「その後さっきのカケルみたいに突進したら背中中の鎖で繋いで自分の後ろに待機させてたゴブリンを爆破してヘインズさんを倒したから多分誘いだっただんだと思うけど……。」

「思ったよりあいつ頭良いんだ……。かなり腹が立つけど。」

そこでカケルはふと気付く。

骸骨頭の化け物がそれだけの知能を持っているのなら今の状況も何かの仕込みではないかと。

そして良く考えてみれば鎖の動きは見るからに怪しく、自分達はそれを注視させられているのではないか。

「（ということはあの鎖は囷か。それに向こうから攻撃してこないってことはこっちが近付いたらすぐに攻撃できるように構えている

って可能性があるな)」

「ねえ、カケル？」

「（近付いて欲しくないのは渾身の一撃を叩き込まれる警戒してるのか？それとも何かを準備しててそれを隠している？）」

「カケルってば！」

「悪い、ファラ。少し考え事してるから黙って……、ああっ！？」

「きやあっ！？いきなり何！？」

突然の叫び声にファラは驚く。

「あいつまさか！？いや、それに違い無い！」

「何？何か分かったの！？」

「さっきファラが言ったる！あいつが背中の鎖を使って自分の後ろにゴブリンを待機させてたって！」

「う、うん！けどそれが一体どうしたの？」

「あいつがもし今も背中の鎖にゴブリンを繋いでたら？そしてそのまま自分の身体で見えないようにして前後に走らせていたとしたら！？」

「まさか……！じゃああの鎖の動きは！？」

「間違いなく囀を兼ねた迎撃の構え！しかも鎖が動く音でゴブリンの走る音を誤魔化しているんだ！」

その言葉を理解したのか骸骨頭の化け物は口元だけでニヤリと笑うと身体を横にずらした。

遮るものが無くなり見えたものは恐らく数十メートルは離れている

だろう場所からこちらに向かって走るゴブリン。
そして、そのゴブリンを繋いでいた鎖はすでに無い。

「ちょ、ちょっと！あれ爆発したらどうなるの！？」

「位置にもよるがまず間違いなく僕等は吹飛ぶな。」

「分かってたよ！分かってたけどそこは嘘でも良いから否定して！」

涙目で抗議するファラ。そんなファラにカケルは笑って見せた。

「大丈夫だ、手はある。」

「本当に！？だったら早く……！」

「と言う訳でファラ。」

妙に落ち着いているカケルを見てファラは嫌な予感がした。

「できる限り離れたら伏せといて。」

カケルは満面の笑みを浮かべながら右腕のガントレットを輝かせている。

「え、あの……。」

「正直さ、今すっごく腹立ってんだよね僕。具体的にはウエルの奴が勝手に僕をユニオンに登録した時ぐらいに？」

「……いや、何で私に聞くの？というかウエルって誰？」

「この怒りどうしてくれようか？ああ、そうだ！花火になって貰おう。」

「うん、落ち着いてカケル。そして何で花火？」

二人の会話は明らかに成立していない。

そして何より一人は満面の笑みを浮かべてこそいるが何故か近寄りがたい気配を発している。

さらにもう一人はその気配に当てられて冷や汗を流しながら若干逃げ腰になっており、とてもではないが会話をする状態ではない。

「いやさ、なんかこう苛つくんだよね。一発で吹き飛ばそうとしてるのが。お前らなんか木っ端微塵にしてやるよって言われてるみたいで？」

「言っていない！言っていないからね！？というかまさかとは思っけどさっきみたいに光弾でなんとかするつもりじゃないよね！？」

違って欲しいというファラの想いは。

「え？当然じゃん？」

心底意外そうな顔をしたカケルに肯定された。

「待つて待つて！そんなことしたら爆発して私達吹飛んじやうよ！？」

「いや、まあ……。大丈夫でしょ。」

「その根拠は！？」

「勘。」

「信用出来ないからね！？」

喚くファラを優しい声でカケルは宥める。

「大丈夫だ。……僕の運は零を通り越してマイナスの道の果てにあるみたいだから。」

「もうイヤアアアアッ！！」

そして、ゴブリンが骸骨頭の化け物のすぐ後ろまで来たタイミング

で光弾が放たれた。

音はしなかった。突然周りが真っ白になったことを認識すると咄嗟に地面に伏せた。
次の瞬間には衝撃波が頭上を通り過ぎた。

ズドオオオオオン！！

その一拍後には凄まじい轟音が鳴り響いた。
もし伏せるのが一秒でも遅れていたら死んでいただろう。
それを理屈ではなく本能的に察したファラは身震いした。

「（カケルの馬鹿あ！これ下手したら私死んでるよ！？）」

ファラは心の中でカケルを罵る。

さすがに声に出す余裕はないようだが意外と大丈夫のようだ。

ビュン！

ズドオオオン！

「（ん？今何か通り過ぎたような……。瓦礫かな？）」

何かが自分の頭上を通り過ぎ、壁にぶつかった音がした。

丁度爆風も収まったので立ち上がり、飛んで行った何かに近付く。

「あの二人……。いや、一人と一匹から出来るだけ離れないと巻き添えで死にそうだしね。どのみち壁まで行く必要があるからいつか。」

「

身体に付いた埃をはたき落としながら少し早足で歩き続ける。

その様子から一刻も早く少しでも安全な場所に行きたいという意味が読み取れる。

「あ、見えて来た。」

一分分程歩いた頃になると目視できるようになってきた。

「カケルじゃないみたいだね。うん、良かった。」

見えてきたのは黒い何かだった。

「黒焦げになった瓦礫かな？けどそれだったら砕けてるんじゃない……。」

黒い何かの周りには他に黒い物は見当たらない。

「他に黒い物って何かあったっけ？」

そしてファラはとうとうそれが何なのか認識できるぐらいに近付い

た。

壁に埋まる黒い何かとは。

「ゲ……、ガハッ……。」

骸骨頭の部分が完全に砕け散り黒いボロ雑巾に目玉と口を糊で接着したような状態になった化け物だった。

「……何だよ？」

先程は泣きながら呟いていた言葉だが、今度は呆然としたように呟かれ、空しく響いた。

「あ、生きてた生きてた。」

呆けていたファラは背後からかけられた聞き覚えのある声に反応し、振り返る。

そこには、元凶がいた。

「いやー、お互い生きてて何よりだな！」

脳天気になげたことを言うカケルにファラは詰め寄り、腰に付けているポーチからある物を取り出す。

「ねえカケル、暑くない？」

「暑いといえは暑いけどまあ大丈夫かな？ところでその青い液体が詰まったビンで何をしようとしてるんだ？」

ファラはにつこりと笑うと、告げる。

「もちろん、暑がつてるカケルを涼しくしてあげようとしてるんだよ。……永遠に。」

どうやら立て続けに起こる事態によって受けたショックが限界を超えたらしい。

「ひどいな、殺害宣言なんて……。僕の人生初の出来事だよ。」
「ついさっき私のこと殺しかけた人が言う台詞？あと君は面と向かって言われたことが無いだけで影で言われてると思うよ。多分百回は。」

お互い笑顔だが不思議な威圧感が発せられている。

「さあどうだろう？まあ直接言ってきた人は世間に顔向け出来ないようにするだけだよ。」

「君は……、はあっ、もう良いよ。」

疲れたように溜め息を吐くとファラは威圧感を消す。
するとそれに合わせてカケルも威圧感を消した。

「でも本当に危なかったんだよ。もし死んだらどうしてくれるの？」
「ああ、それは問題無い。」

カケルはファラが死んでいた可能性をあっさりと否定する。

「爆発っていうのは基本的に破壊力が上に向かっていくからな。爆発を直接喰らわない位置で伏せて爆風さえなんとかすれば大抵は死なない。」

それが本当だとしたら確かに死ぬ確率は低い。だが、それでも問題はあある。

「あの時伏せろって言った理由は分かった。けどあの威力なら大怪我をしてたかも知れないんだよ？」

ファラはカケルの言い方に怒りを覚えながら抗議する。

「かなり頑丈な盾があつたからな。それで爆風はほとんど防いだからむしろ無傷で済む確率の方が高いと判断した。」

「盾？」

自分の記憶が正しければ目の前の少年はそのようなものを持っていなかった筈だ。

「ああ、あれだよあれ。」

カケルが指差している方向は自分の真後ろ。
そしてそこにいるのは壁に埋まった、いやめり込んだボロ雑巾が一匹。

「あの骸骨の横っ腹に光弾当ててゴブリンの目の前に突き飛ばした。」

ファラはこの瞬間、骸骨頭の化け物がボロ雑巾になった経緯を知っていた。

「なんとなく曲げられる気がしたんだけど上手くいって良かった良かった。」

「……。」

「あ、ちなみに僕が生きてるのはあいつに光弾撃った後すぐに地面を陥没させてそこに隠れたからだから。」

「……なんていうか、何でもありだね君。」

カケルの非常識さにはもはや呆れるしかない。

「で、こいつにとどめさすんだけど……。」

「何？今更倒さないとか言う気？」

「いや、そうじゃなくて……。」

カケルは真剣な表情をしている。

その様子から真面目な話だと悟ったファラは黙って聞くことにした。

「こいつのとどめは一緒にささないか？」

「え？」

カケルは理由を述べる。

「こいつは君の護衛だった人を殺したんだろ？さっきも自分のせいだと泣いていたんだから仇は討ちたいんじゃないか？」

「いや、まあそれは確かに……。」

「そして何より……。」

カケルはファラに告げる。それがファラの為だと信じて。

「冒険者になったのは何か目的があるんだろ？それが何なのかは知らねえけどたかが地下一階、しかも冒険者初日でそんなんじゃないその目的果たす前に死ぬぞ。」

「……！……私の目的も知らないのによくそこまで言い切れるね。」

「生憎と、その手のものには敏感なんだな。」

今まで目的を持っていなかったからこそファラの目的の大きさが分かる。

そして、それがどれだけ困難なもののかもカケルは察していた。

「そんな負い目を背負ったままじゃ勝てる敵にも勝てねえ。」

カケルは異世界に来てから初めて出来た知り合いが目的も果たせず無念を抱いて死ぬのを良しと出来なかった。

「だから少しでもそれを軽くするために、そんなもって絶対に目的を果たすって覚悟を決め直すためにもこいつのとどめは一緒にさそうぜ。」

確かにカケルの提案は魅力的だ。自分では到底敵わぬと判断し、討つことを諦めたヘインズの仇を討つことができる。だが、一つだけ納得できないことがあった。

「負い目に関しては認めるよ。けど覚悟の方は絶対って決めて……。」

「生きることを諦めてたくせにか？」

「！」

そう、ファラは骸骨頭の化け物に恐怖を感じ、生きること諦めた。しかし、カケルは同じように恐怖を感じてはいたが生きること諦めずに必死で抵抗し、もはや倒す寸前まで追い込んでいる。どちらが冒険者として優れているかは言うまでもなく、故にファラはカケルの言葉を否定できない。

「そっか……、そうだよな。」

自分の命を簡単に諦めてしまった者が死者を蘇らせるなど何の冗談だと言いたくなる。
ファラは自嘲した。

「（考えてみれば私の人生はずっとサヤのものだったんだなあ。サヤはあの時私を生かすためにあんなこと言ったんだろうけど。）」

捨てられてたお前を拾ったのは私なんだ。お前をどう扱おうがお前の人生をどうしようが私の勝手だ。まだ子供のお前に拒否権はないよ！

ただ泣くばかりだった自分を助けてくれたサヤの言葉。
ただ聞くだけならとてもひどいが、その言葉にはファラのことを本

当に心配している気持ちが込められていた。

そして、目の前の少年もまた同じ様に泣いていた自分を守り、不器用ながらに自分のことを心配していることが分かる言葉をかけてくれている。

「（サヤには依存していた。五年間も生きる気力を失って、それでもなお生き返らせたい程に。）」

その結果が生きることを諦めたという現状だ。

それは自分が生きることを望んでくれたサヤに対するこのうえない程の侮辱ではないか。

「（もしこのまま君の手を取ってしまったら私は前に進めない。私の物語は空虚なものになってしまう。だから……。）」

フアラはカケルの瞳をまっすぐ見つめる。

「分かった。やろつ。」

「そうか。じゃあ早速……。」

「その代わり……。」

ファラは一度深呼吸をすると、一気に言い切る。

「私が覚悟を決め直したら、友達として、仲間として君と一緒にいてもいいかな？」

そして、カケルに手を差し出した。

カケルは少し驚いたがすぐに笑顔になると。

「喜んで。」

その手をとった。

「（いつかサヤに会えた時、カケルを紹介してそれまでに彼と紡いだ私の物語を話してあげよう。一人だけではまだ無理だけど私は私の意思で私の人生を歩めるようになりましたって。そう、これが……。」

ファラは満面の笑顔でカケルに告げる。

「これは、私が自分の意思で歩み始める物語。今この瞬間がその始まりだよ。」

「さて、やるか。」

「うん。」

カケルは右手のガントレットを輝かせ、ファラは先端に青い水晶を埋め込んだ杖を構えている。

「杖ってことは魔法でも使うのか？」

「魔法？何それ？私が使うのは刻印術だよ。」

「刻印術？」

「知らないの？まあ見てて。」

ファラは杖を掲げると、呪文を唱える。

「水の刻印^{コード}よ。我が意思に応じその力を示せ。」

すると、ファラの頭上に直径一メートル程の水球が出現した。

「水よ、冷たく固くなりて我に仇なすものを討ちたまえ。」

続く詠唱により水球は氷球に変わった。

「こんな風に触媒に刻んだ刻印^{コード}を呪文を紡いで使う技術を刻印術^{コード}って言うんだ。」

「へえ、すごいな。」

「ちなみに肉体に刻んだ刻印^{コード}を意味か詠唱で使う技術を刻印^{コード}技^{コード}って言うんだよ。」

ファラの説明の通りならばカケルの胸にある聖痕^{コード}が刻印^{コード}の類であつ

た場合、それを使う技術は刻印技になるのだろう。

「それじゃあ準備も終わったみたいだし。」

「うん、やろう。」

そして、二人は渾身の一撃を骸骨頭の化け物に叩き込んだ。

「喰らいやがれ、化け物！！」

「いっけえ、氷球アイスボール！！」

二人の攻撃を見事直撃し、骸骨頭の化け物の首から下を吹き飛ばした。

「ゲ、ガアアアアッ！！」

骸骨頭の化け物は断末魔の叫びをあげた後、残った頭部がまるで塵のようになり、跡形もなく散った。

「や……、やったああ!!」

「あー、流石にへとへとだ。さっさと休みてえ。」

ファラは歓喜のあまりに飛び跳ね、カケルは満身創痍で座り込む。

「あ、ごめんね。ちょっと待ってて。」

「待つのは良いけどなんかやることでもあんの?」

「うん、ヘインズさんに黙祷をしたいから。」

ファラはどこか吹っ切れたような顔をしていた。

「分かった。けど急いでくれな?」

「大丈夫大丈夫。ちゃんと分かってるって。」

そして、ファラは祈りを捧げ始めた。

「ふう……、しかし明日は筋肉痛決定だな。」

今は気分もいいしそれほど気にすることでもないかと思いつながら立ち上がる。

「さつてと。階段は何処かねえ？」

通路の炎は消えるどころか勢いを増していたため入口まで戻るのとは不可能であり、地下一階と二階の間にある帰還陣で帰るしかない。

「確か部屋の一番奥にあるんだつたよな。ん？一番奥？」

そういえば最初に骸骨頭の化け物を吹き飛ばした時あいつは部屋の奥まで吹き飛んだ。

そして何より、自分が着いた時にはすでにボロボロだったこの部屋。自分が着いてからは骸骨頭の化け物はゴブリンを大量に、しかも何匹かはそれなりの威力で爆破している。

自分もまた大量の光弾を放ち、二発だけだがかなりの威力のものを使った。

しかもその内の一発は骸骨頭の化け物を狙ったとはいえ方向としては部屋の奥めがけて放っている。

嫌な予感がしたカケルが部屋の奥に向かい見つけたのは。

「カケル、終わったよ。もう、黙ってこんな所まで行かないでよ。この部屋広いんだから端から端まで行くのって結構大変……」ってどうしたの。」

「……ファラ、かなりやばい。」

「何が？というか私としては君の汗の量の方が水分不足的な意味でやばいと思うんだけど……。」

「階段埋まった。」

「そんなに暑いのか？今水筒出すからとりあえず水飲んで……」って、え？」

瓦礫に埋もれた階段だった。

「え、ええー！？ちよつと待って、何で！？」

「多分僕があいつを吹き飛ばした光弾が直撃した衝撃だと思う……。」

「君のせいじゃん！どうすんの！？」

「いやー、どうしよう。通路の火も燃え広がってるからいつかここも燃えるだろうし。というかよく見たら部屋の入口の方はもう燃えちゃってるね。」

「どうしようじゃないから！？ねを付けても可愛くないし！このままじゃ私達灰になっちゃうよ！？」

「ここにいたらそうなるな。」

カケルはファラの抗議を流しながらポケットに手を入れる。

「諦めてないよね！？こんな終わり方嫌だからね！」

「うん、というわけで帰ろう。」

「だから手がないって……あの、カケル？その手に持つてるのは何？」

「昨日迷宮から脱出する時に使った赤いボール。」

「それ、簡易帰還陣という名前でまず初心者じゃ買えないぐらい高いしリザードマンもどきとかしか落とさないアイテムだった気がするんだけど……。」

「え？」

カケルはファラの言葉に衝撃を受けた。

「知らなかったの？なんかもう君の非常識さには改めて驚かされたよ。まあ今回はそのおかげで助かったんだからいいかな……。」

「あいつ、自分のことリザードマンって言ってたのに実はもどきだったのかよ……！詐欺だ！」

「って驚くところそこお！？」

目の前の少年はやはりどこかずれてるとファラは思った。

「ま、いいか。」

「立ち直り早いね!？」

「いや、だってもう君のすぐ後ろまで火が迫ってるから早くしないと丸焦げに……。」

「いつの間に!??ていうか気付いてたんなら早く言つてよ!」

結局、時間がないため問答は後回しにして脱出を優先することになった。

「じゃあ行くぞ。」

「分かったから早く!」

昨日と同じ様に赤いボールもとい簡易帰還陣を地面に叩き付けると再び魔法陣のようなものが出現した。

「急ごう!」

そう言つてファラが帰還陣に入ろうとした時にそれは起こつた。

「熱っ！？」

「カケル、どうしたの！？」

突然胸が熱くなり輝き出した。
そしてそこには。

「これは！？」

「コード刻印！？」

三つ目の聖痕が刻まれていた。

そして聖痕が放つ光は見覚えのある球体へと形を変えた。

そう、カケルが昨日この世界に来るきっかけもとい原因であるあの球体に。

「ちょっと待てええええええ！？」

「カケル？え、何？あの球体がどうかしたの？」

ファラはカケルの反応が骸骨頭の化け物と戦っていたときよりも必死なことを疑問に思う。

見た限りでは特に危険はないからだ。

そう、見た限りでは。

シュルルッ！
パシッパシッ！

「え？」

そして、悪夢は繰り返された。

「やっぱりかよ！？」

「何？何なのこれ！？ていうかぬるぬるしてる！？いやあああああ
あ！！」

「ちよっ、待て！なんでこいつがまた出て来る！？」

「君が出したんじゃないの！？ていうかこれスカートの中に入って
……！カケルの変態！！」

「僕のせいだよ！？というかなんで迷宮探索ダンジョンに来てんのにミニスカ
ートなんて履いて来てんだよ！？」

「良いでしょ別に！動きやすいんだから！」

意外と余裕がありそうな二人だがとうとう。

「いやああああ！？なんか引つ張られてる！？」
「やっぱりかよ！？」

二人は徐々にだが球体に引きずり寄せられていく。

「どうなるのこれ！？」
「落ち着け、多分大丈夫だ！」
「多分て何！？やっぱり君これのこと何か知って……！」

そこまで話したところでついに二人は球体に飲み込まれた。

「うわああああ！！！」
「きゃああああ！！！」

残ったのは火に包まれた帰還陣と崩落した部屋だけだった。

第一章完

第二章へ続く。

決着と悪夢再び（後書き）

骸骨頭の最期が少しあっけなかった気がします。がこれ以上長引かせるとぐだぐだになる気がしたのでこうしました。

感想お待ちしております。

そして改めて、更新が遅れたことを謝罪します。

帰還と進化、そして破壊と逃亡（前書き）

今回は少しやり過ぎた感があります。

この小説を読んでくれている方がいたら感想をお願いします。

帰還と進化、そして破壊と逃亡

「あー、いけないいけない。最後の方を書き間違えちゃったよー。」

黒いインクを吸った羽ペンを一回置き、新しい羽ペンとインク壺を取り出す。

「こうゆうの初めてだからしょうがないけど我ながら文章力無いな
ー。」

自分の才能の無さに呆れながらも新しいインク壺の蓋を開けると中には白いインクがたっぷり詰まっていた。そして新しい羽ペンを持つと先端をインクに突っ込む。

「本当に良くあの爺さんもあそこまで読みやすく纏めたもんだなー。
まあいくら内容が彼の物語でも著者があの爺さんだから参考にする
どころか読む気すら沸かないんだけどねー。」

羽ペンをインク壺から引き抜くと先端はたっぷりと白いインクを含

んでいた。これだけあれば十分だろう。

私はたった今書き終えたあの子の物語の最後を締めくくった文字を塗りつぶす。

うん、十文字と句読点が一つだから十分足りる。

「ホント、読む気無かったのになー。けど彼を助けるためには一度読んで章を書き換える必要があったからなー。」

まあ仕方ないか。丁度白インクも渴いたところだし羽ペンを先程まで使っていた黒インクの羽ペンに持ち替え、訂正する。

「さて、この子の物語のプロローグは彼と共有することに成功したし後は奇数の章を彼の物語、偶数の章をこの子の物語にして合わせれば完成だから頑張らないとなー。」

黒インクが渴き、望み通りの文章になったことに満足する。
私も頑張るのだからこの子にも頑張って欲しい。

「巻き込んだのは悪いと思ったけどちゃんと援助はしてあげるから許してね？カケル君？」

多少の罪悪感を滲ませながらも呟く少女が訂正した文には先程までは書かれていた『第一章完 第二章へ続く。』の文字は無く、代わりに『プロローグ完 カケルの物語第二章へ続く』と書かれていた。

「あー、マジで疲れた。早く寝てえ……。」

光る球体に吸い込まれ、吐き出された先は予想していた場所だった。

「ここは何処！？私は生きてるの！？」

うん、彼女がいることも予想していたけどこの混乱っぷりは予想していなかった。

「暗いよ怖いよ嫌だよ！！このまま消化されるなんて絶対に嫌だよ！！」

どうやら彼女はここはあの球体の腹の中だと思っているらしい。違うと説明しようにも落ち着かせるのが面倒臭いし面白そうなのでこのまま傍観することにした。

「最期が触手の玉の餌だなんて嫌だよ……。こうなったら……！」

何か手があるらしい。どんな方法なんだか見物だな。

そう思っていると突然頭上に光る球体が出現し、僕達が今いる場所、教室を照らした。

そう、僕がクラスメイトと共にあの球体に飲み込まれた場所、黒奉学園一年B組の教室をである。

「イヤアアアアア！？また！？またなの！？また食べられるの！？」

どうも光る球体は彼女、ファラのトラウマになってしまったようだ。光に照らされて露になった顔は可愛らしいが今は青ざめ、眼に涙を浮かべている。

うん、なんていうかこう……グツとくるものがある。正直近くでじつくりと見てみたいが流石にまた吸い込まれるのも触手に捕まるのもめんなのですぐ側にあった教壇に隠れ、霊器が進化した時に出て来た鏡を使って様子を見ることにする。

「食べないで私美味しくない食べないで私美味しくない食べないで私美味しくない食べないで……。」

決して……！決してファラが怖いから隠れている訳ではない！

ドサッ！

「あだっ！？」

教壇の裏から様子を伺っているとどうやらたった今球体が誰かを吐き出したらしい。今回は一人だけらしく球体は溶けるように消えていき、教室は再び闇に包まれた。こうも暗いと鏡では見えない。仕方ないが鏡をポケットにしまい、声で判別することにした。

「クソ！あの祭壇の所に着くと思ったから捕まっちゃったのにこれじゃあ骨折り損じゃねえか！」

何故黒城は祭壇の所、もといユリウスの聖域とやに行きたかったの
だろうか？

それも気になるが今は置いといてこのまま隠れておくことにしよう。
本格的にファラがやばくなってる。暗いから見えないけど雰囲気
かなり変わっていつてる。

「ねえ、君。」

「あ？誰だお前？」

「大丈夫だよ。」

「何が？つか質問に答えろや。」

「（黒城君空気読んで！なんかもう傍観とかできるレベルじゃない
くらいにその子おかしくなってるから！）」

しかし、カケルの心の叫びは届かない。

「今から私が刻印術使って風穴空けるからそこから脱出しよう。」

すると、教室がぼんやりと青い光で照らされた。

どうやらファラが杖に刻まれている刻印コードを発動させたらしい。

「お、明かりか。気が利くな。しかし祭壇の所じゃなくても元の世界に帰れると思ったのに刻印術使える奴がいるってことはここはまだテラかよ。あー、マジで殴りてえ。」

「（なんで気付かないの！？）というか脳天気すぎだろ！？そして誰を殴る気だ！？）」

しかしまたしてもカケルの心の叫びは届かない。

「ん？てかここよく見れば教室じゃねえか！てことは俺帰れたんだな！やりい！」

「水の刻印よ、渦巻く槍となりて敵を貫け。」

「（お前はKYを極めてんのか！後ろで明らかにやばいもん唱えてるじゃねえか！いい加減気付け！）」

三度目の心の叫び、それは今度こそ届いたのだった。

「ん？」

フアラに。

「お前じゃねえええええ！」

しかも、ご丁寧なことに杖を教壇、つまり自分がいる場所に向けている。これは不味い。ファラの頭上には渦巻いて槍のような形状になつた水があつた。

それはまさしく水のドリルと言えるもので、先端がこちらを向いて
いる。

「なんかあそこ怪しいな……。うん、決めた！あそこに穴を空けよう！」

教室の中を胃袋の中と勘違いしているファラとしてはどこに穴を空けても違いは無いらしい。

刻印術を放つ方向に何かがあって不利益なことが起こるという心配が欠片も感じられない。

「（や、やばい！）ちよつと待てファラ！撃つな！僕だ！駆だ！」

流石に満身創痍の状態では防ぐことはおろか避けることすらできない。

そう判断したカケルは慌てて教壇から這い出てファラに呼びかけた。

「ん？お前葉山か？お前も無事だったんだな！」

すると何故か狂喜乱舞していた黒城が反応した。

「黒城うおお！てめえじゃねえんだよ！いい加減に空気を読みやがれ！」

「うおっ！？なんだ急に一体どうした！？葉山お前口調が変わったとかいうレベルじゃなくてキャラが崩壊してんぞ！？」

「てめえがKYなのが原因だろうがああああ！！！」

確かに黒城が原因でカケルのキャラは見事に崩壊しているが、仕方ないだろう。

黒城としてはようやっと帰って来れたことにテンションが上がっていて周りが全く見えていない状況であり、むしろせっかく帰ってこれたというのに普段と変わらないテンションのカケルが異常なのだ。この辺は普通の学生でいた黒城と面白そうだからといって様々な危険事なども命懸けで傍観してきたカケルとの普段の私生活の違いからくる差であると言える。

「KYって何だよKYって！俺のどこがKYなんだよ！？」

「そんな危険物のすぐ側で脳天気にはしゃいでる時点でKYだろうが！」

「は？危険物？」

カケルの言葉を聞いた黒城はまず足元を見て特に何も無いことを確認する。

次に周囲を見回すと目に入ってきたのは先程話していた少女だった。そして視線は少女が持つ青く光る杖に向き、最後に少女の真上に向けられ、そこにあつた水のドリルに固定された。

「……え、何この状況？」

「ようやっとかー！！」

黒城煉、ようやく自分がKY呼ばわりされている理由を知るのがた。

「とにかくお前はそいつを止める！俺はもう動けん！」

「お、おう。分かった。」

そして、黒城はファラの方を向き、刻印術をやめさせようとする。

「おい、嬢ちゃん！あそこにいるのは俺が知ってる奴だしここもよく知ってる場所だからそのドリルなんとかしろ！」

だが、ファラは反応しない。カケルが教壇から這い出てきた時から微動だにしない。

「おい！聞いてんのか……って、ああこりゃだめだ。」

全く反応しないファラに苛立ち、顔を覗き込んだ黒城が何故か諦めた。
一体なんだと思い黒城に無言で続きを促すと予想外の一言が返された。

「こいつ、氣い失ってる。」

この状況でいくらなんでもそれはないだろう。ならあの水のドリル

はどうして消えていないんだ。

よく見るとファラの杖の青い光が強くなっている。

しかもそれに比例するように水のドリルがより長く、鋭くなっている。

「……なあ、葉山？」

「なんだ、黒城？」

黒城が僕の方を向く。その顔は死に行く戦友を見送る兵士を連想させた。

「すまん、俺には無理だ。」

「……うん、僕も流石にこれを止めろとは言わん。」

カケルは最後の足掻きとばかりに渾身の力を霊器であるガントレットに込め、床を殴った。

なんとか床に穴を空け、そこから下の階に逃げようとしたのだったが、疲れ切った身体では床を多少へこませることしかできなかった。そして、水のドリルが放たれた。

「葉山あああああ！」

黒城が自分と呼ぶ声を聞きながらカケルは目前に迫る水のドリルをなんとかしようと必死で考えていた。

「（もう霊器は使えねえし動くこともできねえ、こりゃやべえな。なんか他に手はないか……？）」

そこで気付いた。

「（待てよ？確か聖痕に触れたらボロい手袋がガントレットになっただったな？あれからまた一つ増えてるし今触れたらまた何かに変わるんじゃないか？）」

すでに水のドリルとの距離は一メートルもない。
そしてこれ以上悩んでいる暇も無い。

「（こんなことでくたばるんなざ冗談じゃねえ！っ！か絶対殴る！」

「ファラ殴る！」

さすがにこれから一緒に冒険しようという仲間にとどめをさされるのは嫌だ。
ならばなんとしても生き延びなければ。

「とにかくなんでもいいからこれをなんとかできる物になりやがれ！」

震える腕を気合いで持ち上げ、胸の聖痕に当てる。
すると、聖痕が熱くなり、霊器と共に輝き出した。
そして、とうとう水のドリルが直撃する。

「葉山……。」

黒城は未だに状況を把握しきれてはいないがクラスメイトである葉山が殺されかかっていることは理解していた。
しかも、名前を知っていることからその相手が彼の知り合いだということも。

そして、それらを統合した黒城の結論は　　。

「あいつ……プレイボーイとかいうやつだったんだな。」

カケルが女にだらしないう奴だというものだった。

もはやKYどころの問題ではない。黒城の頭の中で今の状況をどのように整理したのかを纏めると、次のようになる。

- 一、葉山は自分を殺そうとしている相手の名前を知っている。
 - 二、つまり相手とは知り合いで葉山は何か怒らせることをした。
 - 三、しかも相手は自分達と同じ年っぽい少女でしかもかなり可愛い。
 - 四、自分が訳分からないう世界に行っていたのだから葉山も同じ世界に行っていた。
 - 五、当然向こうの通貨も無ければ住む所も無い。
 - 六、ならば誰か適当な人間を襲って奪うか脅迫、もしくは取り入るかあるいは可能性は低い相手は女だった場合ものにして貢がせるなどの必要がある。
 - 七、相手は女。クラスメイトではないことから向こうの世界の人間。
 - 八、何故ここにいるのか？それは葉山を追ってきたから。
 - 九、そのような状況になる理由はただ一つ。つまり少女は葉山がものにした女。
 - 十、必要なこととはいえ異世界に行ってから二日足らずで捨てるなら殺してやると思わせる程に相手を自分に惚れさせた葉山。
- 結論、葉山は女を道具のように扱うプレイボーイである。

以上である。

そして、このような結論に至った黒城はカケルを心配することはやめ、思う。

「（リア充死ね！）」

黒城煉、彼女いない歴が自分の年齢と同じ人間の魂の叫びだった。そして、血涙を流さんばかりにカケルを睨み付けていると水のドリルがカケルに命中する寸前だった。

「（そのままくたばりやがれ！）葉山あああああ！」

内心ほくそ笑む黒城。だからこそ気付けなかった。カケルが霊器を聖痕に当てようとしていることに。
。

「（ん、なんで光って……？ってまさか！？）」

気付いた時にはもう遅かった。

カッ！という音と共に光が強くなり、赤く輝き出した瞬間にはもう水のドリルは白い煙となって消滅していた。

それが靈器の進化だと気付いた黒城は慌てて懷から自分の靈器を取り出し、刻印術を使う。

「風の刻印^{コード}よ、吹き荒れろ！我に仇なす者より我を守る鎧となれ！風の鎧^{ウインドーム}！」

進化し、長剣から刃渡り十センチ程の短剣になった黒城の靈器は風の刻印^{コード}が刻まれており、風の刻印術を行使できるようになっていた。そして、竜巻のような風が黒城の身体に纏りつき、鎧となる。直後、凄まじい炎が黒城を襲った。

「うおおおおお！？」

風の鎧が炎を受け流すように防ぐがそれでも多少の熱は通すし眼前に迫る炎には恐怖を感じる。

「葉山の靈器ってどんだけ凄いだよ？この炎明らかに四つ星レベルはあるんじゃないか？」

炎は瞬間的なものだったらしくすぐに収まる。
そして黒城を見た。

「あゝ、もうマジで動けねえ。」

地面に仰向けに寝転ぶカケルの右腕に装備された赤く輝く靈器。
それは手の甲の部分にはルビーのように赤い宝石が装着され、全体的にオレンジ色の金属で作られているが手のひらと関節の部分は黒い金属で作られている。
そして何より違うのがサイズである。
肘の辺りまでしかなかったガントレットは肩まで完全に覆われていた。

「う、羨ましい……。」

黒城は自分の靈器と比べて明らかに強そうなカケルの靈器に嫉妬する。

黒城の靈器も風の刻印コードが刻まれているし何より長剣の時は自分が振り回されていたため今の短剣という形状は黒城にとって非常にありがたいものなのだが関係ないらしい。

「おい、黒城？」

「あ？なんだよクソが！」

嫉妬のため口調が乱暴なものになっているがカケルは気にせず続ける。

「とりあえず今すぐここから離れたいんだが動けん。だから運んでくれ。」

「は？」

突然自分を運んでくれと言い出すカケル。
何故そうなるのか理由が分からない。

「お前、またかよ……。んじゃあ周りを良く見ろ。」
「周り？」

とりあえず足元を見る。少し焦げた床がある。問題無い。
次に周りを見る。校庭や学校の周りの建物が見える。何かがおかしい。

嫌な予感がするが天井を見る。綺麗な星空が見える。

「ん？星空？」

自分が今いる場所は教室、つまり屋内であり上を見ても天井がある筈である。

それなのに星空が見えるということはつまり……。

「なあ、葉山……？」

「なんだ？黒城。」

違っていて欲しいと思いながら葉山に聞く。

「これ、もしかして校舎吹き飛んでる？」

「明らかに僕達が原因だな。」

どうやら当たってしまったらしい。

「いや、待て。それはおかしい。あれは葉山の炎が原因だろ、俺は関係無い！」

「いや、校舎が吹き飛んだのはお前のせいでもあるから関係大ありだ。」

自分に非は無いと主張する黒城だがカケルは認めない。

「理由は！？証拠は！？それがないと……！」

「もちろんある。」

「な……！？」

どうやら黒城は本当に気付いていないらしい。

「お前なあ、火に風当てたらどうなるか知らないのか？」

呆れたように言うカケルに少しキレながらも黒城は返答する。

「小学校の理科の問題だから知ってて当然だろ！火の勢いの方が弱かった場合消えるが逆に火の勢いの方が強かった場合強くなる……
って、あ！」

「お前はもうKYとかいうレベルじゃなくてうっかりだなうっかり。」

ようやく気付いた黒城に呆れながら続ける。

「僕の炎はせいぜい教室を吹き飛ばすぐらいの威力しかなかったんだ。それを校舎が吹き飛ばレベルにしたのはお前の風が原因だ。」

つまりこういうことである。

カケルの炎は黒城の竜巻状の風によって威力が上がり、更には周囲や真上に散らされたのだ。

「いや、待て！確かにそれなら俺にも責任はあるがいくらなんでも校舎を吹き飛ばす威力にはならねえだろ！？」

「確かにそれだけならそこまで大した威力にはならねえがお前忘れたのか？」

そして、告げる。

「僕達の教室の真上には家庭科室が、そのまた真上には科学室が密集してるんだぞ？」

「あ……。」

黒奉学園の構造を簡単に説明するとカケル達一年生の教室は一号館の一階に、二年生、三年生の教室もまたそれぞれ二号館と三号館の一階にあり、上の階には教科ごとの教室が存在している。

カケル達の教室がある一号館は三階建てであり、二階に家庭科室、三階に科学室が密集している。

二号館は四階建てで四階に音楽室、三号館は五階建てで五階に美術室がそれぞれ密集しているが今は関係ないので置いておく。

「つまりお前が真上に流した炎が天井をぶち破って二階の家庭科室にあるガスボンベに引火。ガス爆発を起こしてさらに天井をぶち破って三階の理科室にある薬品に引火して爆発。そしてさらに天井をぶち破ってこんな風に眺めが良くなったんだよ。」

二階と三階は他の教室が連鎖爆発して跡形もなく吹き飛んだらうけど一階はこの教室とその周り以外は無事だろう。

爆発したのは上の階なのだから下の階である一階の教室には大して爆風がいつてない筈だ。
造りが頑丈なこの校舎なら全壊はないだろう。

「し、証拠は………？」

黒城の最後の抵抗も空しくカケルは証拠を突き付ける。

「お前を中心にして焦げた床。」

床が焦げていることは先程自分でも確認しているため否定できない。
黒城は自分にも非があることを認めざるを得なかった。

「風の刻印^{コード}よ、優しく緩やかに吹け。空を駆ける我等の足とならん。
飛翔^{フライ}！」

黒城の靈器の柄が緑色の光を放ち、風が吹く。
すると、身体が浮き始めた。

「空飛べるとか便利だな。」

「まあ確かに。戦闘にはあまり役に立たねえけど。」

しかし高度はそれなりにあり、校舎よりも高く飛んでいた。

「しかしこの嬢ちゃん何者だ？あの炎喰らったのに無傷とか半端ねえぞ。」

「僕にも分からないが多分刻印術で防いだんじゃないか？」

ファラはまだ気を失っており、手足をだらんとしながら運ばれている。

「いくら暴走状態バーサクでも無傷はないだろ。」
「暴走状態？」

暴走状態について黒城が説明する。

「ようするに刻印術の暴走ってやつだ。氣力をえらく持ってたからそうなるって術者は氣絶しちゃう。嬢ちゃんが氣を失ったのもそれが原因だな。」

「うわあ……。」

「けど威力は通常より三倍は上がるぞ、まあ制御するのは無理だけだな。」

氣がつけば目的地の真上にいた。

「あ、ここだ黒城。」

「お、そうか。よし、下りるぞ。」

素早くかつ慎重に降下する三人。
さすがに緊張したが地面に足がつくとホッと安心した。

「ふう、何とかだったな。」

「ああ、途中下をパトカーやら消防車やらが通ったのにはビックリしたけどな。」

やはりあの爆発はかなり目立つたらしく近所の誰かが通報したらしい。

そちらに注意が向いていたため恐らくカケル達の姿を見た者がいないことが救いだ。

「しかし助かったぜ葉山。お前の家がこんな山の中にあつてよ。」

「駆でいいつて。まあな。ここはじっちゃんが遺した山なんだが別荘が建つてたし麓のバスに乗れば三十分で学校に着くから住むには十分なんだ。」

カケルに限らず黒奉学園の生徒達は一人暮らしの者が多い。

全国的に有名なだけあつて地方から来た者もいるから当然だ。

勿論学生寮もあるがアパートを借りるなどして個人で暮らす者もいる。

しかしカケルのように山で暮らす者はいない。いくら通学に問題がないとはいえ同じ様に山に別荘を持っている生徒がいたとしても学生寮に入るかアパートを借りるかのどちらかを選ぶだろう。

「まあなんにせよ無事に逃げられたことだし良しとするか。この後のことも考える必要があるし。」

「確かにな。とりあえず中に入れ。」

カケルは鍵を開け、黒城を招く。

「そうだな。よっと……、お邪魔します。」

黒城はファラを担ぐとカケルに続いて家の中に入った。

「おー、広いし綺麗だな。」

「まあ元々別荘だから広めに造つてあるし掃除をしないとじつちゃんに悪いからな。飲み物持つて来るからそのソファにでもファラを置いて他のソファでくつろいでいてくれ。」

そう言つて駆は台所へと消えて行つた。

俺も言われた通りファラつて嬢ちゃんをソファに寝かせると別のソファに座り、遠慮なくくつろぐことにする。

「ふう、しかし本当に疲れたな。」

ソファに身体を預けながら部屋の中を見渡す。

今いる部屋はリビングであり、フローリングに絨毯が敷かれ、中央にガラスのテーブルが置かれている。

自分が座っているソファはテーブルを囲むように設置されていて全部で三つある。

そして最新の薄型テレビがソファに座りながら見える位置に置かれていて、くつろぎやすい。

壁や天井は白く、掃除が行き届いていることもあり清潔感に溢れている。

「けどなんか息苦しいんだよなあ。」

確かに綺麗に掃除されているがまるで生活感が感じられない。

普通一人暮らしなら部屋が汚れていなくとも何か娯楽になるものがどこかしらに置かれている筈なのだがそのような類のものが全くないのだ。

「待たせたな。烏龍茶にしたが大丈夫か？」

「ん？ああ、問題無い。」

カケルが戻ってきたため黒城は今考えていたことを中断し、烏龍茶が入ったコップを受け取った。

「んじゃとりあえず今後のことを決めますか。」

烏龍茶に口をつけながら何かアイデアがないかカケルに尋ねた。

「あれから二日はたってるからな。まず間違いなく行方不明として問題になっているだろう。」

「まあそりゃそうだろうな。」

黒奉学園は有名だ。行方不明者が出たというなら格好のスクープとしてマスコミが見逃さないだろう。

「さすがにこのままだと面倒臭いしな。それに当然生徒の自宅や保護者に連絡がいくし調べもするだろう。」

「面倒だな。そうなるとこの家に隠れていてもすぐにばれちゃうし。」

八方塞がりかと思う黒城だがカケルには秘策があった。

「だから特別休暇を使って一年B組全員で学校を休んで旅行に行つたことにする。」

「！……なるほど、その手があったか。」

特別休暇とは黒奉学園が試験的に作ったものである。

夏休みはおろか春休みも冬休みも祝日もない黒奉学園では生徒の一人一人が最低でも二か月間の休暇を自己申請でとれるようになってる。

定期テストの日は必ず出席する必要があるが自由に休暇をとることが可能である。

しかも学園が出す休暇テストというものを受け、合格すると休暇が増えるのだ。

これにより、病気などで入院しても特別休暇を申請すれば皆勤に響かないなどのメリットがある。

何より、黒奉学園は成績を全てテストで決めるため授業に出なくても定期テストで合格点を出せば進級できる。

勿論、特別休暇申請をせずに休んだり授業をサボったりするとその分平常点が引かれるためズル休みはできないなどの工夫は当然されている。

「けどよ、どうすんだ？全員分の休暇申請をするにしてもあいつらのIDがなけりゃあ無理だぜ。しかも二日もたってるから仮に俺らが今から事務室のパソコンに申請しに行っても問題行動したってことに変わりはないから面倒臭いことになるのは目に見えてるぜ？」

特別休暇は四号館の事務室の前にあるパソコンからしか申請できず、しかも生徒に渡されたIDが必要である。

「ああ、大丈夫。ハッキングするから。」

何か目の前のクラスメイトがとんでもないことをさらりと言った気がする。

とりあえず残っていた烏龍茶を一气飲みして落ち着く。
うん、よく冷えていて美味い。

「申請が遅れたとか言われないようにあの日の記録に上書きすれば問題ないだろ。責任も担当事務員に押しつけられるし。」
「よし、ちよい待て。」

何か恐ろしいことを言い出したクラスメイトを黒城は止める。

「なんでハッキングなんてできるんだ？」
「趣味だ。」

どんな趣味だと心の中で突っ込みながらも続ける。

「責任を押しつけるとか駄目だろ。担当事務員の泉だったか？あいつが叩かれるぞ。」

「ん？何だ知らないのか？」

そして、爆弾が落とされた。

「あいつ、大麻の栽培やってるから押しつけても別に問題無いぞ。」

よし、落ち着け俺。現実から逃げるな。

「もう一回言ってくれないか？」

「泉は大麻の栽培をやってる。元から犯罪者だから押しつけても問題無い。」

「聞き間違いであって欲しかったよちくしょう！」

キツとカケルを睨みつけ、怒鳴る。

「お前何！？大人しいキャラだと思ったら実は色々とやばいキャラだしなんか訳の分からない技術持ってるし事務員のやばい秘密知っておきながら警察に通報もしないし責任擦り付けて罪をさらに重くしようとか平然と言うのは何が原因！？」

それを聞いたカケルは自分の烏龍茶を一口飲むと答えた。

「全て趣味の産物だ。」

「どんな趣味持ってたらかんなことになるんだあああ！！」

混乱する黒城。ここが山で無ければ近所迷惑になっていただろう。
今は夜中なのだから。

「うるさい！」

「ゴフッ！」

そして、背後に立っていたファラに杖で殴られ気絶した。
さすがにこの騒ぎの中では眼が覚めたらしい。

「静かにしてよね。お休み！」

黒城が気絶したことを確認するとソファに戻り、再び眠りについた。
どうやら、ただ単に眠りの邪魔になる黒城を黙らせたかっただけの
ようだ。

すぐに寝息が聞こえてきた。

「ふむ……。」

カケルは立ち上がり、リビングから出ると廊下の収納スペースから
予備の毛布を三つ取り出すとリビングに戻る。

そして、ソファで眠る二人（内一名は気絶）に毛布をかけると自分

もさつき座っていたソファに横になり、毛布を被った。

「寝るか。」

そしてリモコンで明かりを消し、自分も二人と同じ様に眠りについた。

次の日の早朝に眼が覚めたカケルは顔を洗うと自室のパソコンから黒奉学園の事務室のパソコンにハッキングし、黒城に宣言した通り一年B組全員の特別休暇を申請する。

その後朝食を用意し眼が覚めた二人と共に食べた。

まさに、朝飯前の作業である。

このことを知った黒城がまた混乱するのだが今は置いておこう。こうして、異世界から帰還した日の夜は更けていくのだった。

帰還と進化、そして破壊と逃亡（後書き）

カケルはチートです。

黒城は色々と可哀相なキャラです。

悪夢（前書き）

初感想GET！

ペースは不定期かつ遅いですがこれから頑張っていきます。
今回はぐだぐだ感と軽いギャグを中心に書きました。
それではどうぞ！

悪夢

カケルとファラ、そして黒城が帰還してから一週間後、三人はテラに帰り、迷宮ダンジョンを探索していた。

「お、宝箱発見。煉、調べてくれよ。」

「分かった。少し待て。」

「あ、向こうからウルフの群が来たよ！」

それを聞き、カケルは指示を飛ばす。

「僕とファラで迎撃するから煉は宝箱の方に集中してくれ！ファラ、遠距離から仕留めるぞ。」

「了解！」

そしてカケルは霊器を赤く光らせ、ファラは杖を青く光らせる。

ファイアボール
「炎球！」
アイスボール
「氷球！」

そして、それぞれの刻印術がウルフの群に放たれた。

「ギャンツ！」
「キャインツ！」
「ギャインツ！」

悲鳴をあげながら消えていくウルフ達。
後にはコインと牙が残されていた。

「おし、ウルフ程度のモンスターなら問題無く仕留められるようになったな。」
「楽勝だね！」
「おーい、終わったぞ。」

自分達が確かに強くなっていることを実感していると煉が声をかけた。

どうやら宝箱の調査が終わったらしい。

「どうだった？」

「毒針の罠があつたが解除しておいた。だから開けても大丈夫だ。」
「じゃあ私が開けるね。」

そして、ファラが宝箱を開けた。

「どうだ？」

「んっとね、指輪があつたよ。」

「よし、じゃあ鑑定するか。」

そう言つて煉はファラから指輪を受け取ると鑑定を始めた。

「ねえ、カケル。」

「ん？どうしたファラ。」

鑑定中の煉を見ているとファラが声をかけてきた。

「私達つて良いパーティだね。」
「そうだな。」

場面は一週間前に戻る。

朝食を終え、煉を落ち着かせた僕達は今後の方針を決めるためにお互いの情報を交換していた。

ファラはここが異世界だということに最初は驚いていたが朝食を食べてみてその美味しさに感動し、食事が美味しければ他のことはどうでもいいとまで言い出した。

ちなみに朝食は冷凍シューマイとグラタン、そしてトーストという微妙な組み合わせだったがファラには好評で、煉は栄養バランスをもっと考えろと言いながらもしっかり食べていた。

ファラの食事への飽くなき執念はなんとなく察していたが煉もまた方向性は多少違うが食事にはこだわりがあるらしい。

ちなみに朝食の席で黒城は自分のことを名前で呼ぶようにと言ったので今後は煉と呼ぶことにする。

食事を終えて食休みがてらに情報交換をしたところ煉はファラの出身地でもあるカナン地方を治める三つの王国の一つ、アルセリア王国にある森に落とされたことが分かった。

「あの時は本気で死ぬかと思ったぜ。いきなりティグルとかいう虎みたいなモンスターに襲われたし。」

その後半日程追われ続けたがなんとか逃げ切り、湖に着いたらしい。

煉はひどく喉が渴いていたので湖の水を飲み、一息ついた。すると突然泉が波打ち、一人の女性が現われたのだという。

彼女が言うには自分は湖の精霊で煉がテラの間人ではないと分かったらしく、面白そうだから刻印^{コード}を授けると言いだしたようだ。

煉は不思議に思ったが元の世界に帰るためには力が必要だと思い湖の精霊の申し出を受け、刻印^{コード}を授かることにした。

そして、言われるままに霊器である長剣を湖の水に浸すと刀身が輝きだし、それに共鳴するように煉の腹が熱く光りだし、それらが収まった後には刀身に風の刻印^{ウインドコード}が刻まれた霊器と二つになった聖痕があつたらしい。

そして刻印術を教えてもらいティグルをなんとか倒して刻印が三つに増え、霊器が進化して短剣になったところで突然光る球体に飲み込まれた。

「そして教室に吐き出され、今に至ると。」

「まあそんなところだな。」

話が一区切りついたところで煉は手元のカップに残ったコーヒーを飲み干した。

「その精霊ってのは何者なんだ？」

「分かん。けどあのユリウスとかいうクソ神と何らかの関わりがあるともてまず間違いないだろうな。」

それには同意だった。異世界から来たなどということを何らかの方法で知ったとしてもすぐに信じるような馬鹿はまずいない。だがその原因、つまり僕達をテラに招いた側の奴だとすれば納得がいく。

「そっいや駆。お前ちゃんと鏡使ってるのか？」
「鏡？このことか？」

煉に言われてポケットから取り出したのは霊器が最初に進化した時に一緒に出てきた手鏡だった。

「ああ、それだ。」
「これがどうかしたのか？」
「その様子だとやっぱり知らないか。まあ俺も精霊に聞いて初めて知ったんだが……。」

空になったカップをテーブルに置き、煉は鏡について説明する。

「これは真実の鏡とかいう代物らしくてな。簡単に説明するとこい

つを使えば自分や相手のステータスを知ることができる。」
「それはまたゲームみたいな代物だな。」

テラが実はゲームの世界なのではないかと思う。
だが、便利であることには変わりないので良しとしよう。

「試しに俺に使ってみな。使い方は簡単で霊器を使う時と同じ感覚で鏡を使えばいい。この時対象をイメージしておかないと不発に終わるから注意しろ。」

「分かった。なら早速……。」

自分にとって霊器を使う感覚として一番馴染み深いのは光弾を放つ時のものである。
その感覚を呼び覚ましながら煉の姿をイメージすると鏡に煉のステータスらしきものが映った。

名前 黒城 煉

体力

気力

力

頑丈

速力

知力

幸運

所持刻印

言語翻訳の聖痕

トランスレートコード
ウインドコード

風の刻印

フィジカルアップコード

体力増強の聖痕

ワールドトリップコード

世界渡りの聖痕

所持品

風水の短剣（装備中）

霊神より授かった霊器。

ウインドコード 湖の精霊により風の刻印が刻まれている。

今はまだ刻まれていないが水の刻印を刻むことで水の属性も使用可能となる。

学生服（装備中）

何の変哲もないただの布製の服。

森虎の毛皮

ティグルの毛皮。

森虎の牙

ティグルの牙

牙の刻印貨

巫女に渡し、触媒として用いることで牙の刻印を授かることができる。
ファンクコード

所持金無し

「おお、便利だな。」

「だろ？」

僕と煉にとってはRPGではお馴染みのものだったのであって便利
だなくらいしか思わなかった。

しかし、ファラにとってはそうでもなかったらしい。

「……何この便利過ぎる機能。しかも色々と凄すぎでしょ。知力が
五つ星とか学者になれるんじゃない？……？しかも六つ星の刻印^{コート}って何？」

うん、どうやらテラの人間にとってこのステータスは色々とあり得
ないらしい。完全に自分の世界に入ってしまったファラを放置して
今度は自分のステータスを表示する。

名前 葉山 駆

体力

気力

力

速力

頑丈

知力

幸運

所持刻印

言語翻訳の聖痕
トランスレートコード

体力増強の聖痕
フィジカルアップコード

世界渡りの聖痕
ワールドトリップコード

火の刻印
ファイアコード

所持品

四元の腕鎧

霊神から授かった霊器。

火、水、風、土の四属性の刻印^{コード}を刻むことができる。刻印はそれぞれ

の属性を持つ敵を倒すことで刻まれる。

得られる刻印^{コード}の星は倒した敵の強さに応じたものになる。

古びた鉄甲

使い古された鉄甲。それなりに頑丈である。

学生服

なんの変哲もないただの布製の服。

鱗の刻印貨

巫女に渡し、触媒として用いることで鱗の刻印^{コード}を得ることができる。

愉快的ガイドブック

便利だが人間味に溢れ過ぎてクレームが殺到したガイドブック

不思議なポーチ

なんでも入る不思議なポーチ。生物は入らない。

所持金九千エン

「……お前チートじゃね？」

「……末期の中二病患者が考えたような設定だな。」

幸運を除けばほとんどが煉よりも星が多い。

何故こうなったのだろうか？

「……うん、なんだかもう慣れたよ。というかさっきから気になってたけど霊神様から授かった霊器って何？」

ひとまず落ち着いたように見えたので煉と二人で質問に答える。

「何ってそりゃ……。」

「文字通り霊神とやらが寄越した代物だが？」

意外と僕達二人は息が合うらしい。

「……君達は本当に私と住む世界が違うんだね。ごめん、サヤ。私今無性にあなたに会いたいよ……。」

どうやら再び自分の世界に閉じ籠ってしまっただけらしい。

「……いや、だからそうだって言っただろ。俺達は地球でお前等はテラの人間だって。話聞いてたのか？てかさやって誰だ？」

そして煉。お前は空気読め。
サヤが誰なのかについては僕も気になるが。

「それにしてもまさか駆がこんな奴だったとは思わなかったぜ。」
「まあ趣味のためなら努力は惜しまんよ。」

どうやら煉は僕のことを地味な奴だと思ってたらしい。
まあそれが狙いなんだが。

「お前の趣味って確か傍観だとか言ってたよな？けどなんでずっと隠してたんだ？」

「まあなんていうかやり過ぎてな……。」

煉には別に教えても構わないだろう。

「この趣味ができて最初の頃はまだクラスメイトとかが対象でどちらかというと人間観察って感じだったんだ。」

「まあそうだろうな。」

「最初はそれで満足してたんだが段々物足りなくなってきた。不良の喧嘩とか隠れて見るようになったのが始まりだ。」

一息吐くと一気に話す。

「最初は喧嘩見るだけだからどっちかというと観戦に近かったんだが負けた相手の制裁とかも見るようになってそこから本格的な傍観が始まったんだ。」

「なあ、嫌な予感しかしないんだが……。」

どうやら煉にはこの後の展開が予想できたらしい。
黒奉学園の生徒だというのは伊達ではない。

「最初は恐怖に震えながら見てたんだが段々そのスリルが堪らなくなつてな。何人か後をつけたりしてたらいよいよやばい現場に遭遇したんだ。」

「不良でしかもやばいってことは……。」

煉の顔が青ざめている。

恐らくその予想は当たっているだろう。

「不良が明らかに裏社会ですって感じの人から白い粉が入った袋を受け取ってたんだ。」

「やっぱりか……。」

うなだれるのはまだ早いぞ煉。
重要なのはここからだ。

「で、その白い粉を使って不良がおかしくなっていくのを笑いながら傍観してたんだ。」

「お前それは外道だろ！なんで警察とかに通報しなかったんだ！」

「その時僕まだ九歳だから白い粉がなんなのか分からなかったんだよ！」

最近ではどのくらいの学年で教えられるのか知らないが少なくとも僕が小学校三年生の時は教えてくれなかった。

「話を続けるけどまあそんな感じで芋づる式にやばい現場に遭遇するようになったんだ。」

「深みに嵌まっていったとも言っな。」

うるさい。少し黙れ煉。

「……で、結局小学校六年生の時に道徳かなんかの授業で麻薬の危険性について教えられるまで白い粉がやばいものだとか付かなくな。」

「……気付くまでの三年間で引き返せないレベルのところまで行ったと。」

呆れたように話す煉の言葉はどこか確信を持っているようだった。

「お前な、いくら引き返せないレベルまで癖になったとしても通報はするべきだろ！」

確かに煉の言うことは正しい。

だが、それで解決するような問題ではなかったのだ。

「勿論したさ。……けど、駄目だった。」
「どういうことだ？」

煉が訳が分からんといった感じで聞いてくるが無理もないだろう。
あの時の僕だってまさかあんなことになるとは全く予想できなかったのだから。

「その麻薬の取引に警察の人間も関わっててな、すぐに揉み消された。しかもどうやらそのために警察に入ったらしい。」

「な……！？」

彼らは考えた。どうすればより安全に麻薬の取引を行えるかなにせ誰かに目撃されていたらすぐに警察に通報されてしまう。それを防ぐためには目撃者を口止めするしかない。

だが、目撃者がいることに気付かなかった場合は防ぎようがないのだ。

「そこで考えた解決策ってのが……。」

「……あらかじめ警察内部に潜り込ませていた仲間に揉み消させ、通報した目撃者の情報をリークさせるということか。」

あの時は本当に大変だった。

「そう簡単に表沙汰にはならないだろうと思ってたら半年が経つてな。流石に怪しいと思ってネットで何か関係ありそうな情報を調べてたらとんでもないもんが見つかったんだ。」

それは当時まだ小学生だった自分にとっても残酷過ぎるものであった。

「僕が傍観してた不良達が全員行方不明になってたんだ。」
「おい、それって……！」

煉は息を呑んだ。

「そいつらは今も見つかってない。つまりそういうことだろ……。」
「マジかよ……。」

その数十五人。間接的とはいえ彼らがそうなった原因は僕にある。

「だから傍観するのをやめてほとぼりが冷めるのを待つことにしたんだ。」

当時の僕にはそれが最善だと思えたのだ。

「一ついいか？なんかこの話の流れだとお前が未だに傍観が趣味でそんな技術を持つことはまずないように思えるんだが……。」

その疑問は最もだ。

しかし傍観は唯一の趣味なので仕方ない。

だが、技術の方は自分でも予想外の形で習得することになったのだ。

「煉はさ、ラットって知ってるか？」

「ラット？ああ、もしかしてあの有名なクラッカーのことか？正体不明でネズミが餌を食い荒らしたみたいに根こそぎデータを奪って破壊する……ってまさかそれがお前とか……。」

まあ話の流れからしてそう思われても仕方ない。

だが正解ではない、と告げると煉は明らかにホッとした。

「ああ、良かった。そうだよな！流石にそれはないよな！」

そう、僕ではない。僕では、ね。

「そんなの当たり前だろ。」

「そうだよな！はっはっはっはっはっはっ！」

「もし僕がラットだったら本物、ていうかじっちゃんに潰されるっての！」

「そっかそっかー！はっはっはっはっはっ……は？」

あ、煉が固まった。

「うん、ちょっと待って駆君？」

と思ったら十秒足らずで再起動した。
意外と早いな。

「じつちゃんってこの山荘の持ち主の？」

なんでだろう？煉が煤けてるように見える。

「表向きには一昨年亡くなってるから正確には元持ち主な。今は僕のものになってる。」

あれ？煉の眼が段々白くなってる？

「……そのじつちゃんがラット？」
「ああ。」

あ、口から白いもやっぱいのが出て来た。

「サヤ……こんな時はどうすれば良いのかな？ねえ？」

「非常識な事態に巻き込まれたと思ったら非常識な奴が実は身近にいましたって何？なんなの？俺にストレスで死ねと言ってんの？俺なんかした？」

明け方の工作が上手くいったか確認してリビングに戻ってきたらそこはカオスでした。

「……この二人を放置したのは失敗だったな。」

正直対応に困る。いや、処理に困るの間違いか。少なくとも目の前の物体を人として認めていい気がしない。

「ふふふふふ……。」

「ははははは……。」

「……あの骸骨頭をもう一度倒すのどこいつらへの対処のどっちが

マシが聞かれても多分骸骨頭の方がマシだろうな。」

改めて二人を見る。

「ふふふふふ……。」

ファラは刻印術を使ってるのか知らんが寒気がするオーラが放出されているのが幻視できる。そして低い声で笑っている。俯いていて表情がよく見えないところが怖い。

「ははははは……。」

煉は明らかに刻印術を使っている。

そこそこ長い彼の髪の毛風に揺られてまるで生きているかのように蠢いている。

ファラと違って俯いてはいないが天を仰ぐようにして笑っている。ただし眼がどこか遠くを見ている。

「ふふふふ……。」

「はははは……。」

結論、この二人はマジでカオス。迂闊に触れると何が起こるか不明であるが放置するとさらに悪化する可能性大。

「……これしかないか。」

よって対処法は、

「世界渡りの聖痕^{コトヱ}よ……。」

テラに放り込むことが最善だろう。

「開け、異界の門。来たれ、導き手。異界渡り（ワールドトリップ）
！」

そして、悪夢は再来する。二人限定で。

「さて、目の前の問題は片付いたことだし。」

産業廃棄物に例えていいぐらい謎で危険な物体はたった今球体によりテラへと運ばれていった。

「資金は大切だから換金用の十円玉をあるだけ用意するか。後は何か小さくて持ち運びやすいものも見繕って……!？」
「イイノデスカ？」

いつの間にか目の前に喋るガイドブックが浮かんでいた。

「いつの間に出て来た？というかがだ？」
「デテキタノハアナタガナマモノフタツヲショブンシテタトキデス。ソシテソノナマモノハアナタノナカマデハナイノデスカ？」

つまり仲間にあんな扱いをして良いのかと聞きたいのだろう。
にしても……。

「なんかお前の言葉昨日以上に聞き取り辛くなつてないか？」
「セカイタンイデカンキョウガカワツタライチヨウモアツカスル
ニキマツテマスデショウ。ブツチャケイマニモハキソウデス。」

……いや、それは無理だろう。
確かにさっき真実の鏡で見た時に人間味に溢れ過ぎていてクレーム
が殺到したとかいう曰く付きの代物とかデータにあったけどまさか
そこまで再現……。

「ア、ヤベエ。ナンカモウココマデキテル。カラフルナヤツガペー
ジノスキマカラモレテキテル。ネエ、ミエテル？ミエテルヨネ？ウ
タシイマニモハキソウナンデスケドココデハイテイイスカ？」
「再現してやがる！？」

やばい、なんか濁った虹色にカラフルなラメを混ぜ込んだみたいな
色になってやがる！？

ていうかこれこの世にあつていい物質なのか！？
未元物質ダークマターなのか？ そうなのか！？

「チョッ、モウムリ。コラエラレン。」

「いや、待て待て待てえい！！吐くな、堪えろ、むしろ飲み込め！」

何が悲しくて居間を未元物質ダークマターで汚染されなあかんだ！

「ア、デル。」

「させるかあああああ！開け、門！球体再召喚！」

そして、悪夢ダークマターは悪夢（光る球体）によって回避された。

「ハアアア……。危ないところだった。」

冷蔵庫から取り出した缶コーヒーを飲みながらソファに身体を委ねる。

「あゝ、まだ昼前なのになんでこんなに疲れなきゃならないんだか……。」

具体的な例を挙げるならとある企業の依頼でまる二日間完徹でサイバーテロ対策プログラムを構築した時と同じくらいの疲労感だ。

「しかも今回はあの時と違って報酬ゼロ。疲労感とはまた別に変な気分になるな……。」

こういう時は甘いものとか精のつくものを食べた方が良さだろう。よし、今日の昼飯はうな重と大量の甘味をこれでもかと言うくらい摂取に行こう。
だけどもあ……。

「あいつら二人を置いて一人で行くのも気分悪いしとりあえず一時くらいまで待ちますか。」

缶コーヒーの残りを一気に飲み干すとソファから立ち上がり流しに空き缶を置く。

それが終わると自然と欠伸が出てきた。

「ふわぁ……。やっぱりまだ疲れがとれてなかったか。一時までまだ時間あるし昼寝でもするか。」

再びソファまで戻ると昨日使った毛布にまたくるまり携帯のアラームタイマーをセットして眠りにつく。

「そっぴゃあのガイドブックどうしようかな……。」

暫く考えていたが眠気が襲ってきたためまともな思考ができなくなってきた。

「まあいいか。回収出来る機会があつたらその時の気分で回収する
つてことで。便利ではあつても扱い辛いし未元物質ダークマター吐くような代物
は正直持つていたくないしな……。」

故にあまり深く考えずにそのまま眠りにつくことにした。

「あゝ、カケル君早くこつちに戻ってこないかなー。」

座っている安楽椅子を揺らしながら少女は呟く。

「あの子がテラにいてくれないと続きが書けなくて暇なんだよねー。」

「

先程まで使っていた木製の机の上には羽ペンが数本とインク壺が二
つ、そして書きかけの本が開いたまま放置されていた。

「お姉さんは退屈だよー。女性を待たせるのは関心しないよ。」

幼い子供が駄々をこねるように足をバタバタさせていると待ち望んでいたことが訪れた。

「お？ようやく来ましたかー。」

少女はカケルが聖痕コードを使った気配を感じ取ったのだ。

「よーしー！気合い入れますかー！」

よっ！という掛け声と共に勢いよく安楽椅子から立ち上がった少女は背もたれが付いた木製の椅子を引き、腰を下ろした。
そして半日ぶりに木製の机に向き合う。

「さーで、それじゃカケル君じゃないけど傍観しますかー。」

そして机に肘をつき祈るように組んだ両手に額をつけ、眼を閉じると詠唱を紡ぐ。

「遠見の刻印よ。ディスタントコード我が望みし景色を我が閉じられし眼に映したまえ。
ゴッドアイ神の眼。」

詠唱が終わると少女の閉じられた眼は暗闇ではなく白い霧のようなものが映るようになっていた。

（さーて、カケル君はどこかなー？）

気配を便りに探しているとおかしなことに気がついた。

（あれー？テラへの門を通っているのが二人なのはファラちゃんも一緒だからだろうから分かるけどー……？）

きよとんとした顔をして疑問を心の内で呟く。

（なんで片方はウィザニアに向かってないのー？）

一瞬事故かと思いそちらに向かおうとしたが普通に考えて門を開いた術者が目的地を間違えるはずがない。

恐らく慣れない刻印術を使ったため制御が甘くなり術者でないアラが違う所に飛ばされることになったのだろうと自己完結する。

故に少女はウィザニアに飛ばされた恐らくカケルだと思われる方に意識を集中することにした。

それが間違いだということはおろかカケルはテラに来てすらいないことも知らずに……。

（えっとー。こうしてああして……あ！見えてきたー。）

意識をウィザニアに飛んだ方に向けると視界一面の白い靄は晴れていき、やがて一つの風景が見えてきた。

（よしよし繋がったーってあれー？）

だが、そこにいたのはカケルではなかった。

「うゝ、痛かった。」

「私の方が痛いわああああ！見てみこれ、このタンコブ！そこに落ちてる杖が直撃したんですけど！！」

ウィザニアに飛ばされたのはファラだった。

（あれ、おかしいなー？こつちだと思ったんだけど……。）

悩んでいる少女を余所に二人の会話は進む。

「てゆうかなんで人が落ちてくんの？ここ一応『パルテ』でも一番警備が厳重だからそう簡単には入ってこれないんだけど？」

「あ、私の名前はファラだよ。」

「あ、これはどうもご丁寧に。私はイリナと申しま……って違う！」

イリナはファラのマイペースぶりに流されかけたがすぐにハッと

なつて自我を取り戻す。

「そんなこと聞いてるんじゃないんでここに侵入したか聞いてんの！返答によつては……！」

排除すると言わんばかりに懷から取り出したカードを構えて威嚇するイリナ。

だが、相手が悪かった。イリナの目の前にいる少女は天然なのだ。

「か……。」
「か？」

自分を見て何かを言おうとし、言葉に詰まったファラに続きを促そうとするイリナ。

彼女は威嚇と警戒は続けていたが次のファラの発言で固まってしまった。

「可愛い……!!」
「はいいいい!!？」

思わず奇声をあげて威嚇と警戒を解いてしまう。
その隙にファラはイリナに抱きついた。

「イリナちゃん可愛い！すっごく可愛い！」

「いや、あの、ちょっと!？」

必死でもがくが未だにショックから抜け出し切れていないイリナは
ただもがくだけでファラの抱擁から抜け出せそうにない。

そしてその行動は抱き付かれて恥ずかしいから暴れる幼児にしか見
えず、天然の庇護欲をくすぐった。
ファラ

「照れてるの？大丈夫だってなにもしないから。」

「いや、だったら離して……むがつ!？」

ファラはイリナを抱き締める力を強め、結果としてイリナの顔が自
分の胸に埋まる形になった。

「むがつ、むごご!（何なんだこの女！私は巫女だぞ偉いんだぞ！

？それをこんななれなく。しかも昨日私の禁句を言ったあいつと同じくらいの年じゃないのか！？年上を敬うってことをどいつもこいつも……！」

憤るイリナだがふとあることに気付く。

「ん？（この感触は……）」

「あれ？どうかしたの？」

ピタリと動きを止めたイリナを不審に思ったファラは一旦自分の胸からイリナを解放した。

「……なあ？」

「ん？何？」

イリナは俯きながら重い声で尋ねる。

「あんたの胸ってまさか……。」

「胸？……ああ！」

ファラは胸と聞かれて何のことか最初は分からなかったがすぐにイリナの言いたいことを理解する。

「これ重いし揺れるし肩凝るから下着の上から布で押さえ付けてるんだ。」

ビシッ！と音をたててイリナは石のように固まった。

「イリナちゃんも苦労するでしょ？私もそうだし。冒険者になると戦闘中とか揺れて邪魔になるからちよつと窮屈だけど強めに押さえ付けてるんだよね。」

のほほんと言うファラだがそれに対してイリナは内心穏やかではない。

「（胸、胸が……！背が低くて童顔な私が今まで他の女性に唯一勝

ち続けてきたとりえが……。私の女性としての最大の防御壁が……！」

暫く混乱していたイリナだがなんとか気持ちを落ち着ける。

そして自分の女性としてのプライドのためにも怖々のだがファラに尋ねることにした。

「あ、あの……。」

「ん？どうかした？」

無邪気に笑うファラにどもりながら尋ねる。

「む、胸……。いくつですか？」

「え？んつとね……。」

そしてそれは告げられた。

（うわー、これはないわー。）

少女の目には灰のようになってしまったイリナとそんな彼女を見て
慌てるファラが映っていた。

（まあ確かに自分より五センチも大きかったらショックだよなー。）

少女は自分の胸を確かめるように触った。

（けど私より二センチ小さいんだよなー。ファラって子ー。）

ふふんっ！とどこか誇らしげである。

（ま、それは置いてそろそろ本命を見ますかー。）

そして少女はテラに落ちたもう一人の気配を辿り始める。

（えーっと……。あ、ここだ！）

気配はすぐに見つかり少女は早速視界をそちらに移すことにした。
すると今までファラとイリナを映していた視界は白くぼやけ、新たな風景が映し出された。

（さーで、いよいよカケル君だー。羽ペンOKインクもOK何時でも……。）

新しく映し出された場所は森に囲まれた美しい湖で

（傍観&記録OK！……ってなんじゃこりゃー！？）

現在進行形でカラフルな液体に汚染されていた。

（カケルくううん！？君何を思っ環環境破壊なんてやっちゃって
るのおおおおお！？）

淑女にあるまじき声をあげる少女（そもそも淑女ではないし心の声
なので誰にも聞こえないが）。

だが彼女の眼に映るものを考えたらそれも仕方ないだろう。

「ギャアアアアア！私の湖があああああ！？」

「気がついたら目の前がカオスってどんな状況だよ！？何が起こつ
たああああ！？」

汚染されていく湖を眼にしてこの世の終わりだとばかりに絶望した
声をあげる女性と状況が掴めず混乱する少年。

女性はこの湖の精霊で少年の方はカケルに産業廃棄物の如くテラに
落とされた（捨てられた）煉だった。

「レエエエエ！さっさとこいつを止めるおおおお！！」

「できるか！つか何で俺！？」

煉は即座に拒否する。だが、湖の精霊としては至極真つ当な理由があった。

「うるさい！貴様が出てきた球体と同じものから出てきたのだから貴様がやって当然だろう！！」

球体と聞いて固まった煉だが直ぐに己を取り戻し、叫んだ。

「あの悪夢（球体）が原因かああああ！！」

時は溯り十分前。ファラがイリナに頭突きをかました時の事である。湖の精霊は暇を持て余していた。自分がいる場所は滅多なことでは人が入ってくることはないためこれといった変化もなく、やることが何も無いのだ。

最近あった唯一の変化と言えば少年が一人ここに偶然訪れたぐらいである。

何か暇つぶしを、と考えているとそれは現れた。

「玉？しかも光ってる？」

光る球体が。

突然のことに呆ける精霊を尻目に球体は見覚えのあるものを吐き出した。煉である。

暇つぶし道具が来た！と喜ぶ精霊だがその道具は

バツシャアアアン！

と凄まじい音を立てながら水面に叩き付けられた。そして水飛沫が収まった場所には水死体が一体。

「え？あれ？……もしもーし？」

だが返事はない。よく見ると痙攣しているので水死体（仮）のようだ。

流石に哀れだったので湖から引き揚げることにした。

「さーてと。」

そうと決めた精霊は何処からか三叉槍を取り出すと煉に向けて軽く振った。

「ハイドロハント
水流操作。」

すると湖面が滑らかに動き、煉の身体は氷の上を滑るかのようには運ばれていった。

「これでよし。あとは水の治癒ヒールでもかけて……ん？」

ふと上空に目をやるとそこには先程消えた筈の球体が再び出現していた。

「なんだ？まだ何か……。」

そして、^{ダークマター}悪夢は落とされた。

オボロオオオ！！

何か聞いてはいけない声が聞こえた瞬間光る球体は怪しく光る物体を投下、いや嘔吐した。

幸い精霊は煉の治療のため湖の端にいたため謎の物体を被ることは免れた。

だが

「あゝあゝあゝあゝあゝ！？わ、私の湖がああああああ！！」

精霊の湖（住家）は大量に謎の物体を投下された。それはもうたっぷりと。美しく透き通っていた湖の水がこの世のものとは思えない色になるまでたっぷりと。

そして現在。未だに^{ダークマター}悪夢は終わらない。

この日、二人の女性に一つずつ悪夢と絶望が落とされた。

一人は人間。落とされた悪夢は誇りの敗北（胸のサイズで年下に負けた）。絶望は己の全ての喪失（女性としてのプライドを全て失った）。

一人は精霊。悪夢は未知なるものへの恐怖。^{ダークマター}絶望は居場所の喪失（住家の湖を汚染された）。それらをもたらしたのは底知れぬ悪夢（光る球体）。

そしてそれをこの世に呼んだのは

「ん。やっぱり後五分……。」

何かを企む異能力者（二度寝しようとする刻印術師）たる少年^{カケル}。

（……うん。灰になった合法ロリとそれに驚く天然少女。絶望する精霊と理不尽に憤る少年。これだけ聞くと面白そうだけど……。）

溜め息をつき、神の眼の視界^{ゴッドアイ}に映る景色を見る。

（カオスだからなあ……。何より可哀想だし書かないであげよう。）

傍観者にして書き手たる少女はせめてもの慈悲を与えることにしようだ。

（いや、まてよ？この流れでいくとファラとイリナのレスカップル、煉と精霊の異種族カップル成立？いやいやそれだとカケル君のヒロインが！……主人公お決まりのフラグ体質ですぐに候補が出来そう

だし問題ないか。)

追加訂正。僅かな慈悲と共にとんでもない災厄を与えそうです。

対象者の方々は今すぐ何処か遠く、地球とは別の異世界にでも逃げて下さい。

レズカップル成立のフラグと異種族カップル成立のフラグが立ちました。

頑張っへし折って下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2170n/>

そして傍観者は物語を紡ぐ

2011年10月31日03時08分発行